trinity

トウリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｔｒｉｎｉｔｙ

【Ｎコード】
Ｎ２５６０Ｘ

【作者名】
トウリン

【あらすじ】
瑠衣と抄樹は、父との３人暮らしで平凡に、幸せに暮らしていた。そこに、ある日父の友人の子であるレイが、母を事故で失い引き取られてくる。瑠衣、抄樹、レイの３人が揃った時、日常が音を立てて崩れていく……
のべぷろ！（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｎｏｖｅｐｒｏ．ｊｐ）に投稿した作品です。
１２／２７、レイ視点でのエピローグ追加のみの変更です。

プロローグ

二人の子供が、黒服の大人の中に埋もれている。
線香の紫煙を掻き乱しながら動き回る大人たちの中で、二人はいかにも頼りなく見えた。
少女は小学校に入ったかどうか、少年のほうはそれよりも二、三歳年下のようだ。
父親の姿を探して心細げに泣く少年を気に留める大人はいない。
突然舞い込んだ訃報に、彼らは皆、大童だったのだ。
少女だけが、懸命に声を掛けていた。
理由の解らない――あるいはぼんやりと解っていても認めたくない――不安に押し潰されて泣きじゃくる少年を、少女は精一杯抱き締める。
「あーちゃん、泣きたかったら、泣いてもいいんだよ。泣くとね、涙と一緒に、悲しいことも心の中から流し出してくれるの。でもね、涙が止まったら強くならなきゃだめだよ。男の子は、女の子を護れなくちゃね」
舌足らずな口調で、言う。
この葬式で初めて会った少女。
だが、その温もりも、その声も、何故か懐かしいものだった。
少年には、彼女の言葉の半分も理解できなかったが、それでも、それは深く胸に刻み込まれる。
「うん……うん、ぼく、強くなる。絶対、強くなってやる。強くなって、護る」
誰を、あるいは何を、とは口に出さなかったけれど、その相手は、彼の心の中ではしっかりとした形を取っていた。
今、この時、彼を抱き締めていてくれるこの少女。心細さで潰されそうな彼を優しい温もりで包んでいてくれる、この少女。
少年が護るべきはこの少女しかいない。

不思議なほどの確かさで、その誓いは成された。
そして、彼は、この約束を決して違えることはなかったのだ。

一

「あーちゃん、あーちゃん？起きて」

春眠暁を覚えず、の言葉どおりに、麗らかな春の陽射しに誘われて、中庭の芝生の上で過去の思い出に浸りきっていた抄樹（あつき）は、夢の中の少女の十年後の姿を突然目にし、一瞬、混乱した。

「ああ……瑠衣（るい）か」

眩しさに目をこする。腕時計は、午後四時四十五分を指していた。昼食を摂ってからずっと寝ていたから、昼寝には充分すぎるほどだ。

「最近、よく寝るね」

少女がクスクスと笑いながら、少し腰を屈めて手を差し出した。

「だめだよ、あーちゃん。授業サボって、こんなところでお昼寝なんかして。数学の大田先生に泣きつかれちゃったよ。あと、担任の杉山先生にも」

そう言って、瑠衣は軽く抄樹を睨む。大きなその目は、いつでも楽しそうに輝いている。

瑠衣は、身内の欲目――というより、惚れた弱みを除いても、充分な美少女だ。美女ではない。そう評するにはあまりに子供っぽい。

瑠衣と信彦親子のもとに引き取られたのは抄樹が四歳の時で、以来多くの女子を見てきたし、告白もされてきたが、彼はこの血のつながらない姉一筋だった。――残念なことに、その気持ちは、瑠衣にはサッパリ伝わっていないが。

中学三年生にして身長が百八十センチ弱あり、全体的にがっしりしている抄樹と並ぶと、瑠衣の華奢な身体と童顔がより強調される。そのためか、実際には二年と半年ほど年上の瑠衣のほうが妹に見られることが殆どだった。

「あーちゃんを迎えに行ったら、大田先生があーちゃんの鞄持って待ってるんだもん」

軽いね、と言いながら、抄樹に鞄を渡す。それもそのはず、彼の

鞄の中身は殆ど入っていない。毎日持ち帰っているのは、弁当箱ぐらいだ。
「大田、ロリコン入ってるんじゃねえの？」
明後日の方を向いて、ボソリと呟く。瑠衣がきょとんとしたが、わざわざ教えてやる気は無い。
鈍い瑠衣は気付いていないが、器量良しの気立て良し、成績優秀、（少々運動神経は鈍いが）申し分無し、のお買い得品である彼女を射止めようと狙っている男は腐るほどいる。高等部と中等部という壁を物ともせずに睨みを利かせている抄樹が巨大な障壁となっているから、直接攻撃ができないだけなのだ。
解ってないよなぁ、と溜め息を吐いている抄樹の心など、瑠衣には知る由も無い。小首を傾げてきょとんと義弟を見つめる。
「なあに？」
「別に、お前っていっつも幸せそうだよなぁって思っただけだよ」
「それって、何だか、莫迦にされてるような気がする。まあ、いいけど、本当に幸せだから！」
ぷうっと頬が膨らんだ。
あまりにも似合いすぎる、その表情。
抄樹は思わずクラクラしてしまう。並の女がやったのでは鼻に付くような仕草でも、彼女は何気に可愛すぎるのだ。こういう仕草を、日々高等部の野郎共に見せているのかと思うと、頭が痛くなってくる。
額を押さえた抄樹の反応をどういう意味に取ったのか、瑠衣はますます頬を膨らませると、もうっと言って、背を向けた。
「昔はあんなに可愛かったのに。背だって私よりずっと小ちゃくて、女の子みたいだったのよね。いつの間にか、こんなに大きくなっちゃったけど」
こういう状況になると、いつもこれが始まる。抄樹が瑠衣よりも背が低かったのは、もう五年も前の話なのだが、彼女の頭の中には、まだ昨日のことのように残っているらしい。

今では抄樹の方が頭一つ分は高いのだが、その頃の話を出されると、流石にバツが悪い。
別の話を振ろうと抄樹が口を開きかけたが、それより早く、瑠衣が本題を思い出した。
「ま、いいわ。それより、早く帰ろ。今日は、ほら、アメリカから来るんだよ」
くるりと機嫌が変わる。
根に持たないのは瑠衣の良いところだが、話運びが唐突過ぎることも否めない。
「ほらぁ、早く！」
抄樹が思い出したくなかったことを思い出して瑠衣が上機嫌になっていることが、彼には面白くなかった。非常に嬉しそうな瑠衣の様子を、抄樹はズボンに付いた芝を叩き落しながら、横目で眺める。
彼の心境は、複雑だった。
「お前、さ。ガキが一人増えるのが、そんなに嬉しい？」
抄樹の捻くれた言い方に、瑠衣はすっぱりと切り返す。その質問自体が解らない、というふうに。
「もちろん。家族って、多ければ多いほど良いと思わない？お父さんとあーちゃんだけじゃ、ちょっと寂しいかなって、思ってたんだ。十四歳ってお父さん言ってたから、あーちゃんと同じ中等部だよね。ちょっと残念」
私も二人と一緒に学校に通いたかったなどと言いながらスキップしそうな勢いで前を歩く瑠衣の背中を見ながら、抄樹はボソリと呟く。
「俺にとっちゃ、不幸中の幸いだよな」
え？と訝しげに振り向く瑠衣に、別に、と手を振る。
実際、学校まで一緒にされては、堪ったものではない。女なら、構わなかった。いや、瑠衣のよい話し相手になってくれるだろうから、女なら歓迎すらしたであろう。
しかし、本日アメリカからやって来るのは、男である。十四歳で

は『男の子』とは言えない。立派な男だ。
悶々と物思いに耽る抄樹を現実に引き戻したのは、妙にはしゃいだ瑠衣の声であった。
「ねえ、あれ、お父さんじゃない？誰かと一緒だよ」
指差されたほうへと目をやると、確かに、見慣れた義父の背中と、その隣を歩くブロンドが見えた。抄樹も瑠衣もそう多くの白色人種にお目にかかったわけではないが、新しい家族となる少年のその金髪が並外れたものであることは二人にも判る。遠目には、純金の冠を被っているようだ。
早く行こう、と呼び掛けると同時にガードレールに両手を掛けて乗り越えようとする瑠衣を、抄樹は彼女の腰に腕を回して抱き上げた。
「あーちゃん？」
持ち上げられたまま心外そうな目を向ける瑠衣に、抄樹は顎をしゃくって答える。
「向こうに歩道橋があるだろ」
日頃『規則は破るためにある』という有名な格言を自ら実践している奴の言葉に、当然説得力など欠片もありはしない。
「いつもはあーちゃんがやってるじゃない」
当然返ってくる不平に一瞬返事に詰まるが、何とか尤もらしい理由を見つける。
「今日はいつもより車の量が多いだろ。それに、俺はいつでも避けられるから、いいんだよ」
「あーちゃんならほんとに車ぐらい簡単に避けちゃうだろうけど、車の量はいつもと同じだよ。それに、今、車来てなかったのに」
確かにスポーツ特待生の抄樹に対して、瑠衣は、小中高を通して通知票でお目にかかった体育の成績は、十段階評価の四までである。が、それでも、制限時速四十キロの、非常に見通しの良い道路では、いくら彼女でも車にぶつかるわけが無かろう。
抄樹が理屈で瑠衣を負かすことは滅多に無く、結局、いつもの通

りごまかしの一手となる。といっても、ほんの少し気を逸らせればいいだけなのだが――あまりにもベタな言い逃れでも通用してしまうので、抄樹は時々、瑠衣は引っかかる振りをしてくれているだけなのではないかと勘繰ることもある。

今回も、瑠衣の思考は抄樹によってコロッと方向転換させられることとなった。

「……親父たち、行っちまったぞ」

「あっ、ほんとだ。あーちゃん、急ごっ！」

「へいへい」

走り出した瑠衣の後をボテボテと追いながら、内心苦笑する。

結局、家に着いてしまえば、二人が会うことが避けられないのは解りきっていることだ。それでも無駄な抵抗をしてしまうのは、アメリカからの少年の写真を見た時の瑠衣の反応が、心の底に引っかかっているからなのだろうか。

父からその写真を手渡されたとき、彼女は、まるで長年探していた生き別れの弟でもあるかのようにそれを見つめ、それから、強く胸に押し付けたのである。

どうかしたのか、と抄樹が問うと、瑠衣は笑みを浮かべたまま一言呟き、不意に意識を手放した。そして再び目を覚ましたとき、彼女は、写真を手にしてからのことは、何も覚えていなかったのだ。

「ただの貧血だろう」、とやけにアッサリ言い切った父親にも納得がいかなかったし、何よりも、彼女の呟いた、言葉。それが抄樹の心にはずっと引っかかっていた。

あの時、瑠衣は、確かに『三人が揃う』と言った。抄樹には、訳が解らなかった。『三人』のことも、目を覚ました彼女がまるでそのことを覚えていなかったことも。

先を急ぐ彼女の背中を、やりきれないような心持ちで見やる。

四歳のときに親と死に別れ、今の養父である九条信彦に引き取られて以来、瑠衣とはいつでも一緒にいた。

彼女よりも背が低かった頃から、初めて会ったときに言われた言

葉を、そして彼自身の中に刻まれた誓いを、守ろうとしてきたのだ。十年間は、短い時間ではない。
「ポッと出に負けて堪るか」
ぐっと手を握って呟いた独白は、何よりも自分自身に言い聞かせるためのものだった。
＊
結局、問題の少年と二人が初顔合わせすることになったのは、十分後、自宅の居間で、であった。
「やあ、お帰り。レイ、これが瑠衣と抄樹だ。二人とも、レイに挨拶をしなさい」
信彦の紹介を聞いていたのかいないのか、目の中にキラキラと星を浮かべた瑠衣の視線はその少年に釘付けとなる。
「わあっ、レイ君て、すごく綺麗。写真よりもずっと美人！」
両手を胸の前でしっかりと組んで、金髪の少年――レイに見惚れる瑠衣に、信彦は、軽く呆れたような言葉を返した。
「瑠衣……お前な、初対面の男に対して、美人はないだろう」
「えっ、あ、そうよね。ごめんね。私、瑠衣よ。よろしくね。……あーちゃん、ほら」
「……抄樹だ。よろしく」
瑠衣に促され、全くそんな気もなく、抄樹は友好を契る言葉を口にする。心がこもっていないことに気が付いたのは、それを向けられた本人のみのようだ。
レイは片方の眉をほんの一瞬持ち上げ、それからすぐに微笑を浮かべて返事をする。
悔しいけれども完璧な、天使の微笑だった。
「こちらこそ、これからお世話になります。よろしくお願いします」
きっちり四十五度上体を前に倒し、文句のつけようのない優等生ぶりは、あたかもホームステイにでも来たかのようだ。
そんなレイの様子を見て、瑠衣は何かを言いたそうな素振りを見せる。数瞬口籠り、結局その台詞は外に出されることなく彼女の胸

の内に留められることになった。
「うん、よろしくね。でも『お世話になる』わけじゃ、ないのよ。忘れないでね」
真直ぐに彼の紺碧の瞳を見つめながら、両手でレイの右手を握る。
「それじゃあ、レイ。部屋を用意してあるから、荷物を置いておいで。階段を上がって左に三列並んだうちの、真ん中の部屋だよ」
「はい、ありがとうございます」
非常に礼儀正しい態度なのだが、その様子はどこか捉え所が無く、まるで分厚い氷を隔てて相対しているような感じである。
そのレイは、抄樹の横を通り抜けるとき、ボソリと何事かを呟いた。
並よりも聴覚の優れている抄樹の耳は、その呟きを逃すことなく聞きつける。
「頭が弱いんじゃないのか、あの女」
あの少年は、確かに、そう言った。澄ました顔で。
――あの野郎！
「あーちゃん？」
カッとして振り向いた抄樹を、瑠衣が驚いたように見上げたが、まさか本当のことを言うわけにもいくまい。
なんでもない、とムスッとした顔で言う。瑠衣は首を傾げて彼を見たが、それ以上追及しなかった。
レイの足音が階段を上りきったのを確認してから、信彦は、瑠衣と抄樹に向き直る。
「この間も言ったとおり、彼のＩＱは通常のテストでは結果を出すことができないほどの、まあ、いわゆる天才というやつだ。しかし、十四歳であるということには変わりが無い」
これを聞いて抄樹は、何が天才様だよ、と思ったが、辛うじてそれを心の呟きに止める。
抄樹が内心で毒づいているとは露知らず、信彦は沈んだ声で先を続けた。

「彼の母親の葬儀のときにしても、非常に落ち着いていた、と近所の人たちは言っていたが、悲しんでいないはずがない。亡くなりかたも酷かったしな」
信彦は眼鏡を取って両目の間を揉んだ。
非常に親しい友人だったと言い張り、無理を言って遺体を見せてもらったのだ。美しい人だったのに、確認を歯形で取らなければならないほど、それは損傷していた。
彼は眼鏡を掛け直す。
「まあ、必要以上に気を使うことは無いが、心には置いておいてくれ」
そう言う信彦の瞳にも、友人を亡くした悲しみが残っている。
しかし、それだけでは無いようにも見えた。
悲しみの陰に、チラチラと不安――あるいはそれに類似したものが見え隠れする。
二人の子供はそれに気付いたが、その不安の素の正体を尋ねようと口を開きかけたところで、耳に届いたレイが階段を下りてくる足音がそれを凍らせる。
一瞬そちらに気を取られた二人が信彦に目を戻したときには、彼の不安はまるきり姿を消しており、彼らは尋ねる時期を逸してしまう。
まあ、いいや。
瑠衣と抄樹は互いに視線を交わすと、何も気付かなかったふりをすることを決め込んだ。
信彦が言いたがらないときには、絶対口を割りはしないのだ。
血の繋がりも無いのに、そういうところは瑠衣と信彦はよく似ている。
何となく笑みを漏らした抄樹を、瑠衣は不思議そうに見た。
「どうしたの？」
「別に、何でもないよ。それより、飯は？」
「ああ、そうだな。そろそろ六時になるぞ」

育ち盛りの十四歳と、成長は終わったがスマートな割にはよく食べる五十二歳に促され、一家の健全な生活を預かる瑠衣は、時間を思い出す。
「大変、早く仕度しなきゃ。レイ君、今日はご馳走たくさん作るからね。あーちゃんもレイ君も育ち盛りだから、いっぱい食べなくちゃ。二人ともどんどん大きくなるんだから」
丁度居間の戸口に現れたレイの横を小走りで通り過ぎながら、瑠衣は彼に笑いかけた。
その後に抄樹も続く。
擦れ違いざまにレイの腕を掴んだ。
「俺も手伝う。レイ、お前も来い」
九条家の台所はかなり広く、野郎の一人や二人増えたところで行動に支障は出ない。
子供たち三人が姿を消すと、微笑を浮かべながらそれを見送っていた信彦の目に、再び、先ほどよりも更に色濃く、不安が浮かび上がってきた。泥沼に潜るようにソファに身を沈め、両手で顔を覆う。
今はすでにこの世を離れてしまった抄樹の養父とレイの養母――友人であった二人を思い起こす。
「魁、マリア。三人が集まってしまった。これは本当に偶然なのか？……そうであって欲しい。そうであることを願いたいが、可能性は低い」
目を閉じて天を仰ぎ、大きく息を吐く。
「私は、どうしたらいい？あの子達を護りきるには、どうしたらいいんだ……？」
苦しそうなその言葉に、答えてくれるものはいなかった。
二人の友人が生きていたとしても、やはり、確かな答えは得られなかっただろう。彼らに尋ねられても、信彦には答えられないのと同じように。

二

――瑠衣(るい)……瑠衣。泣くなよ。俺が護ってやるよ。誰が、何をした？ほら、言えよ。

しかし、少女は、頬に涙を伝わらせながらも微笑んで、静かに首を振った。

その儚い微笑みが心を締め付ける。彼女の笑みは、太陽に向かう向日葵のようなものでなければならなかった。

彼は懸命に腕を伸ばしたが、届かない。

抱き締めることさえできるような距離にいる少女なのに、なかなか、手が、その肩に触れない。

あと少し。

ああ、届いた。

そう思った瞬間、彼女の姿は掻き消すようにどこかへ失せる。

慌てて周囲を見回すと、離れたところに、三歳ほどの幼女の姿が浮かび上がった。

――あれは……あれも、瑠衣？

確かに、同じ存在だった。

でも、俺が初めて瑠衣を見たのは、あいつが七歳のときじゃなかったっけ？何で、あんなに小せぇんだ？

瑠衣が六歳の頃に火事にあったとかで、彼女が幼い頃の写真も失われており、抄樹(あつき)はそれ以前の瑠衣を見たことは無いはずだった。

不可解さが頭をよぎったが、泣いている瑠衣が目の前にいることには変わりが無い。

走り寄ろうとしたところで、彼女が何かを言っていることに気が付いた。

しかし、距離があるために、その声は届かない。

口の形だけで内容を理解しようとするが、はっきりとは見えず、やきもきする。

声が届かないことを悟ったのか、少女は言葉を紡ぐのを止めて、再び、涙を流す。
三歳の子供の泣き方には見えない、静かな涙。
それを止めたくて、彼は思わず、声に出して呟いた。
「泣くなよ」
――……あれ？
その声で、抄樹は、自分が今まで夢の中にいたことを知らされる。
「夢、か……。……？」
ほっと息を吐いたが、彼は、たった一つだけ、夢の中から付いてきたものがあることに気が付く。あるいは、これが原因で、あんな夢を見たのだろうか？
耳を澄ますと、静寂の中に、微かに聞こえた。
――誰か、泣いている？
はっきりと聞こえるわけではないが、誰かが声を押し殺して泣いている気配がする。
初めは夢と混同しているのかと思ったが、そうではなかった。声の主は、おそらく、レイ。
瑠衣でないのならば無視してしまえ、とばかりに布団を被るが、一度気付いてしまうと、どうにも耳に付く。並より優れている五感も災いした。
「安眠妨害だぞ、あの野郎」
二度目の眠りに入れず、抄樹は呻く。
金髪の少年があの時すれ違いざまに吐いた、あの暴言。あれは彼にとって、かなり強烈だった。最初の印象が悪すぎて、どうも寛大になれない。
時計を見ると、二時を回っている。
そろそろ夜更かしの瑠衣も眠りに就く頃だった。
寝つきも寝覚めも非常によい抄樹に対して、瑠衣の寝つきはやたらと悪い。この程度でも起きてしまうかもしれなかった。
「くそう。ただでさえあいつの睡眠時間は短いんだからな」

ぶつぶつ言いながら、足音を忍ばしてベッドを下りる。もともと、物音を立てずに身動きするたちだが、常よりも更に輪をかけて音を立てないように心がける。
そーっと歩いて、そーっとドアを開けて……。
「……あーちゃん？」
「うわっ！？」
背後からかけられた、全く予期していなかったその声に、抄樹は文字通り飛び上がらんばかりになる。ばくばくと激しく鳴る胸を片手で押さえ、彼は振り返った。
「瑠衣！？」
「いやぁね。何でそんなに驚くの？」
呆れたような目の前の義姉が、一瞬、夢の中の少女と重なった。そこに全く違和感は無い。まるで、彼女の幼い日の姿を見たことがあるかのようだ。
そんなはずは無いのに。
夢の中でのことだ、辛うじて残っていた写真でも見たことがあったのだろう、と理屈付けようとするが、何か頭の中がすっきりしない。忘れてはいけないことを、忘れてしまっているような気がする。
「あーちゃん？どうかした？」
考え込んだ抄樹を、空飛ぶ象よりも不思議なものを見るような顔つきで、瑠衣が見上げている。
――真剣に頭を使ってる俺が、そんなに珍しいのか？
確かに、考えることはあっても、考え込むことはめったに無いことは自分でも認めるが、ここまで意外そうに眺められると、少々複雑な気分になる。
「別に。それよか、瑠衣こそ何やってんだよ？」
答えは判っているのだが、一応、訊いてみる。
「あーちゃんと同じよ。……レイ君が、泣いているのよね」
昨日まで空室だった部屋のドアに目をやりながら、瑠衣は、抄樹に、というよりも自分に言い聞かせるように呟いた。

瑠衣は、雰囲気、というか、他者の感情の気配というものに対して、非常に敏感なのだ。他人の悲しみも、喜びも、正確に素早く感じ取ってしまう。

それは瑠衣に特別に備わっている能力というわけではなく、実は誰もが持っているべきものなのかもしれない。ただ、多くの人がその力によってもたらされる辛さに負けてしまい、いつの間にか手放してしまうそれを、彼女は失わずにいるだけなのだ。

――楽しいことにだけ敏感だったら、この上なく幸せなのにな。

瑠衣のそういう面を見ると、抄樹はいつもそう思わずにはいられない。楽しいことよりも辛いことのほうが多いこの世の中では、あまり歓迎できる能力とはいえないだろう。

他人の悲しみを我が事のように受け止めては声を殺して泣く瑠衣を見る度に、抄樹は彼女を真綿で何重にも包んで何処かに隠してしまいたくなる。

だが瑠衣は、どれだけ泣いても、やはり悲しみを見て見ぬ振りはできず、何度でも歩み寄っていくのだ。抄樹にできるのは、ただ傍にいることだけである。

そんな抄樹の心など知ることなく、瑠衣はレイの部屋の扉の前で軽く深呼吸した。

「レイ君、開けるよ？」

軽く、ノックをする。

数秒の沈黙の後に、返事があった。

「……どうぞ」

瑠衣だけが部屋の中に入る。抄樹は戸口に寄り掛かり、静観することにした。

「お二人とも、何の用ですか？こんな、夜遅くに」

声音だけからは、たった今まで泣いていたとは思えない。明かりを点ければ、微笑みさえ浮かべていることに気が付くだろう――口元だけの、ではあるが。

瑠衣はそんなレイに黙って近づき、ベッドの縁へ腰掛ける。じっ

と、彼を見つめた。
「何ですか？」
疑問というよりも戸惑いを声にしたような問いだったが、次の瞬間、彼はそんな些細なことなど、頭の中からすっ飛ばしていた。頭に押し付けられた柔らかな双丘の感触に、レイの頭は混乱の極致を迎える。
彼の頭は瑠衣の胸にしっかりと抱きしめられていた。
「な、何を！？」
「動かないで」
ほっそりとしているくせに柔らかな身体に頭を押し付けられ、レイが大慌てで彼女の腕を振り解こうとしたが、瑠衣はそれを穏やかに、しかし、逆らうことを許さない強さをも秘めて、制する。
その声が鋼の鎖にでもなったかのように、レイの抵抗はぴたりと止まる。
「泣きたいんでしょう？どうして隠すの」
「何を唐突に、僕は、別に……」
レイの反論を、瑠衣は軽く笑って、いなす。
「嘘。さっきまで、レイ君、泣きたいのを一生懸命に堪えていたわ」
返す言葉が無くて、彼はぐっと詰まる。
それは事実だった。だが、彼の目からは、決して涙がこぼれようとはしないのだ。永いことそうしてきたがために、嗚咽が漏れても、涙が溢れることはない。
「泣きたかったら、いくらでも泣いていいのよ。涙を堪えたままだと、いつまで経っても、悲しいことはレイ君の身体の中に残ってしまうわ。だから、泣きなさい」
背中に廻された瑠衣の手が、優しいリズムを刻む。
高く澄んだ柔らかなその声は、レイの心に静かにしみこんでいく。驚くほど素直に、それを受け入れることが出来た。
「でも、僕は、他の人とは違うんだ。そんな感情に流されては……」
「あら、どこが違うの？頭はとっても良いそうだけど、あーちゃん

と同じ、十四歳の男の子じゃない。まだまだ、子供よ。泣きたいときは泣けばいいし、怒りたいときは、そうすればいいのよ。あんまり過剰だと周りの人が迷惑するけど、そうならない程度なら、いいの」

あーちゃんも無表情で無愛想だけどね、怒るときは早いから、と当人に冗談めかして同意を求める瑠衣に、抄樹は肩を竦めて見せた。

瑠衣の腕の中で、レイは彼女のせりふを反芻する。初めて言われた、自分をさらけ出せという言葉。

知能指数という数字はレイから子供でいる時間を奪い去り、今まで、彼には完璧であることだけが求められてきた。お前は凡人とは違うのだ、というせりふと共に。

自分に対して周囲が求めている役割を無視することは出来ず、彼は無意識のうちにそれを演じていた。そうしなければ誰も自分のことを見てはくれないのではないだろうか――そんな恐れがレイの心の隅に居座っていたから。

「頭がいいっていうことが、大人だっていうことにはならないわ」

初めて顔を合わせた、あの時、自分は確かにこのひとを見下したはずだった。なんとあけすけで、幼稚なのだろう、と。正直なところ、知能の程度まで、疑った。

だが、今、彼女の言葉で、こんなにも自分は楽になっている。

涙が、自然と溢れていた。

知らず、嗚咽が漏れる。

トクン、トクン、と、押し付けられた耳に、規則正しい音が響く。それは、彼女が生きている証だった。

自分にもこのリズムがあるということを、いつの間に忘れてしまっていたのだろう。

瑠衣の鼓動を感じながら、レイは声を上げて泣いていた。

科学者であった、母マリアは、自分の持てる知識の全てを、レイに伝えてくれた。それが、学問に身を投じ、彼という息子は持ったが結婚をすることは無かった彼女の、精一杯の愛情表現であったの

だろう。
母の信じる愛の形を否定することがレイにはできなかったから、マリアもそれが彼の心を小さな箱の中に閉じ込めることになったことに気が付くことができなかったのだ。
そんな中で彼は年齢不相応に大人び、いつしか真の自分の感情と欲求から目を逸らすようになっていた。永久に手に入らなくなるまで、本当は己が何を欲しているのかという至極簡単なことに気付くことができなかった。
柔らかさと温かさ。
安らぎに身を包まれながら、レイには徐々に眠りが満ちてくる。
もう、母親が生きながらにして炎に包まれていく姿は、脳裏に浮かんでは来ない。
数十キロも離れた場所での事故だったというのに、まるでその場にいたかのように鮮明な悪夢が、毎晩彼を苛んだ。
飛び起きるたび、何も出来なかった、という罪悪感と――皆が誉めそやすこの能力は、大事なひとを護ることすらできないのだという無力感とに襲われた。
――そして、失ってしまった、愛情。
涙が溢れるたび、それは決して取り戻せないのだと心に刻まれ、同時にその悲しみと憤りは過去のものへと昇華されていく。
そこにできた新しい隙間は、別の想いで埋められていった。
今、自分を包んでいる、温もり。
この温もりは壊させない。どんなことをしても。絶対に、失わない。
夢うつつの中で、少女の身体に腕を廻し、しっかりと抱き締める。
まるで、溺れるものが一片の板切れにすがりつくかのように。
まるで、どんなものからもその存在を護ろうとするかのように。
＊
「おはよう、レイ君。いい朝だよ」
少々寝不足気味のレイをキッチンで迎えたのは、純日本風朝食―

―和風ではない――のにおいと、晴れやかな瑠衣の声だった。
――何でこんなに元気なんだ？
レイよりも、彼女の睡眠時間のほうが短いはずだ。にも拘らず、この軽快さ。
泣き顔を見られた照れ臭さよりも先に、三時間も寝ていないはずである彼女の元気さに、驚き呆れる。
「あーちゃん、起こしてきてくれる？まだ起きてこないの。一緒に学校行かないと、すぐにサボっちゃうんだもの」
それで、学校にいないと思ったら、街で喧嘩しているのよね。
瑠衣はおたまを持っていないほうの手を頬に当て、フウ、と溜め息を吐く。
何の武道の流派にも属していないにも拘らず、抄樹の戦い方は一分の隙も無く、完璧な攻撃と防御を見せた。
正当な理由なくして抄樹のほうからその拳を振り上げることは決してなかったが、売られた喧嘩は必ず買うという律儀さと、それに伴う彼の派手な戦歴は、素人のみならず玄人にまで一目置かれている。
買った喧嘩の数など覚えていられないが、両手両足の指を使っても足りないことは確かであり、未だに負け知らずであることもまた、真実であった。
弟のその方面における能力には揺るぎ無い信頼を置いているので、彼の身に対しての心配はしていないが、如何せん相手の被害が大きすぎる。
本人は手を抜いていると言い張り、実際にそうであるのだろうが、病院送りの数が多すぎた。
あくまでも相手から先に手を出し、その上、抄樹一人に対して向こうは五人以上であることが殆どなので、一応こちらには非が無いことにはなっているが、一歩間違えれば過剰防衛で前科持ちになりかねない。そうなったら、抄樹の一生はぶち壊しだ。
彼の母親代わりだと――自分では――思っている瑠衣である。

大抵のことは許してしまう彼女だが、これだけは苦りきった様子で話をする。
一方、そんな瑠衣の嘆きを耳にしながら、今まではあまりに型通りの人間に埋もれてきたレイは、この家の住人がごく普通の人間なんだとは思えなかった。尤も、そう思うようになってしまったら、彼もすっかりここの水に毒されたということなのだろうが。
頭を振り振り、抄樹を起こしに二階へ上がっていきながら、レイは昨夜のことをぼんやりと思い起こしていた。
あのような醜態は、本来、彼にあるまじきものだった。にも拘らず、さっき瑠衣と顔を合わせたとき、予想していた気恥ずかしさは、全く無かった。彼女の第一声が、あまりにも自然だったからだろうか。
今までレイの周囲にいた、どこか無機質な人々とは違う、表情のコロコロ変わる少女。
一見年下のようなのに、昨晩は、十も年上のようだった。
抄樹の部屋の前まで来て、思わずクスリと笑みを漏らす。
「自分でも、よく解らないな」
独りごちて、抄樹の部屋のドアをノックする。
返事が無い。
もう一度、ノック。
やはり、返事は無い。
「……開けるぞ」
一応断ってから、ドアを開けた。遮光カーテンの所為で、部屋の中は暗い。
「アツキ……？起きろよ」
声を掛けながら近づく。
ベッドまであと三歩、という距離になったところで、何の気配も見せなかった抄樹が、
ムクリと起き上がった。
「起きていたのか！」

予測していなかったその動きに、レイは驚き、次いで少々ムッとする。
「今、起きたとこ。……ああ、お前か」
頭をぼりぼりと掻きながら、寝ぼけ眼でおはようという抄樹に、レイは、それに対応しない返事をする。
「お前にお前呼ばわりされる筋合いは無い。きちんと敬称を付けて、名前で呼んでくれ」
高飛車極まりないレイの口調に、抄樹は一瞬目を丸くしたが、すぐに、にやりと意地の悪い笑みを浮かべて反撃する。攻撃のための口なら、よく回るのだ。
「ふぅん。女に抱き付いてビービー泣いていたガキが、随分偉そうじゃねぇか」
その揶揄は、レイにとって、かなり痛いところを突いた。白磁のような肌が、見る見るうちに真っ赤になっていく。
ギンと二人が睨み合ったところで、パタパタと、スリッパの音も高く瑠衣が現れた。抄樹を起こしに行ったレイまで帰ってこないのに業を煮やして様子を見に来たのだ。
あまり和やかには見えないその場に、果たして彼女は気付いているのか――おそらく気付いていないのだろうけれども――瑠衣は目を丸くする。
「あらあら、なぁに、二人とも？あーちゃん、早く支度しなきゃ。ご飯が冷めちゃうじゃない。あれ、やだ、レイ君てば、真っ赤。お熱でもあるのかしら？」
言いながらスイッと、瑠衣が手を伸ばした。
その手の先が額に触れたその瞬間、体中の血が逆流したかのように、レイの心臓が悲鳴を上げる。
どきん、どきん、という激しい動悸に加え、息も苦しくなってきた。
――な、何だ、これは？不整脈か！？
堪り兼ねて、彼女の手を、そっと振り払う。

「何でも、ないです。大丈夫」
真っ直ぐに覗き込んでくる瑠衣の眼差しから目を逸らし、レイは辛うじてそう答える。
混乱しきったその様子に、抄樹が目を光らせた。彼には、判る。
「瑠衣、俺着替えるぞ」
だから出てろよ。
抄樹に促され、瑠衣はなおも心配そうにレイを見ながらも、退出する。
「うん、じゃあ、あーちゃんが下りて来たらご飯にしようね。早くしないと、遅刻しちゃうよ。せっかくのレイ君の初登校なんだから」
絶対遅刻なんて駄目だからね、と念を押しつつ扉を閉めようとした彼女だったが、再びヒョコッと顔をのぞかせる。
「あ、それから、レイ君の制服、下にあるからそれに着替えてね。お父さんが頼んでおいたのですって」
それだけ言うと、今度こそ軽い足音を響かせ、瑠衣は階下に戻っていった。
「じゃあ、僕も、行くから」
レイは顔の火照りの引けないまま彼女に続こうとしたが、思いもかけない言葉によって、抄樹に引き止められる。
「……は？今、何て？」
一度目は、脳までその台詞が到達することが出来なかった。間抜けにも、聞き返してしまう。
「だから、お前、瑠衣に惚れただろう」
「……は？」
あまりにも突拍子も無い――と言われた本人は感じた――言葉に、一瞬思考は停止し、口だけが自動的に理性に満ちた返答をする。
「そんなことは無い、筈だ。彼女は……彼女は、年上だし、第一、もう家族だ。それに、まだ会ったばかりじゃないか。僕は彼女のことは、何も知らない」
「でも、一番肝心なことは知ってるだろ」

抄樹の言葉が指しているものはレイにも判った。
瑠衣の温かさ。
うなずく代わりに俯いたレイだったが、続いた抄樹の台詞に思わず顔を上げる。
「大体、家族ったって、この家の人間は、誰一人血の繋がってる奴はいないし」
「え？アツキたちは……？」
「一応、俺は名実共に赤の他人。七年前に本当の親父が死んで、その親友だって言う、今の親父に引き取られたってわけ。実の親父に親戚いなかったから。遺産なんかの関係で俺の苗字は飯島のままだけど、瑠衣は親父の養女かな、戸籍上は」
澄ましてハンガーから制服を外す。
「だから、俺は瑠衣と結婚できるんだぜ？しようと思えば。お前もそうだろ？」
確かに、レイの姓もジョンソンのままだが、それにしても……。
今まで右脳で殆どの判断を下してきたレイにとって、自分の感情の動きを認めるのはかなり難しいことであった。
惚れている、とは、すなわちｌｉｋｅではなくｌｏｖｅということで、それは……。
どうにも素直に受け入れがたく、パジャマを脱ぎ始めた抄樹を、ただ呆然と見ているだけである。そんなレイには目を向けることもせず、抄樹は言い放った。
「そのうち、お前のその優秀な脳味噌も解ってくれるさ」
着替えが終わると、未だに必死にその『優秀な脳味噌』を動かそうとしているレイを置き去りにして、抄樹は瑠衣の待つ朝食の関へと向かう。こんなにも簡単なことにこれほど頭を悩ますレイが、いい気味ですらあった。
心も軽く、抄樹は鼻歌混じりに階下へと去っていく。
そして重大な問題を提起されたまま一人残された少年が取った次の行動は次のようなものである。

まずおもむろに頭を振って、それから短い言葉を心の底から吐き出す。現在の心境を、最も忠実に、最も端的に表している言葉を。
すなわち……
「馬鹿な」
＊
深く暗い森の中、陰鬱な空気を滲み出させている建物がある。
時折、その中からは、得体の知れないものの声が響いてきた。
近くの村――とはいってもそこに出るまで自動車でも半日はかかるが――の人間はおろか、森の中に住む獣でさえも、近づくものはいない。
「ようやく、時が訪れたな」
抑揚の無い、どこか狂信的な響きを含んだ声が、換気装置や計測を続ける様々な機器――無機物だけがたてている静かな音の上に重なった。
それを発したのはアルベルト・エールリッヒ――自分の研究に対する興味があまりに強過ぎて、あるいはあまりに他人とは異なり過ぎて、各々の学会から摘み出されたものたちで構成されたこの研究所のリーダー格である。
決して安上がりとは言えない上に、直接金銭的な利益を上げることもできないと思われるここの研究費をいったいどこから手に入れてくるのか、あまりに異端な研究者ばかりをどうやって探し出してくるのか、それらを知るのは彼だけだった。だが、ここに集まった十人あまりの研究員たちにとって、そんな世俗的な事情は自分に関係の無い話である。
彼らにとって、何の制約を受けることも無く自分の好きな研究が好きなだけ出来る、というこの環境さえ保たれれば、おおよそのことは無視できた。
そんな彼らの前で、エールリッヒが口を開く。
「機は熟した。いささか時間はかかったが、あれらの成長を待っていたと思えば、さほど苦にもならんだろう」

暗いこの部屋を、一層鬱々たるものにしているその声もさることながら、軽く伏せられた瞼の奥にある目を正面から覗き込むことが出来たなら、更に、この男の正気を疑うであろう。
「貴重な成功体が、ようやくこの手に戻る。唯一の、そして、最高の、成功体だ。他の実験体はことごとく失敗だったからな。この日が来るのを、どんなに待ちわびたことか」
クックックッと、喉の奥で笑いを堪える。
「ルナも十六歳だろう。そろそろテストをしてもいい頃だ。あれは……？」
「はい、完成しています。しかし、無機質の転送には成功しましたが、まだ生物では実験したことがありません」
「丁度いい。十七号を送ってみろ。ルナの能力はある程度の知能が無ければ効かないからな。まあ、転送にしくじったとしても、少々惜しい気はするが、なに、また作ればいい」
呼ばれたのを聞き止め、並んだ檻の中の一体が、ムクリと、身体を起こす。
猫科特有の目が、陰の奥でわずかな明かりを反射して鋭い光を放った。
「コレも、良識派という奴らが馬鹿にした研究の成果だな」
言いながら、鉄格子の前に膝を突く。
「あの三人の裏切り者どもがルナたちと共に姿を晦ましてから、十年か。……あと少しで、理想郷が完成する。唯一つの名の下に、全ての人間が同じ道を歩む世界が……」
その場の誰に語りかけるでもなく、男は呟く。
自身の信じる世界を、夢見る世界を、ただそれだけを見つめて。
その目が映しているものは、その場には存在しない何かであった。

三

何となく落ち着かない気がして、瑠衣(るい)は本のページを捲る手を止めて耳を澄ませた。家の中に、確かに、何か不慣れな気配を発するものがいる。

時計を見ると、そろそろ午前二時になろうとしていた。

この時間まで起きているのは彼女か信彦ぐらいだが、父は北海道で考古学の学会があるので、明後日まで帰らない。気が進まないようであったが、考古学界において信彦の成果はかなり評価されており、行かないわけにはいかなかった。

抄樹(あつき)とレイの二人にいたっては、熟睡の真っ只中だ。

そっと足音を忍ばせてベッドを下り、制服のスカートのポケットから、先日レイからもらったばかりでまだ使ったことの無い痴漢撃退スプレーを取り出した。

廊下に出て、真っ暗な中を足元に注意し進む。明かりを点けては、階下の何ものかに気付かれてしまう恐れがあった。

暗闇に目が慣れた頃、ようやく階段に到着する。

と、その時。

「!?」

階段を下りようとした彼女を何者かが後ろから抱え込み、その口をふさぐ。

一階にのみ気を取られていた瑠衣は、予期せぬ事態に驚き、それを振りほどこうともがいた、が、その直後に耳に届いた声に拍子抜けする。

「瑠衣、俺だ」

「あーちゃん」

振り返ると、抄樹の隣にはレイも立っていた。二人の顔には緊張の色が濃い。

「お前は部屋に戻っていろ」

いつにない抄樹の声の厳しさに一瞬怯んだ瑠衣だが、すぐに気を取り直す。
「でも、あーちゃん」
「でも、じゃない」
出した抗議を即座に一蹴され、瑠衣は顎を引いて抄樹を睨む。だが、彼もこればかりは譲れんとばかりに義姉を見下ろした。
無言の眼力合戦に終止符を打ったのは、先ほどからなにやら考え込んでいたレイだった。
「いや……一緒に行ったほうがいいかもしれない」
二種類の視線――一方は期待、もう一方は抗議の――を受けて、レイは言葉を継ぐ。
「携帯電話がね、圏外なんですよ」
「？」
唐突な話運びに、抄樹にはレイの言いたい事が解りかねたが、瑠衣にはすぐに通じたようだ。
「それって……」
「そう、変でしょう？二人は携帯を持っていないからピンとこなかったかもしれませんがね。今日の昼間には何の問題もなく使えていた筈なのに、今は全くの圏外。どんな山奥だろうが電波が届く時代だというのに、この住宅街で、有り得ないでしょう？でも、有り得なくても事実なのだから仕方がない。何らかの妨害電波でも出ているんでしょうかねぇ」
レイはまるで宙を飛び交うその電波が目に見えるかのように辺りを見回してから、それにね、と続けた。
「ケーブルを継げたメールも駄目でした。多分、電話も駄目なんじゃないですかね。電話線が切られているとかで。つまり、家の中からは連絡手段がないという事で、裏を返せば、相手は我々を家の外に出したくない、という事になりますよね。それなら、外に出てしまえば何とかなるのではないかと思うのですが」
「それなら、瑠衣を部屋に隠しといて、お前が助けを呼びに行くか

……？」
抄樹の提案に、レイは渋い顔で首を振る。
「こんな時間に音も無く行動できるような相手ですよ？しかも明かりも点けずに。相手の実力はかなりなものではないでしょうか。万一抄樹、君が勝てなかった場合、二階の、しかも一番奥の部屋にいる瑠衣さんはどうなる？逃げ場も、隠れる場所も無い」
問いかけられ、抄樹は返事に困った。確かに一理ある。
「それだったら、彼女を連れて一階まで行き、瑠衣さんに外部への救援を頼んだほうがいいでしょう」
その展開は抄樹にとっても望むところである。ポンと握り拳で片方の掌を打つまねをしてうなずいた。
「そうしろ、瑠衣」
「いやよ。私一人で逃げろって言うの？」
速攻で返る抗議に、レイは彼女の両肩に手を置いて説き伏せる。
「違います。ただ逃げろと言っているのではありません。あくまでも、助けを呼びに行って欲しいのです」
「そんなの、ただの詭弁だわ」
瑠衣とレイの間で始まりかけていた応酬を、今度は抄樹が止める。
「よし、レイ。お前が瑠衣と一緒に行け」
これは名案とばかりに自信満々で言った抄樹の台詞に、二人が同時に抗議の声をあげる。
「君一人で残る気か！？」
「そんなのだめ！じゃあ、私も絶対残る！」
必死に縋り付く瑠衣の頭に手を乗せ、宥めるように軽く叩いてから、レイの目をじっと見つめる。
ややあって、レイの口から息が一つ吐き出された。ニッと笑って応える。
「わかった」
「レイ君！」
瑠衣が押し殺した声で悲鳴を上げるが、レイと抄樹はしっかりと

視線を絡め、頷きあう。
抄樹の、瑠衣を護るという意志は、痛いほどに感じられた。そして、今、レイ自身の中にも同じ気持ちがある。
この家に来た次の日に抄樹に言われたことが、少しだけ理解できたような気がする。
目を閉じ、自分のなすべきことを確認し、心の中を整理する。
再び目を開けると、瑠衣の心配そうな顔がこちらを向いていた。
行動を開始する。
抄樹を先頭に、階段を下りていく。
下りきったところで、抄樹は右手に持った、鉛を仕込んである素振り用の竹刀を握りなおした。
気配を探った抄樹は、侵入者の居場所が居間であるとあたりを付ける。外に出るには、その前を通らねばならないのだが。
レイも瑠衣の腕を、振り解かれてしまうことの無いように強く掴み、いつでも準備は出来ていることを示す。
目で合図し合って、抄樹は居間へと飛び込んだ。
続いて廊下を走り抜けようとしたレイだが、直後に響いた驚愕に満ちた抄樹の声に、思わず足が止まる。
「何だ……！？」
一瞬その手が緩んだ隙に、瑠衣が拘束を解き、居間へと走ってしまう。
「瑠衣さん……！駄目です！」
彼女を連れ戻すべく後を追ったレイだったが、次の瞬間、抄樹の声の原因を目の当たりにし、自分の正気を疑った。
「これは……？」
彼と同じに目を見張ったまま硬直している瑠衣。
竹刀を構えてはいるが、動揺を隠せない抄樹。
そして、その先にいるのは。
金色の地に黒い縞模様。獰猛な肉食動物の目が闇の中で赤く光る。
しなやかでいて同時に強さを漲らせたその姿は、紛れも無く、虎

だった。
　二メートルはあるだろう巨体で尾を緩やかに揺らしながら、低い声を上げている。
「何故、こんなところに……？」
　そんな場合ではないということは充分解っているのだが、レイは頭で納得できる理由を探してしまう。思考の迷宮に入り込もうとしていた彼を現実に連れ戻したのは、切羽詰った抄樹の声だった。
「レイっ！行けっ！」
　その声でレイは半ば反射的に身を翻し、瑠衣の腕を取る。
「行きますよ！」
「でも……っ！」
　瑠衣の目にもそれの姿は入っていた。抄樹に勝ち目が無いのは、一目瞭然である。
　動こうとしない瑠衣に、レイはかなり痛い一言を投げつける。
「あなたがいたら、抄樹も逃げられません！」
　振り返った瑠衣に、レイが真剣な目で頷く。確かに、瑠衣がこの場にいる限り、抄樹が逃げることは決してないのである。
　足手纏いになっているのは明らかだった。
　居間から聞こえてくる激しい乱闘の音に後ろ髪を引かれながら、半ば引きずられるようにして、瑠衣はレイと共に玄関へ向かう。
　このあたりは住宅街で、夜中になると全くと言っていいほど、人通りが無くなる。たまに通るのは、午前様の酔っ払いか、夜食を買いに出た受験生ぐらいだ。通りすがりの人間に助けを求めるのは無理である。
　家から出れば携帯電話が通じるようになっていることを祈るが、もし駄目であれば、公衆電話を探すか、隣の住人を叩き起こすか。
　後者のほうが早いだろうが、セキュリティシステムという問題があった。急速に治安が悪化した二十二世紀半ば頃から、ある程度の資産を持つならば、自動照準式の麻酔銃の設置が新築建売一戸建ての標準装備となっている。うかつに踏み込んで眠らされてしまって

は、元も子もない。
「まったく、究極の自衛手段は、他人の事は知りません、て事だったんだな」
ぼやきながらも一番近くにある公衆電話を思い出しながら玄関のドアノブに手を掛けたレイの耳に、さほど硬くないものが叩き付けられた音が届いた。
「あーちゃん！？」
肩越しに振り返った瑠衣が、そこにあるものを認めて目を見開く。
その瞬間、瑠衣は、普段の彼女からは想像できない力でレイの手を振り払い、居間から廊下の壁へと投げ飛ばされた抄樹の元へと駆け寄った。制止する暇を与えない素早さで。
慌てて連れ戻そうとしたレイを、瑠衣の静かな声が縛る。取り乱しているはずの彼女の、らしくも無い冷静な声。
「来ないで」
「瑠……衣、さん？」
彼女から発せられる逆らいがたい威圧感に、身体が自然と従ってしまう。
――これは、誰だ……いや、何だ？
とてつもない、違和感。
それは直感に過ぎなかった。理性的な根拠に基づくものではない、直感。
しかし、これまで馬鹿にしてきたそんな下等なものが正しい場合も有り得ることを、レイはたった今実感した。
――目の前にいるのは、瑠衣さんではない……少なくとも、僕たちの知っている彼女では……いったい、誰なんだ？
半ば呆然と、レイは心の中で繰り返す。
そして、床に倒れたままの抄樹も、同様の感覚を覚えていた。義姉を見上げたまま、呆然とした彼は彼女に掛ける声も無い。
外見は変わっていないが、その身に纏う空気が、明らかに二人の知る瑠衣のものとは異なっていた。冷ややかで、超越した存在。

永い年月をかけて育て上げられたようなとてつもない存在感は、こんな幼い少女には――いや、どんな人物でも、持ち得るものではない。
鋭い爪で引き裂かれた腕を押さえながら壁を背にして膝を突く抄樹の前に立ち、瑠衣は、今にも飛びかかろうとしている虎を、強く見据えた。その視線は、見えない鎖となって金色の身体を縛る。
戸惑うように攻撃体勢を取り、そして次第にそれを解除していく虎から目を離さず、瑠衣が命令を口にする。
「駄目よ。抄樹を傷つけることは、私が許さないわ。わたしがゆるさない」
虎は戸惑ったような唸り声を上げ、そして、その声に打ち据えられたかのように彼女の足元にうずくまる。そのさまは、王女に跪く騎士にも似ていた。
瑠衣の口元に、満足そうな微笑みが浮かぶ。
「瑠衣……？」
名前を呼ぶというよりも、相手の存在を確かめるような口調でかけられた抄樹の声が合図であったかのように、ふらりと彼女の身体が崩れ落ちる。
抄樹が手を伸ばすよりも速く、虎が彼女の身体を支え、大事な宝を扱うようにそっと抱え込んだ。
彼女が意識を失うさまを目にし、我に返ったレイが、虎の存在にも躊躇することなく、瑠衣の手首を取り時間を計る。
「……大丈夫。脈は正常だ――気を失っただけだろう」
レイと抄樹は、同時に安堵の息を漏らす。
「今のは、何だったんだ？」
「僕に訊くなよ。抄樹のほうが、瑠衣さんとは長くいるだろう。まあ、この話は後にして……それより、君のその腕、早く止血しないと。それ、多分痕になるぞ――まあ、男だから構わないけど」
血塗れの腕で瑠衣を抱き上げようとした抄樹を制し、代わりに手を伸ばしながら、レイは素早く抄樹の傷の状態に目を走らせる。

咄嗟に虎の爪を遮ろうとしたのだろう、前腕の外側を横断するように付いた三筋の傷から、ポタポタと赤い滴が垂れていた。
「取り敢えず、居間に行こう」
四十五キロちょっとの瑠衣の身体を抱き上げ、レイは多少ふら付きながら居間に入る。その後に、私は貴女の下僕です、といった風情の虎と、シャツを脱ごうと四苦八苦している抄樹が続いた。
居間に足を踏み入れた一同は、思わず絶句してしまう。
部屋の中は、かなりの惨状であった。
信彦のお気に入りであったソファは切り裂かれて中の綿がはみ出ており、瑠衣のコレクションだった陶製の人形たちは大半が無残な姿を晒している。テーブルは足が二本折れて天板の片方が床に付いているし、カーテンもビリビリだ。これらは全て、先ほどのわずかな時間での乱闘によって成された結果だった。
部屋をぐるりと見回し、一番被害の少なかったソファに瑠衣を寝かせ、レイは抄樹の傷の手当てを始める。かなり酷く抉られているが、抄樹は大して痛がる様子も見せない。意地を張っているのかと思ったが、そうではないようだ。
「俺、傷が治るの速いから、適当でいい」
けろりとそう言った抄樹に、レイは包帯を巻きながら呆れたような目を向ける。
「まさか。こんな抉ったような傷じゃあ、ある程度塞がるまで、少なく見積もっても二週間だ。不注意に動かしたりすれば、もっとかかる。完治するには二ヶ月は必要だろう。――出来たら病院に行って縫ったほうがいいけど、理由を訊かれたら困るからな。こんな見るからに大型動物にやられましたっていう傷……まさか、飼い猫にやられましたって言うわけにもいかないだろうし」
――手早く包帯を巻き付けながらレイはそう言ったが、実際、一週間後に傷の様子を確かめた彼は、抄樹を化け物扱いすることになるのだ。
手の動きや感覚には問題が無く、神経は傷ついていなそうだった。

さしあたって出血は抑えられているようなので、レイに出来るのはここまでだろう。
丁度抄樹の手当てが終わった頃、瑠衣が小さく声を上げた。人の名前を呼んだようであったが、レイと抄樹にははっきりと聞き取ることは出来なかった。

＊

瑠衣は白い闇の中にいた。
白い闇とは変な表現ではある。だが、実際に、周り中真っ白であるにも拘らず、闇のようなのだ。自分の姿を確認しようと腕を持ち上げてみても、何も視界に入らない――あるいは、膨大すぎる光量によって目が眩んでいるのかもしれない。
不思議な安堵感に揺さぶられて、瑠衣は力を抜いてその闇に身を任せた。
突然居間に現れた虎のことも、二人の弟のことも忘れたわけではなかったが、何故か二人はもう大丈夫だ、という確信があった。もう、二人は危険に晒されてはいない。
この非現実的な状況に対しての興味が大部分を占める感情を抱きながら不思議な光景を見回していた瑠衣の頭に、不意に誰かの声が響いた。それは、いわゆる『音』ではない。耳ではなく、直接頭に、あるいは心に届く。
今まで聞いたことが無いはずなのに何故か覚えのあるその声は、彼女のものと似ているが、わずかに相手のほうが低いような気もする。懐かしい、声。
「誰……？」
声の主を探す瑠衣の身体を、誰かがフワッと抱き締めた。
やはり姿は見えないが、その温もりを、確かに感じる。
――私はルナ。あなたは私を知らないだろうけれど、私はあなたのことをよく知っている。多分、あなた自身よりも。
――知らない……？いいえ、私はこの腕の持ち主のことを知っている。

姿の見えない相手のことではあるけれど、確信を持って、そう断言できる。
彼女を抱き締める腕。
気遣うような、躊躇うような、その声。
存在そのものが、自分に近しいものだと囁きかける。
――これは、あなたの夢。目が醒めたら大半は忘れているだろう。でも、これだけは覚えておいて。あなたとあなたの大事な二人を狙っている奴らがいるの。私たちを玩具にして、世界で遊ぼうとしている奴らがね。『彼』は本当に世界のことを憂えているのかもしれない。でも、あの人の背後にいる連中は、世界のことなどこれっぽっちも考えてはいないわ。
――？
ルナの言葉がよく理解できず、瑠衣は疑問符を浮かべる。そんな彼女に、ルナが小さく笑った。
――なんでもない。ただ、あなたのためにも、そして、あの人のためにも、私は目覚めてはいけないの。だから、私のことをこのまま忘れておいて。私のことを思い出してはだめ。あなたにはあなたでいて欲しい。あなたが幸せに暮らすには、私の存在は邪魔なのよ。
そんなことは無いと向きになって否定する瑠衣を、ルナはクスリと笑って受け流す。
彼女は、もう一度瑠衣を優しく抱き締めると、促すように背中を押した。
――ほら、そろそろ行ってあげないと、二人が心配するわ。あの二人は、どんなことがあっても、あなたを護ってくれる。どんな時でも、二人を信じていなさい。三人一緒なら、どんなことでも乗り切れる。……さあ、もう行くのよ。
彼女のその声を合図に、瑠衣の意識は急速に覚醒へと向かい始めた。
もう少し。もう少しだけ、あなたといたい。
その瑠衣の願いは叶わず、彼女は容赦なく現実へと引き戻されて

いく。
ふわふわとした、海の奥深くから浮いていくような感覚を味わいながら、瑠衣は最後にただ一言呟いた。
誰よりも自分に近しい存在である相手の名前を。

四

「吐き気や眩暈はありませんか？」
目を開けて真っ先に飛び込んできたのは、レイの声だった。
瑠衣（るい）はふらふらする頭に手をやりながらゆっくりと起き上がり、周囲を見回す。まず目に入ったのはなんとも無残な部屋の様子だった。
「これって……？」
どういうこと？
そう口に出す前に頭のピントが合い、それと同時に状況の認識も行われた。
最後に見た、あの情景。
「……あーちゃんは！？」
常に自分の隣に在ったその人は、今も、いた。利き腕を血塗れにした姿で。
これほどの手傷を負った抄樹（あつき）を、初めて見た。どんなに相手が大人数であろうとも、これまで掠り傷一つ負うことは無かったのに。
「あーちゃん！」
蒼白になりながら慌てて抄樹の元に行こうとしたが、足元がおぼつかずに倒れそうになる。レイがそれを支え、再びソファへ座らせた。
「彼は心配ありません。きちんと手当てをしました。それよりも、瑠衣さんは？どこか具合の悪いところはありませんか？」
冷静なレイの口調に、瑠衣の心が少し落ち着く。
「私も大丈夫。どこも変じゃないわ。でも……あの虎は？どうなったの？逃げたの？なんでこんなところにいたの？」
瑠衣の記憶の中からは、彼女が虎を制したという部分がすっぽりと抜け落ちているらしい。
レイは頭の中で、話してもいい事とそうすべきでない事をより分

ける。
「あなたは抄樹が殺されそうになったのを見て、気を失ってしまったのです。……虎は、このソファの後ろにいますよ。何故か急におとなしくなりました」
こう言いながらも、レイの頭の中には、瑠衣が虎を従わせたのだという確信があった。
彼女の、あの異常な様子が脳裏に浮かぶ。あのときの彼女には、どこか非人間的なものがあった。瑠衣の中に潜む、何か。今回はそれが彼らの助けになったが、恐らく、原因でもあるのだ。
天涯孤独の四人の他人が家族として集うこと。
抄樹の並外れた運動能力。
レイの、百年に一人と言われた頭脳。
それだけであれば、ただの偶然と言い張ることは、辛うじて可能だったかもしれない。
だが、それに先程見せた瑠衣の特異さが加われば、偶然では有り得なくなる。何者かの手が、この事態を作り出しているのだ。
だが、その『何者か』とは、いったい誰なのか。
情報不足の現状では、推測すら困難だった。
信彦がいれば、何か判ったのかもしれないが。
独り悶々と姿の見えない敵の存在に思い悩むレイの隣で、瑠衣は、起き上がった虎の鼻面に恐る恐る手を伸ばす。そっと触れ、撫でてみると、虎はこの上なく嬉しそうに目を細めた。もっとしっかり触って欲しいというふうに、彼女の手に頬を擦り付ける。先ほどまでの様子とは打って変わった、愛嬌の振り撒きようだ。
「……可愛い」
思わず漏らしてしまった、瑠衣のかなり間の抜けた言葉に、抄樹とレイの肩ががっくりと落ちた。どうも、彼女のテンポは常人と外れている。拍子抜けすると同時に、彼女のことを熟知している抄樹の頭には、なにやら不吉な予感が忍び込む。
「お前……まさかとは思うぞ。思うが、そいつを飼おう、なんて言

わねぇよな？」
　尋ねるというよりは、確かめる口調で言う抄樹に、レイが笑い飛ばすよりも速く、瑠衣が返事をする。
「え……え……うん」
　常識人にのみ囲まれて生きてきたレイにとっては到底信じられない返事だが、この少女と付き合って十年以上になる抄樹には、多少予測していたものだった。呆気に取られるレイを尻目に、速攻で反撃する。
「駄目だ」
「でも、こんなにおとなしいのに……」
「おとなしかろうが、凶暴だろうが、こんなに馬鹿でかい虎なんぞ飼えん。猫じゃないんだぞ」
　眉を逆立てている抄樹に、何とか現実に立ち返ったレイも加勢する。
「そうです。第一、外には出せないんですよ。こんな狭い中で一生を過ごすなんて、この虎にも可哀相でしょう？」
　至極当然な彼らの説得に反論できなくて、瑠衣は抄樹を見つめる。無言かつ最強の攻撃だった。
「うっ……！」
　ちょっと上目遣いに涙を溜める。瑠衣のその目には、抄樹は昔から弱いのだ。しかし、どうしても譲れないこともある。それが、この状況だ。心を鬼にして、腹に力を込める。直視してしまうと理性が感情に負けてしまうので、少し目を逸らして、言う。
「駄目だ」
「どうしても……？」
　ますます涙の珠が大きくなる。彼女はレイに目を移した。
　――か、可愛い……。どうしてこの人は、僕よりも年上だというのに、こんなにこういう表情が似合ってしまうんだ！
　心の天秤がぐらぐらと承諾へと傾きそうになるのを、必死で止める。

しかし、時に女の涙は、何にも勝る武器となる。それが惚れた相手のものであるならば、効果は万倍にもなるだろう。
瑠衣の顔が喜びに輝くには、そう時間を必要としなかった。
夜明け前に、男二人は折れることになる。
＊
「十七号はあちらの手に落ちたようです」
モニターに映し出されている、虎の脳に埋め込んであるナノマシンから送られてくる脳波を目で追いながら、白衣の男がそう告げた。
波形の一部は、催眠状態に置かれていたはずの十七号が覚醒したことを示している。
「だろうな。人間でさえルナには逆らえないというのに、畜生では尚更だ。まあ、よい。ルナを手に入れれば、十七号も戻ってくる」
エールリッヒは、そんなことはどうでもいいと、軽く手を振る。
「だが、ルナの威力は一層強くなっている。早く手を打たねば、我々にも手が出せなくなるかもしれん。ノブユキを始末……いや、あいつを囮にしよう。……あの裏切り者をな」
唇に薄い笑いを貼り付かせ、視線を宙に据えた。
「今、彼はホッカイドーにいるそうです。考古学者の集まりがあるそうで……」
「ふむ、やるなら今のうちかもしれんが……暫らく様子を見てみよう。私の『メッセージ』を受け取った奴がどうするのか、見てみようじゃないか」
鳥野信行――今は九条信彦と名乗っている男。
今はその名を捨てた人物は、かつて、あらゆる点で誰よりもエールリッヒに近しい存在であった。彼の思想に理解を示し、共鳴した、最初の人間。だが、いや、だからこそ、その裏切りは許しがたい。
「何故やつらがあのような行動を選んだのか、未だに理解できん。しかも、自分らだけで逃げ出すのではなくルナたちをも連れ出すとはな……欲に目が眩んだのかと思えばそうでもない」
軽く肩を竦める。

「そうであれば、もっと早く居場所が知れたのだがな」
逃亡した三人のうち、すぐに所在を掴めたのは、自分の研究分野にしがみ付いたままであったマリア・ジョンソンのみであった。しかし、彼女のほうがまだしも理解できる。他の二人――飯島魁と鳥野信行は、まるきり彼らの専門から遠ざかっていたのだ。功成り名を遂げた己の研究からそう易々と離れることが出来るとは、到底信じられなかった。しかも、鳥野に至っては、偽名をも使うという念の入れようであった。
「最後まで逃げおおせればたいしたものだったが、こうなった以上、彼らはただの愚か者だな。苦労は水の泡となり、我々からの離反は愚挙に過ぎなかったことを、後悔と共に悟るだろう」
冷ややかな宣告。
下された以上、それは速やかに実行されなければならない。

五

レイが九条家に来てから三ヶ月が過ぎた日曜日。とはいえ、三日前に夏休みに入ったところであるから、曜日はあまり意味を持たない。

家の中に突然虎が現れるという、まず普通は起きることの無い事態が起きて以来、九条家に変わったことは無く、表面上は、何事も無く過ぎていった。しかし、あくまでも表面上は、なのだ。

――信彦の様子が変だ。

子供たちの中で、それに気付かないものはいなかった。体重は少なく見積もっても五？は減り、家にいるときは書斎に閉じこもりきりである――以前は出来る限り子供たちに接するようにしていたものだったが。

そして、今日。

彼が行き先も告げずに家を出て行って、すでに十時間が過ぎている。

「どうしよう。探しに行ったほうがいいのかなぁ」

夕食の時間を過ぎても戻らない信彦に、瑠衣（るい）は時計を見ながら心配そうにそう言った。横たわった爪牙（そうが）――レイによって付けられた虎の名前である。瑠衣が付けたがったが、あまりに似合わないものばかりであったため、却下。抄樹（あつき）に頼まれ、レイが選ぶことになった――の毛を落ち着かない様子でいじっている。彼の背中の毛は、すっかり毛羽立ってしまっていた。それを気の毒そうに横目で見ながら、抄樹は答える。

「でもなあ、親父も子供じゃないんだし、なあ、レイ？」

同意を求められ、レイがその後を引き取った。

「まぁ、取り敢えず九時まであと一時間ちょっと、待ってみませんか？ほら、街に出たら物凄い渋滞に巻き込まれてしまったとか、気晴らしにちょっと遠出したら道に迷ってしまったとか……」

何事につけ、きっちり計画立てる信彦が今までそういった事態に陥ったことはなかったが、最近の信彦のぼんやり具合では、有り得ないことではない。
だが、希望的観測を並べたレイの台詞を、突然、全く聞き覚えの無い声が遮った。
「いや、残念ながら、そうではないよ」
三人と一匹が、同時に声のしたほうへ向く。瑠衣たちには覚えの無いものであったが、爪牙にだけは、その声の持ち主が誰であるか判った。
自分を、創った男。
創られたときから刻み込まれた、その男に対する服従心に逆らいきれず、自然と身を低くしてしまう。
そして、他の三人も、奇妙な感覚に襲われていた。
この男に逆らっては、いけない。
頭の奥で、声がする。
何故、見たことも無い人物がこの家の中にいるのか。
重要であるはずのその問いが、彼らの頭の中では二の次となってしまう。
男は、三人の戸惑うさまを見て、満足そうに口元を歪めた。
「私は、アルベルト・エールリッヒ。君たちの義父、クジョウ・ノブヒコは、我々が預かっているよ。会いたければ、会いに来なさい。君たちなら、ノーヒントで我々の居場所を探し当てられるだろう。ある程度近づくことが出来たなら、迎えに出てやろう。期限は、一ヶ月。それを過ぎたら、君たちがノブヒコに会えるチャンスは無くなる」
「ちょっと待て！」
止めろと叫ぶ理性を押しのけ、抄樹が怒鳴った。
「お前、どうしてここにいるんだよっ！第一、パッと出てきて急に親父を攫ったなんてほざきやがって、ハイそうですかと信じるとでも思ってんのかよ！」

下品な口の利き方だな、と軽く眉を顰めて呟き、男――エールリッヒは、抄樹に向けていた目をレイに向けながら尋ねる。
「レイ……。君も、全く判らないかね？」
抄樹の威勢のよさに励まされ、レイも我を取り戻す。
「いえ、まあ、半分は。あなたがそこにいるのは前例がありますからね」
と、ちらりと爪牙に視線を流した。抄樹と瑠衣が、はっと息を呑む。
「爪牙、と言っても判りませんね。その虎のことです。彼をここに送り込んだのも、あなたでしょう？物質転送の理論は出来ていますからね。ついでに言えば、あなたのことも存じ上げていますよ。十八年前、遺伝子法に反する実験をやらかして、医学界、生物学界から追放となった、アルベルト・エールリッヒ、でしょう？あれはそれまでの功績を帳消しにするような失敗でしたね。以来論文も発表できなくなって、今までいったい何をなさっていたのですか？」
そこはかとなくどころではなく皮肉な色を滲ませたレイの言葉に、一瞬、エールリッヒの目が剣呑な光を含んだ、が、すぐにまた、取って付けたような笑みを貼り付ける。
「よく知っているな。だが少々事実の認識に誤解があるようだ。論文を発表『出来なくなった』のではなく、『しなくなった』のだよ。素晴らしい研究も、凡人の理解力では認めることが出来ないようなのでね。こちらのほうから見切りを付けたようなものだ」
「そういうことにしておきましょうか……では、その偉大なあなたが、何故、平凡な僕たちの義父を攫ったりするのですか？理由がありません」
爪牙と対峙したときの瑠衣とは違う、どこか毒々しさを漂わせた威圧感が、エールリッヒの全身から放たれている。レイはそれに屈することの無いように背筋を意識して伸ばし、気合を入れた。
「とてもではないが、信じられない」
「何、理由ならあるさ。やつは裏切り者だからね。――十年ほど前

までは、彼は我々の仲間だったのだよ。その頃の名前は、トリノ・ノブユキだったがね」
「いい加減なことを言うんじゃねぇ！」
抄樹が色めき立ち、瑠衣とレイも目に同意の色を浮かべている。しかし、並の者なら身を竦ませる抄樹の恫喝もきれいに受け流された。
「本当のことだ。君たちの保護者、トリノ・ノブユキ――ああ、ルナは最初からそうだったね。それと、アツキの元保護者イイジマ・カイそしてレイの元保護者、マリア・ジョンソンの三人は、我々の元から大事な実験成果を持ち逃げしたのだよ」
「何故、母のことを……？――まさか……まさか、母の事故は……？」
レイの瞳の奥に、暗い炎が揺れる。問いかけの形を取ってはいるが、それは、確信だった。瑠衣と抄樹が振り返る。
「母の事故現場は見通しが良くて、道路条件も悪くなかった。慎重な母が何故あんな事故を起こしたのか、不思議だった」
「まさか、そんなこと……」
瑠衣の不安そうな声には答えずに、レイはエールリッヒを睨む。
「流石に、察しがいいな。トリノ――クジョウは用心深くてね、なかなか居場所を掴むことが出来なかったものだから……賭けだったよ。身寄りの無くなった君をクジョウが引き取るかどうかは。イイジマを探し出したときにはすでに彼は他界していたし、クジョウは偽名まで使っていたからね」
「賭け、で、母を殺したと言うのですか」
「止むを得ない処置だった」
全く良心の咎めを感じていない物言いだった。あまりな態度に、とうとう抄樹の頭に血が昇りきる。
「てめぇ、それが人一人殺しておいての言い草かよ！？」
「そういう品の無い口の利き方は止めなさい。イイジマが草葉の陰で泣いているよ」

「余計な世話だ！」
鼻でわらうようなエールリッヒに、抄樹が飛び掛る。が、彼の手が届く寸前でエールリッヒの姿は掻き消え、部屋の反対側に、また、現れた。
「お前には、もう少し冷静さが必要だな」
商品に評価を下す口調で、エールリッヒは言い放ち、瑠衣とレイに呼びかける。
「我々がノブユキを攫った証拠が必要だと言ったね。よろしい。今から三十分後に電話をかける。その時、彼の声を聞くがいい」
「声なんて、いくらでも作れますよ」
不信に満ちたレイの言葉に、エールリッヒは軽く肩を竦めて返した。
「ふむ。まあ、その辺は会話の仕方によるのではないかね。君たち次第だよ」
その言葉を終えると同時に、エールリッヒの姿が消える。現れたときと同様に、何の前触れも無かった。
「ちっくしょおっ！」
怒鳴って、抄樹は床を殴りつける。鋭い音と共に亀裂が入ったが、気に留める余裕は無かった。
レイも急に支えを失ったかのように、その場に崩れる。
「あーちゃん、レイ君……」
今まで見ることの無かった二人の打ちひしがれたようすに、涙を堪えながら、瑠衣が双方を抱き寄せた。精一杯の力を込めて。
そして、呟く。
「負けないよ。……負けないで」
＊
「瑠衣、抄樹、レイ……」
電話口の信彦の声はかなり憔悴していた。肉体的な疲労より、精神的なものから来る理由が大きいだろう。三人は息を呑んでその声に耳を澄ます。

「すまん、結局こんなことになってしまった。爪牙が送り込まれたことで、あまり時間が無いことは解っていたのに……。真実を伝える勇気が無かった私を、許してくれとは言わん。助けにも、来るな。すぐにそこから離れるんだ。だが、もし、お前たちが全てを知りたいと言うのなら、私の書斎の――」
「さあ、もういいだろう。どうだね、本物と判断するか、偽者と判断するか……、君たち次第だよ。まあ、本物だとしても、助けに来るな、とは言っていたがね」
馬鹿にしたように、エールリッヒが鼻で笑う。
「もう一度言うが、期限は一ヶ月だ。……そうだな、アメリカだということだけは教えておいてやろう。君たちの能力が充分に発揮できるよう、祈っているよ。辿り着けないなら、それまでのことだ」
「ちょっと待ってください。もう一度、義父と話をさせてください」
精一杯感情を押し殺し、平静を装ったレイの頼みを、しかし、エールリッヒは一蹴した。
「駄目だよ。もう充分だろう。では、一ヶ月以内に会えるように」
「あ、ちょっと」
受話器に耳を押し付けるが、聞こえてくるのは無常な電子音のみであった。
＊
「おそらくこれが、信彦おじさんが言おうとしていたものだと思うのですが……」
三人がかりで書斎を隈なく家捜しし、ようやく見つけたものを、レイは瑠衣と抄樹の前に差し出した。それは、推理小説の古典にあるように手紙の束の中に隠されていた一通の封書であった。表書きには、短く、『子供たちへ』とだけある。
「すぐ、読みましょう」
瑠衣の言葉に、レイはいつになく歯切れが悪い。
「それが……読もうにも、中はちょっとした暗号になっているんです」

そう言ってレイが中を開いて見せると、文字ではなく、数字で紙面が埋め尽くされていた。
「げ、俺パス」
一目で戦線離脱を宣言した抄樹に、レイは速攻で返す。
「最初から、抄樹には期待していない」
「どういう意味だよ、それは？」
さながらコブラとマングースのように睨み合った二人を引き離すように、瑠衣が口を挟む。
「私も……レイ君がやったほうが速いと思うんだけど」
打って変わってにこやかに、レイが振り向いた。
「そうですか。それでは暫らく僕が預かります」
あまりの態度の違いに頬を引き攣らせる抄樹には全く構わずに、先を続ける。
「それで、この手紙を解読できた後、なんですけれど、二人ともパスポートは持ってますね？……というよりも、二人の国籍はどうなっているんですか？エールリッヒの言うことを信じるとしたら、アメリカ国籍のはずなんですけど……」
瑠衣と抄樹が顔を見合わせる。長年日本人として生活してきた二人には、そんなことは確かめる必要は無いことだった。若干心許なげに顔を見合わせる。
「パスポートは持ってないわ。それに、当然、日本国籍、よね」
「だよな」
そうでなければ、今まで問題が起きなかったはずが無いだろう。小中高と入学するとき、何か言われた記憶は無い。外国籍になっているのだとしたら、何かあって然るべきだった。
だが、あれだけ常識はずれのことがあったというのに、まだその常識に囚われているままの二人を、レイは呆れたように見る。彼の脳味噌は柔軟性も兼ね揃えているのだ。
「ちゃんと調べたことは無いんですね。学校の書類をごまかすなんて、簡単なものですよ。今は何もかもコンピュータ処理ですからね。

その上、信彦おじさんは同じ学校の大学部の教授をしているんでしょう？おじさんの書斎からでも、あなたたちのデータを書き換えるぐらい出来ますよ」

溜め息を吐きつつ、メモをする。

「それでは、それも調べなければならない。アメリカ国籍だとしたら、ちょっと厄介ですね。信彦おじさんがそこまでやっていてくれると、楽なんですが。パスポートを作って、となると、十日は必要です。明日にでも取り掛かりましょう。後は……ああ、そうだ。図書館で、アメリカのゴシップ記事を集めてきてください。それを使って、奴らの居場所を推理しましょう。タブロイド版がいいですね。よく、宇宙人がどうの、政府の陰謀がどうの、と書いてあるのがあるでしょう？奇妙な話を探すには、あれが一番です。あること無いこと書いてあるのには閉口しますが、少しでも目を引くようなことがあれば、何でも記事にしますからね。彼らの秘密裏の怪しい実験のことも、きっとあるはずです。十年ぐらいまで遡って、調べてください」

「解った」

瑠衣が頷くのを待って、今度は抄樹に顔を向ける。

「抄樹」

「……何だ」

そのあまりに顕著な態度の違いに、一度は殴ってやる、と心に決めながら、抄樹は答えた。この件が片付くまではこいつの頭も必要だが、終わってしまえば構わない。少しばかり脳細胞を壊してやったほうが、こいつのためかもしれない。人間、並が一番なのである。

だが、レイのほうはといえば、抄樹のそんな不穏当な心中は知らず、いたって冷静に先を続ける。

「車は運転できるのか？」

「免許は無いがな」

実を言えば、時々こっそりと夜中に信彦の車を乗り回しているのだ。これは義父も知っている。

初めて動いている自動車の運転席に座ったのは、八歳のときだった。やはり車の少なくなった夜中に、信彦の膝に乗せられてハンドルを握ったのだ。アクセルとブレーキに足が届くようになってからは、信彦を助手席に乗せて運転するようになった。思えば、信彦はあの頃からこうなることを予期していたのかもしれない。

「なら、いい。車自体は向こうに行ってから都合しよう」

レイは頷くと、今度は床に寝そべった爪牙を振り返った。この虎が、人並みか、それ以上の知能を持っているということは、九条家の中では周知の事実となっている。

発声器官の構造上、人間の言葉を話すことは出来ないが、こちらの言うことは完全に理解している。レイは、いつか、爪牙と抄樹、どちらのほうが高い知能を持っているのか調べてやろうと思っていた。

「爪牙、お前は流石に連れて行けないからな。おとなしく待っていろよ」

名を呼ばれて頭をもたげた爪牙の前に跪き、宥めるようにそう言い聞かせる。爪牙は留守番と聞いて不満そうな唸りを響かせるが、彼にも、どうしようもないのは解っていた。

「ごめんね、出来るだけ早く帰ってくるからね」

瑠衣がそう言いながらその鼻面を撫でてやるのに応えて、爪牙は甘えるように目を細めた。

「では、今晩のところはもう休みましょう。明日からはフル回転です。瑠衣さんは図書館での資料集めを、抄樹は昼間に寝て車の運転を練習、僕は暗号を解読します。ああ……あと、パスポートですね。国籍が日本のものでないと少し厄介ですが、まぁ、そのときはそのときで考えるとしましょう」

保護者の消えた九条家の夜が更ける。皆が皆、その胸に抱いている不安をきれいに隠し。

こんなことはすぐに終わり、平穏な日常がすぐまた返ってくるのだと、信じていた――信じようとしていた。

六

あれから丸一日が過ぎた。

午前三時。

今、家の中で起きているのは、レイ一人であろう。瑠衣(るい)は一時間ほど前に眠りに就き、抄樹はそろそろ目覚めるはずの時刻。

デスクライトだけを点けた薄暗い部屋の中で、レイは解読し終えた信彦の手紙を前に、頭を抱え、唇をきつくかみ締めた。そこに書かれていた予想を超えた事実に、彼は打ちのめされる。

「こんなことっ！僕や抄樹はともかく、瑠衣さんに何て言えば……」

暫らくの間、身動ぎ一つしない。これから、どんなふうに事を運んだらいいのか、頭の中でいくつかのパターンを組んでみる。だが、これが最上といえるものを見つけることは出来なかった。

諦めたように溜め息を一つ吐くと、立ち上がり、手紙を手にして抄樹(あつき)の部屋へ向かう。戸の隙間から光が漏れているところを見ると、やはりすでに起きているようだ。

大きく息を吸い、ノックをする。返事を待たずに中へ入ると、抄樹が驚いたようにレイを見た。

「どうした、こんな時間に。それにすげぇ顔色だぜ？お化けでも見たか？」

茶化す抄樹に、黙って手紙を渡す。軽く小突いただけでも倒れてしまいそうなレイの様子を訝しみながらも、抄樹は手紙を受け取ると読み始めた。

読み進むうちに、戸惑い、驚愕、動揺がその顔を走っていく。顔を上げ、縋り付くようにレイを見たが、抄樹はそっくり同じ眼差しとぶつかったことで、手紙の内容に偽りが無いことを証明されてしまう。

「それが、手紙にあったことなんだ。……どうしたら、いい？」

抄樹は答えられずに、再び手紙に目を落とす。読んではいない。

二度は読む気になれなかった。
自分が、今、受けたショックと、瑠衣がこのことを知ったときに受けるだろう衝撃を比べてみる。その差は明らかであった。
「……駄目だ。とてもじゃないが、瑠衣には言えん」
「だけどな、抄樹。あいつらに……エールリッヒに会えば、必ず瑠衣さんには知られてしまう。やつらが話してしまう。思いやりも何も無い方法で」
「だから、俺たちから言ってしまえってぇのか！？」
「やつらは彼女に様々なことをするだろう。瑠衣さんが本当にここにあるような能力を持っているとしたら、やつらが彼女をどんなふうに扱うかは、嫌というほど判る。彼女を物扱いし、瑠衣さんの自我など、決して認めようとはしないだろう。薬物の投与や、電気ショックなどを行うことにも、何の躊躇いも覚えない」
次の台詞を躊躇するように、一瞬間が空いた。軽く唇を舐め、息を呑む。
「彼らにとって、瑠衣さんは……ただの作り物に過ぎないのだから」
レイの口から出た『作り物』の言葉に、抄樹はこぶしを振り上げかけたが、レイの冷静な眼差しに会い、それを辛うじて押し留める。
「けど、俺たちの口から言えるのか！？瑠衣に……お前は――」
尻すぼみになる抄樹の声に、思いもかけなかった第三者が被さった。
「私が、何なの……？」
突然聞こえた細い声に、レイと抄樹は愕然として振り向く。無意識のうちに高まってしまった声が部屋の外にまで漏れてしまっていたことに、二人は気付いていなかった。これほど近くに来るまで人の気配に気付かないなど、常ならば、抄樹には有り得ないことだった。
心を絞るような思いで、同時にその名を呼ぶ。
「瑠衣……！」
その少女は、血の気を失い、目を見開き、口元を震わせていた。

「私は、何なの……？なんで、黙ってるの……？」
身体を固くして唇を引き結んでいる二人の姿が、瑠衣には、小さい頃に彼女が両親のことを尋ねるたびに困ったように目を伏せて同じように口を閉ざしてしまった信彦と重なって見えた。
自分の存在が根底から覆されようとしている。その恐怖は何ものにも勝る。
だが、そんなものに負けて真実から逃れるようなことは、瑠衣には出来なかった。
「手紙が解読できたのね……？見せて」
静かな要求。
激昂したものでなかったからこそ、逆らうことは出来なかった。
抄樹は唇を噛み締め、レイは黙って手紙を差し出した。
＊
瑠衣、抄樹、レイ、すまない。
ここに書いてあることは、本来ならば、私の口から直接話すべきだった。しかし、私にはどうしてもその勇気を出すことが出来なかった。全て話し終えたとき、お前たちにどんな目で見られるかを想像すると、どうしても言い出せなかったのだ。
出来得ることなら、これから書くことは、一生私の胸の中だけに留めておきたかった。
だが、爪牙が送られてきた以上、いつか必ず、お前たちが彼らに遭遇するときが訪れてしまうだろう。
その時、真実を知らないということは、とてつもなく大きな弱点になってしまうかもしれない。
だから、私は全てをお前たちに話そうと思う。
私は、日本で九条信彦という名で瑠衣と生活をするようになる前には、ある男と組んで研究をしていた。アルベルト・エールリッヒというドイツ人だ。
彼は幼少時を宗教的な対立から内戦状態にあったヨーロッパの某国で過ごし、その時、両親を、そしてとても大切な人をその内戦で

失った。そのためもあって、彼は思想の違いというものを憎んでおり――その憎しみは、並大抵のものではなかった。

そして、彼のその強すぎる憎しみと、物心つく以前からの、あまりに悲惨な体験で、彼の思想は歪んだものへと変わっていってしまった。争いが無ければ、という考えを通り越し、争いをなくすには皆が同じ考えを持てば良いのでは、と考えてしまったのだ。

そしてまた、私も彼と同じような経験をしていた。

私の場合は、アジアの某国の内戦で――これは政治上の理由によるものだった――恋人を失った。

彼女はそこの野戦病院でボランティアとして活動しており、私は医者として働いていた。

我々が手を尽くしても、次から次へと怪我人は運ばれてくる。手当てをしたものはまたすぐに武器を取って戦場に戻り、再び、更に酷い有様となって病院に送り込まれてくる。波打ち際で砂の城を築いているようなものだった。

虚しい努力。その一言に尽きる。

だが、それでも頑張れたのは、彼女がいたからだった。

負傷者にとっても、そして、私たち医療スタッフにとっても、彼女はまさに白衣の天使だった。

彼女に想いを寄せるものは何人もいたが、彼女は私のプロポーズを受けてくれ、内戦が終わったら、結婚しようと約束していた。

だが、彼女は、その約束をした数日後に、流れ弾に当たって亡くなってしまった。

まだ、二十歳になったばかりだった。

彼女を失った後、私は戦場を離れ、アメリカに渡った。二度と医者の仕事をする気にはなれなかった。彼女を助けられなかった私は、いったい誰を助けられるというのだろう。

出来るだけ医者からかけ離れたことがしたくて、大学では多少興味もあった考古学を専攻した。

そこで会ったのが、遺伝子学を学ぶエールリッヒだった。

私と彼は、すぐに意気投合した。
そして、彼と同様に争いを憎んだ私は、彼の考えにも、非常に共鳴してしまったんだ。
全ての人間を同じ旗の下に統一するという思想に。
私たちは同じような人間を集め、研究を始めた。
再び医者に戻った私は数名の医学者、生化学者と共に、人間の、生存本能に因らないこの好戦性の理由を突き止めようとした。だが、その謎は遺伝子にあると考え、それを調べていた我々が発見したのは、まったく別のものだったのだ。
それが、カリスマの遺伝子だった。
リーダーとなる人間には、遺伝子にあるパターンがある。それを特定して遺伝子に組み込めば、強力なカリスマ性を持った人間を創ることが出来る。その人間に世界を統治させようと考えた。
しかし、この人間に対する遺伝子操作の実験は上に知られ、我々は学会を追われることになった。
それぞれの分野で取った特許があったので、資金に困ることが無かった私たちは、人目につかないところへ引き込んで、そこで研究を続けることにした。
そうして生まれたのが、瑠衣、お前だ。
爪牙を送り込んできたのも、おそらく彼らだ。エールリッヒに私たちの居所が知られてしまった以上、いつかは、真実を知ることになるだろう。彼の口から出る前に、私から伝えよう。
瑠衣、お前に親はいない。お前は、科学の力を借りて、人が作り出した存在だ。
クローンのようなものとも言えるかもしれない。エールリッヒが選んできた女性の卵子に、我々が編み上げた遺伝子を組み込むというようなものだった。その卵子は、人類保存機関の卵子バンクの人間を買収して手に入れたのだと、エールリッヒは言っていた。
小さい頃、お前が両親のことを尋ねるたび、私は私の犯した大罪を責められているような気がした。それでも、私は、お前を作り出

したことを後悔はしていない。お前は私に家庭の温もりをくれた。小さなお前が私に向かって微笑んでくれるだけで、私は失ったものを取り戻せる気がした。

お前は私にとって、実の子供以上の存在なんだ。

彼女を失って以来、絶えることの無かった喪失感を、お前は、その笑顔だけで癒してくれたんだ。

どんなに言葉を尽くしてみても、私のこの気持ちは表現できないかもしれない。

だが、仮にエールリッヒからどんな事を言われたとしても、私を救ってくれたのはお前なのだということを、決して忘れないで欲しい。

話を元に戻そう。

瑠衣を生み出した私たちは、次に、肉体的にも精神的にもお前を支えることの出来るような補佐も必要だと思った。

参謀としてレイを、護衛として抄樹を。

お前たちは、選び抜いた精子と卵子を受精させ、人工子宮から生まれた。両親と呼べる存在もいる。その生殖細胞は瑠衣と同じ手段で手に入れた。

レイは優秀な知識人を数多く出している家系から、抄樹は多くの叙勲を受けた軍人の血筋から選び、胎芽期に薬物を投与した。

レイの卓越した頭脳と、抄樹の並外れた運動能力はその結果だ。

嬉しいものではないだろうがな。抄樹は、鍛え方次第では、常人の数倍の筋力を持つことが可能なはずだ。筋肉も骨も、通常の人間の数倍は強い。

そうして生まれてきたお前たちの面倒を見たのが、医者であった私と飯島魁、マリア・ジョンソンだった。

当初、私たちはお前たちのことをただの研究対象としか見てなかった。いや、仲間以外の人間は、人間ではないと思っていたのかもしれない。

すっかり忘れていた他者の存在というものを、皮肉にも、お前た

ちが思い出させてくれた。そして、そうなると同時に、お前たちに対する愛情もまた、湧き上がってきたのだ。
瑠衣が言葉を一つ覚え、抄樹やレイがハイハイをするようになる。そんな些細なことに、私たちは一喜一憂したものだった。
しかし、我々がお前たちを愛するようになると同時に、エールリッヒたちの心にもまた、それまでと違ったものが生じ始めたのだ。それが、支配欲という化け物だった。
もともと胸の奥に潜んでいたのか、それとも、あまりに強すぎる瑠衣の力を見て生まれてきたのか、それは私には判らない。だが、それが、私たちと彼らが道を分かつことになる始まりだった。
私たち三人の反対を押し切り、エールリッヒはお前たちに、彼には決して逆らえないような暗示をかけた。それが決定的な要因となり、私たちは彼らと決別した。お前たちを連れ、それぞれ別々に逃げたのだ。それが十年前のことだった。
子供には研究所での生活を忘れるように暗示をかけ、我々は時々連絡を取り合った。エールリッヒのかけた暗示を解くことは出来なかった。非常に巧妙なものだったからだ。
逃げ切れていたと思っていたが、私の居場所が知られていたとなると、先の二人の事故死も、彼らの仕業だったのかもしれない。
お前たちがこの手紙を読んでいるのだとしたら、私にも何かが起きたということだろう。その時、私が足手まといになっているのだとしたら、私のことは見捨てるんだ。そして、逃げろ。やつらはどこまでも追い続けるだろうが、お前たちなら逃げ切れる。
私も、魁も、マリアも、お前たちのことを愛している。
だからこそ、絶対に奴らの手に落ちて欲しくない。お前たちが物のように扱われるのを、二度と見たくは無いのだ。
お前たちも私たちのことを愛していてくれるのだったら、逃げてくれ。
私たちがお前たちに望むのは、ただそれだけだ。
頼む。

＊

読み終えた瑠衣は、手紙の束ごと、手を強く握り締めた。関節が白くなるほど、強く。

「私のお父さんは九条信彦だし、抄樹もレイも、私の弟よ」

瑠衣は頭を上げ、その瞳に強い光を宿して抄樹とレイを見つめた。手紙を読んでいた間中噛み締めていた唇には、うっすらと血が滲んでいる。

「私の出生がどうであれ、お父さんが私を愛してくれる限り、私はお父さんの娘だし、あなたたちが愛してくれる限り、私は二人の姉よ。たとえ、本当にここに書かれているように私は彼らに作られたのだとしても、そんなの関係ない」

確信を込めて紡がれた言葉。一片の迷いも無い。

「勿論だ。瑠衣は俺たちの姉さんだし、俺たちの親は、どこの誰とも知れないようなやつじゃない。九条信彦と飯島魁、そしてマリア・ジョンソンだ」

抄樹とレイの口から、同じせりふが出る。

まるきり中身の異なる二人だが、これだけは共通する事柄だった。ほんのわずかでも、躊躇うことの無い。

だが、そんな二人を見つめていた瑠衣の瞳が、不意に揺れた。とても強かった、瞳が。

「でも、私たちを追うあの人たちにとって、私たちは道具なのね」

堪えきれなくなったようにあふれ出す、涙。

ハンカチを取り出し、レイがそっとそれを拭う。

「あんな奴らに捕まってやる義理はありません。道具になんて、なってやるものか」

「けど、お父さんが……」

「勿論、親父は取り戻す。それに、ちょいとおまけを付けてやる。なあ、レイ」

抄樹の目が、ギラリと光った。常に自らの力を抑え付けてきた彼が、今、初めて、全身に闘気を漲らせていた。全力で戦うことに、

ためらいを微塵も見せていない。
レイが不敵に笑い、それを受けた。彼もまた、真に自らの能力を発揮すべきときを見つけることが出来たのだ。
「ええ、僕たちにこんな能力を付けたことを、死ぬほど、後悔させてやる」
＊
九条家から研究所に戻ったエールリッヒの異常に気が付いたものは、そう多くなかった。その数少ないうちの一人が、サラ・オドンネルである。
「エールリッヒ……？」
強張った背中を小さく呼び止めたサラの声に、エールリッヒは気付かない――あるいは聞こえていてもそうでない振りをしたのかもしれなかったが。研究のことについての報告は決して聞き逃すことは無いくせに、それ以外のことは、故意かそれとも無意識か、不思議と耳に入りにくいようだった。
「転移装置は完璧だよ。充分、実用に耐え得る。ご苦労だったな、次の成果も期待しているよ」
にこやかに労をねぎらうと、エールリッヒは心なしか早足でラボを後にする。
サラは彼を追おうとして、結局それが出来ずに見送ってしまう。時々、エールリッヒには全てを拒絶するような雰囲気を醸し出すことがあった。
人が共通の理念を抱くことを望んでいるくせに、エールリッヒ自身はそれに入ろうとはせずに、いずれ全てを捨ててしまうのではないか、そう思わせることすらある。
彼を包んでいるのは、決して癒されることの無い孤独だった。
ここの人々の、己の研究しか見ていないというあまりに狭すぎる視野に付いて行けなくて、何度か、決別しようかと思ったことがある。そのたびにサラをここに引き止める錨となってきたのは、それだった。

「あなたが見ているものは、いったい何なのですか……？」
目の前にいない相手に対するその問いは、答えを得ることは出来ない。
サラの溜め息は、空気に溶けた。
＊
エールリッヒは自室のドアを閉ざすと同時に、大きく息を吐いた。顔を覆う両の手は、細かく震えている。
「ルシアナ……シスター・ルシアナ……」
掠れた声で紡がれたのは、何よりも大事なものの名前だった。
十年ぶりに見た、ルナ。
成長した彼女は、まさにあのひとそのものだった。
確かに『彼女』を素としてルナを作るようにしたのはエールリッヒであったが、あれほど似たものになろうとは彼も予想していなかったのだ――ほんの少しでも『彼女』を思わせるものになれば、それで充分だったのだから。
それが、もう一度会えるとは。
「ルナ……ルシアナ……あなたなのですね」
熱に浮かされたように呟く彼の脳裏には、失ってから四十年は過ぎている『彼女』の姿が、微塵も色褪せないままに浮かぶ。その声は、微笑みは――そしてその死に顔は、いつでもエールリッヒの生きる糧だった。
血にまみれた大事なひとの身体を前に自らの無力を嘆いた少年は、もう存在しない。今、彼は、護りたいものを護ることが出来るほどの力を手に入れた。
彼女に対するエールリッヒの想いは、恋や愛などではない。そんな錯覚のようなものではなかった――もっと確かで、絶対的な存在感のある信念だった。
ルシアナは神の下僕としてエールリッヒの前に現れたのだが、彼にとっては神そのものなのだとすら言える。
「今度こそ……あなたは私が護ります」

囁きは宣誓だった。
そして、それは決して破られることは無い。

七

出発を明日に控えた日の晩となった。
瑠衣（るい）と抄樹（あつき）は、信彦がどういう手段を用いたのかは判らないが、日本の国籍を持つものとなっており、パスポートはすんなりと取得することができた。
「おじさんに感謝ですね。余分な手間が省けました」
赤地に金の紋が押されたそれを、レイが珍しそうにペラペラと捲る――日本国のパスポートというもの自体は別に目新しくも無いのだが、国家機関をごまかせるほどの記録操作がなされた上で発行されたパスポートのいうものには、そうお目に掛かれまい。
三人は、本来、どこの国にも属していないはずなのだ。彼女たちを人間として扱ってはいなかったエールリッヒたちが、ご丁寧に出生届など出したはずが無いのだから。養い親たちが、おそらく不法な手段で、国籍を取得してくれたのだろう。
「帰ったら、どうやったのかお父さんに訊いてみよう」
「あ、それは僕も知りたいかも……」
首を傾げる瑠衣に、レイが同調する。
州ごとに人口調査が分けられているようなアメリカならいざ知らず、戸籍がこれほどしっかりしている日本では、そう簡単に出来ることではないだろう。ハッキングにしても、流石に国のシステムに入り込むにはかなり困難なはずだ。
だが、二人の素朴な疑問も、抄樹にとっては何とも気の抜けるものだった。思わず溜め息を漏らしてしまう。
「二人とも、呑気過ぎるぞ……」
「君には僕たちの向学心が理解できないだけだ」
瑠衣は照れ笑いでごまかし、レイは言葉で答えたが、抄樹の言うことに一理――あるいは三理ほど――あることは確かである。
よりにもよって抄樹に指摘されるとは、と渋い顔をしながらも、

取り繕うように小さく咳払いをしてレイは口調を改める。
「彼らの場所は、予想が付きました。予定通り、明日、アメリカに渡りましょう」
パスポートに航空券を挿んで差し出す。
「向こうに着いたらすぐに車を購入し、その場所へ向かいます」
「ちょっと待て、そんな金なんか無いぞ」
気軽に言ったレイに、少しはこの家の経済状況を知っている抄樹が口を挟み、かなりよく知っている瑠衣がコクコクと頷く。確かに九条家は貧乏ではないが、三人の渡米費を出した上、ポンと車が一台買えるほど裕福なわけでもないのだ。帰ってきてからの生活もある。
だが、二人の心配に、レイはにっこりと微笑んで答える。
「心配は要りません。今、僕は、ちょっとした小金持ちなんですよ」
「お前が？」
納得できない抄樹は、疑わしげに眉を顰める。亡くなったマリア・ジョンソンの遺産でもあるというのだろうか。だが、信彦は飯島魁が抄樹に残した遺産を、彼が二十歳になるまで定期貯金にしてしまってある。レイのものも同じだと思うのだが。
それを尋ねると、レイは肩を竦めて両手の平を空へ向けた。君の想像力はそんなものなのかい？というふうに。
「株、です」
「株？」
胸を張ってそう言ったレイに、今度は瑠衣が目を丸くする。
「そう、何にしても、先立つものは必要ですからね。最初は、そんなにおじさんに世話になるつもりは無かったんです。中学校を卒業したら、この家を出ようかと考えていましたので。で、こちらに来て少ししてから、株を始めたんです。いや、なかなか楽しくて。あっという間に貯まりましたよ、五千万」
「五千万だと！？」「レイ君、この家出る気なの！？」
同じ台詞の中のそれぞれ別の事柄に驚いた言葉が、抄樹と瑠衣の

口から同時に飛び出した。抄樹方には取り合わず、瑠衣に困ったような目を向け、レイは言葉を濁した。
「え、あ、いや、だって、その、一応、他人の男女が……」
「他人？」
その言葉を聞きつけ、瑠衣の目がジワジワと潤んでくる。
「そういう意味じゃなくて……」
「じゃ、どういう意味？」
「え……、ええっと……」
しどろもどろと、いつもなら理路整然とどんなことにも答えられるレイだが、このことに関しては言葉が出ない。
頭を悩ます彼の姿をたっぷり拝んでから、抄樹が助け舟を出してやる。
「つまりな、瑠衣。男ってのは、惚れた女にはいいとこ見せたいもんなんだよ。たとえば、自分はもう一人前なんだってな。特に相手が年上だったりしたら、尚更なんだ」
したり顔の抄樹の言葉に、瑠衣は目を丸くしてレイを見つめる。
「レイ君、好きな人がいるの？」
何にも知らない瑠衣の言葉に、レイはちょっと肩を落とした。
――まあ、解っていないだろうとは思っていたけどね。
心中ひっそりと、溜め息を漏らす。
再びニヤニヤしながら、抄樹が口入れをする。
「まあまあ、思いっきり、片思いなんだから、訊いてやるなよ」
『思いっきり』のところに必要以上の力を込めた抄樹を、顔を赤くして睨みながら、レイは何とか取り繕う。わざとらしい咳払いをして。
「とにかく、お金はあるんです。あちらで車を買いましょう。というより、買い物はあちらで済ましたほうが利口ですね」
レイがそう言うと、まだ何となく納得のいかない顔をした瑠衣が、それでも、それ以上の突っ込みを止めて答える。
「うん、そう思ったから、他のものもまだ買ってないの。取り敢え

ずリストだけは作っておいたのだけど」
「流石、瑠衣さん。抄樹とは脳味噌が違いますね。抄樹は何も考えていなかっただろ」
先ほどのお返し、と言わんばかりに、抄樹に話を振る。
「何で、そこに俺が出てくるんだよ」
彼の抗議に、レイは肩を軽く竦めて、
「それは、君。抄樹ほど、頭の天辺から足の先まで、隈なく筋肉だけで出来ているようなやつは、そうはいないから」
ぐっと鼻白んだ抄樹だったが、決して負けてはいない。
「お前こそなあ、もうちょっと身体を鍛えろよ。吹けば飛ぶぞ？」
「良いんだよ。僕には、この、非常に優秀な頭脳があるからね。瑠衣さんと信彦おじさんぐらいは、一生余裕で養えるから」
「ケッ、男は身体だ」
「そんな下品な言い方を……」
漫才のようにポンポンと遣り取りをする二人を見て、思わず瑠衣が笑い出す。
「そんなに笑うようなことかよ？真実だろ」
渋い顔をしてみせる抄樹だったが、信彦の手紙を読んで以降初めて響いた朗らかなその声に、ほっとしたような顔でレイと小さく視線を交わす。一日の内に一度も彼女の笑い声を聞くことが無いというのは、辛いことだった。瑠衣にはいつでも笑顔でいて欲しいのだから。
弟たちの交わす安堵の気配に、瑠衣の胸も痛みを覚える。彼らの心配には気付いていた。そのたびに何とか笑って見せようとするのだが、どうしても形にならなかったのだ。
「ごめんね、私、元気出すから。負けないから」
瑠衣の言葉に、二人は、何を言っているんだ？というようなふりをする。
「何謝ってんだよ？」「そうですよ、突然」
そんな二人に、彼女は抱きつき、その肩に顔を埋める。

「二人とも、護るからね。お父さんも、爪牙も。あんな人たちに手出しなんかさせない」
その独白を聞いて、男たちは情けなさそうな顔になった。
「そういう科白は、男から女性に言わせてください」
「格好悪いよなあ」
「あら」
と、それは心外だと言わんばかりに、瑠衣は憤然と顔を上げる。
「誰だって、大事な相手は、護りたい、と思うものよ。ねえ、爪牙？」
話を振られ、人間並みの知能を持った虎は、その通り、と言わんばかりに目をつぶって見せた。その様子があまりに尤もらしく、それでいてどこと無くユーモラスで、三人は一瞬顔を見合わせ、ついで、笑いを爆発させる。何故そんなに笑うのかと言いたげな爪牙には取り合わずに。
今は、無理矢理にでも、笑い声を出していたかった。

＊

「ところで、ですね」
久方ぶりの笑いの後に、レイは信彦の手紙の解読と同時進行で彼の頭の中を支配していた考えを、そう切り出した。これもまた、避けては通れない難題のうちの一つである。
「瑠衣さんの能力というやつを、僕なりに考えてみたのですが……」
他の二人にとっても、瑠衣の能力のことは非常に重大な問題だった。
「何か、解ったのか？」
半ば身を乗り出すようにして、抄樹が意気込む。
「まあ……あくまでも推理だけど、な。何しろ爪牙が襲ってきたあのときしか実例がないから、本当に単なる推測しか導き出せない」
その言葉を聞く瑠衣の顔には、期待と不安がある。彼女の知らない、彼女の能力。
レイは手元のメモパッドに意味のない図形を書き込みながら、先

を続ける。
「僕が見る限り、瑠衣さん自身に、おじさんの手紙にあったような能力があるとは思えません。抄樹は……今まで、彼女がああいうふうになるのを見たことがあったか？」
抄樹はそれに、頭を左右に振ることで答える。レイは軽く頷いて首を傾げた。
「瑠衣さんは確かに人に好かれはしますが、それは『好かれる』というレベルのものに過ぎません。ひとを支配するようなものでは、ない……それでは、やつらにとって意味のあるものではないでしょう」
紙には隙間がなくなり、レイはペンを置く。小さな溜め息を一つ吐き、
「爪牙のとき……あの時、瑠衣さんは全くの別人のようでした。何よりも、僕自身が、頭で理解する前に、身体が自然と瑠衣さんの言うことを聞いてしまいそうだった。あの時、何があったのか、瑠衣さんは覚えていますか？自分が何をしていたのか、記憶にありますか？」
「いいえ、全然。あーちゃんが壁に叩きつけられたのを見たとき、何とかしなくちゃ、助けなくちゃ、て思ったとき、頭の中が真っ白になって……気がついたら、全部終わっていたわ」
ここまでいって、瑠衣は軽く首を傾げる。
「でも、目が覚める直前に、何か大事なことがあったような気がするの……」
ずっと心に引っかかっているのだが、どうしても思い出せない。顎を抱えて考え込む瑠衣を、レイは冷静に見つめた。彼女の返事で、レイは自分の考えに確信を持つ。
「僕が思うに、瑠衣さんの中には、その能力を持つ瑠衣さんと、持たない瑠衣さんがいるのではないでしょうか」
「それって……」
息を呑んだ瑠衣に、レイが頷く。

「ええ、多重人格というやつです。通常、多重人格というのは子供時代のストレスからなることが多いのですが、瑠衣さんの場合は少し違いますね。その能力があるために、もう一人の瑠衣さんが存在することになった、いわば、先天的のもののようです。そして、力を持たない瑠衣さんが手の出しようもない危機に直面すると、それを助けるために、もう一人の瑠衣さんが出てくる。……何か心当たりでも？」

本来なら相当衝撃的な事実であるはずだったが、レイが言葉を重ねるほど、瑠衣の顔が明るく輝いていく。彼女の頭の中でジグソーパズルのピースが一つ一つはめられていき、そして、完成した。そんな風情だった。

繋がった記憶を抱きしめ、瑠衣は微笑む。

「それ、ルナだわ」

「え……？」

初めて耳にするその名に、男二人は怪訝な顔をする。

「ルナ、よ。私の中のもう一人の私。ああ、思い出した。思い出せた。何で、今まで忘れていたのかしら。そうよ。爪牙と初めて会ったときの後にも、ルナと話をしたのに」

「瑠衣さん、その、ルナ、というのは？」

詳しく説明してください、というレイに、瑠衣が困ったような表情を浮かべる。

「説明、といわれても、私にもよく解らないから困っちゃうのだけど、とにかく、私の中にいるの」

「じゃあ、瑠衣が呼び出せば、ルナってやつとも話が出来るんだろ？」

頬杖を突きながら至極簡単そうに言ってのける抄樹に、レイは心底呆れたような目を向ける。

「お前、そんなに気楽に言うなよ。殆どの臨床例では難しいことなんだぞ。本人が別人格のことを認識しているというだけでも、珍しいことなのに」

そう言ったレイは、続く瑠衣の言葉を、耳に入ってきたものとは違えて脳に伝えてしまう。
「出来るよ」
「ほら、瑠衣さんだって、出来ないって……え？」
「ルナと代わればいいんでしょ？確か、子供の頃はやっていたもの。たぶん、今でも出来ると思う」
にっこりと笑う瑠衣を、レイは見つめる。その頭の中では、新しくもたらされた情報を処理しようと、脳細胞がめまぐるしく働き始めていた。
主人格と分離人格の両者の間での移行が主人格の意思で容易に行えるということは、多重人格の症例の中でも、そう多くはないはずだ。ただ単に瑠衣さんがその数少ない例のうちに入っただけなのか、それとも、また、全く別の理由によるものなのだろうか……？
目を細めて、しばし考える。
「では、取り敢えず、ルナと代わってみてもらえますか？」
レイの依頼にこっくりと頷いて、瑠衣は目を閉じた。
抄樹とレイが無言で見守る中、十秒ほどで、明らかに彼女の表情とその発散する空気が変わってくる。どこが、と言葉で言い表すことは出来ないが、別人だということは、はっきりと解った。
あのときのように。
二人は、目の当たりにするその変化に、改めて息を呑む。
そして、再び、その瞳が開かれたとき。
――爪牙のときの瑠衣と同じだ。
――これが、瑠衣さんなのか？
抄樹の頭の中には過去が、レイの頭の中には疑問が浮かび、そして、すぐに同じ結論に辿り着く。
――これが、『ルナ』なんだ。
あまりに圧力を持った、その瞳。二人の身体は、ギリギリと締め付けられるような感覚に襲われる。
「私が、ルナよ。やつらがお望みのね」

瑠衣の唇から出たその声は普段聞いているものよりもわずかに低く、そして、自嘲的な響きを含んでいた。その眼差しは、有無を言わせず、見るものを惹きつける。
「あんまり、私の目を見ちゃ駄目よ」
冗談めかしてはいたが、そこに含まれる苦い響きは隠しようが無かった。
「本当は、私は出てくるべきではなかったのよ。まあ、場合が場合なだけに、仕方ないけど」
全てを見通しているかのような口調である。
「あなたは、どこまで知っているんですか？」
もしかしたら、何もかもに答えをもらえるのでは、二人はそんな期待を抱く。しかし、彼女から返された言葉はそっけないものであった。
「この子が見聞きしたことだけ」
それを聞いた男二人の表情を見て、ルナは片眉を持ち上げる。
「おかしい？でも、そうなの。私は、万能ではないわ。単に余分な因子を組み込まれただけの、ただの、人間」
言葉を切り、一呼吸置いて。
「いうなれば……私は、この子の双子の片割れなの」
最後の言葉に抄樹は顔中に疑問符を浮かべ、レイは合点がいったと大きく頷く。
「バニシング・ツインですか」
レイがさらりと口にした耳慣れない単語に、抄樹が目で問いかける。早く先を聞きたいレイは、なおざりに説明した。
「双子を身ごもったとき、まれに双子の片方が消えてしまうことがあるんだ。片方に吸収されてしまうのではないかという説があるが……こういう形で残ることが有り得るのか……？」
今までそういった文献は見たことが無かった。首を傾げているレイに、ルナは苦笑を含んで先を続ける。
「まあ、ほら、私の場合はかなり特殊だから、あまり過去のデータ

に頼らないほうがいいと思うけど」
「他にも、何か……？」
「んー、一般のケースがどうなのかよく知らないから、これが変わっているのかどうか判らないけれど、私の場合は、私の意志で瑠衣と同化したの。私がそう望んだから、そうなったのよ」
「いわゆる、胎児の段階で、意志があった、と……？」
「ええ、そうしないと瑠衣が生きることが出来なかった。だから、そうしたの」
「でも、どうやったら、そんなことが？」
「私にもよく解らない。ただ、瑠衣を生かそうとしたら、そうなっただけ。なんて言ったらいいのか……瑠衣自体は、本当に、普通の、本物の人間なのよ。そして、所詮、人間に人間を作り出すということは不可能だった。
『私』は試験管に入れられたとき、『一人』だった。暫らくして『私』は五つに分かれたけれど、みんな次々に死んでいってしまった。私から分裂してしまった彼女たちは、自分で生命として活動するためのエネルギーを作り出すことが出来なかった。その意志を持つことが出来なかった。残ったのは、私と瑠衣……でも、瑠衣も時間の問題だった。一番頑張ったけれど、やっぱり駄目だった。
どんどん弱っていく彼女を見て、私は瑠衣に入り込むことを決めたわ。私から分裂した彼女たちは――そうね、双子というよりも、私の子供のようなものだった。最後の一人だけは、助けたかった」
どこと無く悲しげに、顔を伏せ気味にルナは言う。が、一瞬後にはそれを奇麗に振り払い、彼女は昂然と頭を持ち上げた。
「やつらは、多分、私の存在を知らないわ。単なる二重人格だと思っているのじゃないかしら。だから、瑠衣の意志を操れば、それでうまくいくと思っている。ところが、そうはいかないわ。私と瑠衣は、全く別の存在なのですもの」
ククッと、喉の奥に含んだ、鳩が啼いたような笑い。
「実際は扱いやすい瑠衣が消え、能力的にも性格的にも厄介な私が

残ることになる。これをうまく使うことね。私はこれ以後、表には出ない――決して。仮にあなたたちが失敗して瑠衣の自我が消され、やつらの思い通りになったとしたら、私も、自分の活動を止めるわ。やつらの好きにはさせない。瑠衣が死んだときが、私の死ぬときよ」

その眼差しが、決意の固さを物語っていた。

「私は世界の支配者になんてなりたくない。瑠衣を通して入ってくる、この暖かな情報だけで満足なの。瑠衣はとても暖かいのよ。あのときの選択は、間違ってはいなかった。私が誕生したのではなく、瑠衣が生まれたから、信彦たちの気持ちも変えられた」

心底嬉しそうに、瑠衣の身体を抱きしめる。顔を上げ、レイと抄樹を強く見据える。その瞳には、エールリッヒたちによって植えつけられたものとは別の力が満ちていた。

この二人には、余計な力など使う必要はない。そして、余計な言葉も。

「私にとっても、瑠衣は大切な子なの。だから……」

護って。何があっても。

その言葉は声にはなっていなかったが、二人の心にはしっかりと届く。それを最後に、ルナは再び瑠衣の置く深くへと沈み込んでいった。その頬に伝う涙は、果たしてどちらのものであったのか。次に二人の前に立っていたのは、瑠衣であった。外見はそのままに、明らかに異なる存在。

「私も、絶対に負けない。絶対に。今度は、私がルナを護る」

瑠衣の持つ力は、他者に対しての強制力は全くない。だが、どんなものよりも強かった。

八

何とか日本からアメリカへと舞台を移すことが出来た三人は、最初の宿泊先はごく普通の、どちらかといえば安っぽいと言えるモーテルへ腰を落ち着けた。金銭的な余裕はあったが、あまり目立つことの無いようにと、レイが中堅どころを選んだのである。

日本を出たのが夕方のはずなのに、アメリカに着いたらまだまだ真昼間という、記憶上初めての、十時間以上もの時間の逆行を経験し、瑠衣（るい）は気だるい身体をもてあましていた。

「瑠衣さん？大丈夫ですか？」

気遣うレイに、彼女は微笑み返す。

「ありがとう。でも、ちょっとだるいだけだから。大丈夫、すぐ治るよ」

「それならいいのですが……無理はしないでください」

瑠衣に優しく声をかけておいて、それにしても、とレイはもう一人の同行者に目を向ける。

「抄樹（あつき）は随分元気だな。長距離の移動には慣れていないはずなのに全然堪えていないとは、やはり並みの神経とは思えない」

信じられない、とばかりにわざとらしく溜め息を吐くふりをする。

国内を横断するだけでもおよそ四時間の時差を経験することの出来た――しかも、その卓越した頭脳のために国内外を問わず飛行機での移動が多かった――レイでさえ、地球を半周するこの行程には少々辛いものがあったというのに、生い立ち上は瑠衣と同じ条件である抄樹は平常そのものである。

「あーちゃんはいつも元気だから……」

「元気――使い勝手のよい言葉ですねぇ」

仲が良いのに喧嘩ばかりしている弟たちを見守る姉の風情で苦笑を浮かべる瑠衣に、レイは肩を竦めて目だけで天井を見上げた。

ホテルの部屋を隅々まで調べようと歩き回っている抄樹を、レイ

が目一杯バカにした眼差しで見る。
「いい加減に落ち着いたらどうだ？マーキングをしている熊じゃないんだから」
動きがピタリと止まった。
しかし、身長が百八十センチ以上で、しかもスレンダーとは到底言いがたい男がのしのしと歩き回っているさまは、その形容が非常にしっくり来るのである。
「……くま……」
「瑠衣。そういう顔をしているということは、お前もそう思ってるってことなんだな」
いかにも笑いを堪えています、と言わんばかりに肩を震わせている瑠衣を恨めしそうに睨む。そうなると、熊というよりも、さながら頭からバケツいっぱいの水を掛けられた長毛種の犬である。
渋い顔で探索を中止すると、抄樹は瑠衣の隣に腰を下ろした。
「やれやれ、ようやく作戦会議が始められますね。あまり時間が無いというのに」
これ見よがしな溜め息を吐きつつ、レイが肩を竦める。
「一言多いんだよ。ったく……嫌味なやつだよな……」
ぼやいた抄樹の背中を、苦笑しながら瑠衣が軽く叩いた。
「レイ君もあーちゃんも、作戦会議でしょ。早くしようよ。これからどうしよう？」
「そうですね。僕としたことが、つい抄樹ごときに馬鹿なことを」
反応するのは無駄なことだと解っているのだが、いちいち癪に障るやつである。抄樹はこめかみに青筋を浮かべながらも、何とか心の中でゆっくり三まで数えた。舌戦で適うわけがないのはわかりきっていることだ。抄樹は口にしっかりチャックをすることを決め込み、腕を組んでそっぽを向いた。
「これからすぐに買出しに行きましょう。まず、自動車を――足が無ければ、如何ともしがたいですからね」
口を動かしながら手を動かし、レイはこの滞在のうちに必要とな

るものを次々と書き出していく。
「でも、私たちみんな未成年でしょう？保証人も無しに車を売ってくれる人いるかしら」
尤もな瑠衣の言葉に、レイは無言で彼女の横に腰を下ろしている抄樹を指差して答える。
「彼だったら、もう十八歳だと言っても通用するでしょう。ましてや日本人だといえば、童顔だということで納得してもらえます。個人経営であまり盛っていなそうなところを選んで、向こうの言い値に五割かそこら上乗せすれば、大丈夫です」
「……人のこと指差すなよ」
真っ直ぐ向けられた指を払いのけ、抄樹は憮然とした顔で呟いた。
「おや、失礼。そんなことを気にするほど繊細な神経を持っているとは思わなかったもので」
再び、可愛げが微塵も無い物言い。
元々それほど丈夫な堪忍袋の持ち主ではない抄樹である。ブチッとその緒が切れる音が頭の中に響いた。
男二人が同時に勢い良く立ち上がる。
漆黒とライトブルーの二つの瞳が真っ直ぐにぶつかり合った。二人の衝突が表面化したのはこれが初めてである。
軽いジャブのような言葉の応酬はしょっちゅうあった。だが、ここで注目すべきはそれらの発端が、常にレイの側にあったということであり――そして、大きな喧嘩にならなかった理由というのもそこにある。
事有るごとにレイは抄樹の揚げ足を取り、揶揄し、皮肉った。それは今まで他人とは常に透明な壁を通してしか接しようとしなかったレイには有り得なかった言動だった。
何か曖昧な苛立ちのようなものが彼にそうさせるのだが、それでは、何故、そんな子供じみたことをするのかと問われると、答えを返すのが困難なのだ。
そのことが、なお一層レイを苛々させた。

睨み合いは一瞬。
抄樹がレイの胸倉を掴もうと腕を伸ばし、それを避けようと身構えた細身の肩がこわばった。
その時、彼の気を殺ぐタイミングで、のんびりとした声が隣から届く。
「レイ君て、本当にあーちゃんのことが好きだよね」
視線がベッドに座り込んだままの瑠衣に集まった。
「……今、何て言った？」
「だから、レイ君は、あーちゃんのことを、とっても、好きだよねって」
耳を疑う台詞に強調語が加えられた。
がくりと、二人の緊張が解ける。息を揃えたわけでもないのに、全く同じ仕草でドサリと腰が落ちる。
「僕が、抄樹を、ですって……！？まさか！」
「お前な、状況を全っ然、理解できていないだろう。どこをどうやったら、そう見えるんだ？」
こういうときだけ息の合う二人の猛烈な反対に、瑠衣はきょとんと首を傾げるだけである。
「え？違うの？二人とも仲良いでしょ。いつも、ちょっと妬けちゃうんだけどな」
「仲好いように見えるのか、これが？」
肩の間に頭を落とし、尋ねるというよりも確かめるような口調で、抄樹がいささか間の抜けた彼女の台詞を繰り返した。レイに至っては言葉も無い。
二人のそんな態度が解せない瑠衣は、益々首を傾げる。
「でも、レイ君てば、あーちゃんには自分から話しかけるんだよ。それに、私には丁寧な言葉しか使わないし」
「こいつのは話しかけてくるんじゃなくて、喧嘩売ってきてるんだぜ」
「喧嘩するほど仲がいいって言うのよ」

「そういうレベルじゃぁないと思うけどな……」
とことん対人関係において感覚が違いすぎると見た。天然ボケもここまで来ると幸せなものである。
「おーい、レイ。お前は何か言うことが無いのか？」
瑠衣を正すことは諦め、抄樹はさっきから黙り込んでいるレイへと話を振った。が、反応が無い。
いつも隙の無い彼がぼんやりするとは珍しい。
「？……レイ君？」
瑠衣が覗き込んだが、やはり返事が無い。
「あんまりお前が馬鹿なことを言うもんだから、こいつの優秀すぎる脳の回路がどっかいかれちまったんじゃないのか？」
「どこが馬鹿なの？ホントのことでしょ」
ひそひそと二人の遣り取りが耳に届いたのかどうなのか、レイが突然伏せていた顔を上げて声を上げる。それはまさしく、『ユリイカ！』と叫ばんばかりの動作であった。
「そうです！そもそも、この僕が抄樹風情にいちいち目くじらを立てるということ自体が間違っているのです！そんなことに今更気付くなんて、僕としたことが……」
情けない、と頭を振るレイであるが、『風情』呼ばわりされた抄樹にそんな台詞を放っておけるはずが無い。
「おい、なんだよ、その言い草は！」
ベッドをひっくり返す勢いで立ち上がり、怒鳴り飛ばす。
「いや、気にしないでくれ。自分の馬鹿さ加減にも気が付いたところだから」
「だからな、それがお前ムカつくってんだよ、俺は！」
完全に頭に血が昇っている抄樹に、レイは両手の平を上に向けて首を振る。
「ほら、こうやって母国語さえ満足に扱えないものを僕が相手にすることが間違っていたんですよね。そう思いませんか、瑠衣さん」
「お前、ムカつくぞ、非常にムカつくぞ、俺は！」

「え……えーっと……？」
なんと答えるべきなのか。
あちらを立てればこちらが立たずという状況で同意を求められても、瑠衣に返事ができるわけも無い。さらに時差ぼけで半分寝ているような脳味噌では、満足な思考も成り立たない。自然、言葉尻を濁した、意味を持たない感嘆詞しか口から出てこなかった。
頭に血が昇りきっている抄樹と、二人の弟の板ばさみとなって頭を抱えている瑠衣を尻目に、一週間越しの便秘がようやく解消したような晴れ晴れとした顔をしているレイではあるが、では、何故、抄樹のことを目の敵にしたのか、という肝心な問題から目を逸らしていることには、彼自身気付いていなかった。
何故、抄樹のことが気に障るのか。
プライドの高いレイではおそらく一生悟ることは無いと思われるその理由というのは、ひとえに『嫉妬』という感情に基づいたものであった。何のことはない、自分よりもはるかに昔から瑠衣と一緒にいた抄樹に、レイは焼餅を妬いたのである。
そして、また。
抄樹のほうが瑠衣といた年月が長いというレイの嫉妬の理由は、同時に、抄樹の余裕となっていた。本来なら、言葉でとはいえこれほど喧嘩を売られていて、抄樹がおとなしくそれを受け流しているはずが無いのだ。
レイが抄樹に抱いている嫉妬、そして、抄樹がレイに対して抱いている無意識の優越感。
知らぬが仏、という微妙なバランスで三人の天秤は保たれていた。
「じゃあ、すっきりしたところで行動を開始しましょうか」
一人で『すっきり』した顔をしているレイはスックと立ち上がると、意気揚々と地図を広げ始めた。この辺りの大まかな道をあらかじめ頭の中に入れておけば、不必要に歩き回る無駄は省ける。
「俺のこのムカつきは、いったいどうしてくれるんだよ、畜生……」
取り残されてぼやいた抄樹の背中を、瑠衣が苦笑しながら軽く叩

く。そのフォローが無ければ、最高潮となっていた彼のストレスは爆発していただろう。
――今は、こいつを相手にしている場合じゃないんだよな。小さいことは後だ。親父を取り戻さなきゃならないんだし、瑠衣を護ってやらなきゃならない……レイもな。
抄樹は大きく深呼吸して気を取り直す。
「俺とレイで用は済ませてくるから、その間瑠衣はここで寝てろよ。少しは楽になるだろう」
抗議の声を上げる間を瑠衣に与えずに、それで良いよな、と同意を求めるようにレイに目を向けたが、抄樹の予想に反して彼は首を振った。
「いや、時差ぼけはかえって外に出て動いたほうが早く治るし、バラバラになっているときにやつらが手を出してこないとは限らない。つらいでしょうが、瑠衣さんにも一緒に行ってもらいます」
「けど、かなり具合悪そうじゃないか。無理してもっと悪くなったら……」
「私なら大丈夫だよ。それより、二人と離れるほうが、いや。一緒に行く」
「抄樹、多数決だ。一対二では勝ち目は無いだろう。そもそも、過保護にすればいいというわけでもないし」
確かに、レイの言うことには一理ある。抄樹にしても、自分が過保護だと思うときが多々あるのだが、瑠衣が転びそうになると、つい手を出してしまうのだ。これは彼にとって、理屈や頭で判断できるものではなかった。
二人――取り分け瑠衣本人の反対を無下にするわけにもいかず、抄樹は三人揃っての行動を受け入れる。
「仕方ないか……やつらがいつ手を出してくるか判らないし。全く、厄介だよな」
「まさに神出鬼没。彼らにあの移動法が使える限り、僕たちにはわずかな油断も許されない」

「あーあ、俺向きの相手じゃないよ。こういう、色々作戦を練らなきゃならないってのは」
「わざわざ自分で言わなくても、そんなのは判りきったことだよ。君は力だけの人なんだから」
「それを言うなら、お前はもやしだろ。ひょろひょろしやがって」
またぞろ始まるじゃれあい――抄樹とレイにとっては、お互いの威信を掛けたそれなりに真剣な口論なのだが――に、その収拾が付かなくなるほど過熱する前に、と瑠衣が割り込んだ。
「またぁ。二人とも、のんびりしている暇は無いんでしょ。全部終わったら、いくらでも遊べるんだから、今は取り敢えず退いて退いて」
まるで子犬の喧嘩を引き分けるような物言いに、義弟らは情けない顔で肩を竦めあった。
度々言及される『力と頭脳、どちらがより役に立つものなのか』という議論は、他でもない、この瑠衣のためなのである。ここでも知らぬは本人ばかりなり、ということか。
「俺らって報われねぇよなぁ」
「そうだな……ま、持久戦は覚悟の上だ。ああ、言っておくけど、僕は気が長いから」
「俺もだよ。何たって、この道突っ走ってかれこれ十年なんだからな」
「……それだけ掛けても駄目なんだから、もう諦めたらどうだ？」
「バカ言うなよ。それが出来るくらいなら苦労しない。大体お前、人事じゃないぞ。あいつの鈍さは尋常じゃないんだから」
「それはそうかも……」
ぼそぼそと野郎二人が額を寄せ合って内緒話をするさまは、かなり変だ。瑠衣が不審も露わに顔を寄せるのに、抄樹とレイは揃って口を噤む。仲間はずれにされて、当然彼女には面白くない。
「何よ、やっぱり仲良いんじゃない」
二人に背中を向けて口を尖らせた瑠衣の後ろで、抄樹とレイは顔

を見合わせて苦笑する。
「おーい、瑠衣。むくれるなよ」
「そうです。美人が台無しじゃないですか」
すかさず点を稼ごうとするレイを横目で睨み、抄樹が鋭い切り替えしを浴びせた。
「バーカ、このぐらいじゃぁ、瑠衣はブスにはならねえよ」
「うっ……これは一本取られたかも……」
放っておけばいつまでも続いてしまいそうな弟たちの掛け合い漫才に、瑠衣のジェスチャーも長くは続かず、つい頬を緩めてしまう。
「そういう台詞は私にじゃなくて、将来好きになった娘に言うものよ」
クスクスと笑みを漏らしながら無邪気に言ってくれる瑠衣を、男二人は複雑な心境で見やった。なかなか気が合うことのない二人だが、彼女のことについては常に共通なのである。
顔を見合わせて苦笑いを浮かべる抄樹とレイを、一人事情の飲み込めていない瑠衣が首を傾げて見つめる。その顔がなんだか嬉しくて、二人はとうとう声を上げ、身体を曲げて笑い出した。なんとも平和な、何も知らない者が見たら、子供たちが親抜きの旅行を楽しんでいるとしか思えないような、その光景。
だが、いくら三人で軽口を叩いていても、彼らの心も同じくらい軽いわけではない。気を抜けば容赦なく首をもたげてくる不安を紛らわすためには、そうするしかなかった。
強大な力を持つ敵を相手に、特異な能力を背負わされたとはいえ、まだ子供でしかない瑠衣たちには、時折目の前の壁から目を逸らすことも必要だったのだ。
＊
部屋に入ってきたエールリッヒに、信彦は薬でどんよりと濁った目を向けた。だが、現在の敵である男を見ても、信彦の心は何の反応も示さない。
その人物がエールリッヒだということは判っており、彼がどんな

ことをしたのか、ということも覚えているのだが、思考と情動を繋ぐ糸がプッツリと切られたように感情が働かない。
背中を丸めてベッドに腰を下ろしたままの信彦を、エールリッヒは冷たく一瞥する。
「だらしないな……信行。それとも、信彦と呼ぼうか？」
皮肉な色を浮かべるエールリッヒの言葉にも返事はない。
膝の上に投げ出された両手首の包帯に視線を送り、エールリッヒは外見だけは痛ましそうに小さく肩を竦めた。
「私だって、君に薬なんて使いたくはなかったのだよ。ただ、少し目を離すと、すぐに君は怪我をしてしまうからね、仕方がない。まったく……せっかく君の可愛い子供たちが助けようと頑張っているというのに、彼らがここについたとき、君がこの世にいないのでは、可哀相ではないかね」
信彦の目に、微かに生気が戻る。
「な、に……？」
「ルナたちがここに来るよ。もう、同じ大陸に足を下ろしている」
「ルナ、ではない。あの娘は瑠衣だ……ごく普通の子供として育ててきた――現に、ここから出て以来、あの力は一度も発現していない」
細かく震える信彦の肩を宥めるように叩くと、エールリッヒは子供に言い聞かせるように優しく微笑んでみせた。
「君は聞いていないのかい？ルナは一度現れている。十七号――ああ、君たちはあれを爪牙と呼んでいるのだったかな、あれを君のところに送ったときにね。ルナが十七号を従わせたのだよ。そうでなければ、どうしてあれがおとなしく言うことを聞いていると思っているのだ？」
言葉を増すたびに、徐々に嘲笑の色が濃くなっていく。
「どうしたのだね？ああ、彼らに隠し事をされていたのがショックだったな？」
だが、彼らを責めてはいけないよ。彼らなりに考えた結果だった

のだろうからね。
信彦の沈黙をどう取ったのか、エールリッヒは、鉄格子越しに窓から外を眺めながら続ける。
しかし、信彦はその台詞の半分も聞いてはいなかった。エールリッヒに言われなくても、子供たちの結論に異を唱えるつもりはない。いつでも子供たちの自主性に任せてきたのだから。
だが。
信彦には、今回の瑠衣たちの判断を認めることは到底できなかった。助けに向かっていると聞いて、嬉しく思う気持ちは微塵もない。愚かとしか言いようがなかった。
瑠衣たちがここに来るまでに何とかしなければ。
そうは思っても、焦りは強制的に毎日投与されている薬物の効果と相まって、心と脳をちぢに掻き乱す。
「頼むから……頼むから、もう放っておいてくれ……あの子達は幸せに暮らしている――いたんだ。お前たちが手を出さなければ……普通に暮らしていける」
頭を抱えている信彦に、エールリッヒは冷ややかな眼差しを向ける。
「君は、あの目的をすっかり見失ってしまったのだな。自分たちさえ良ければいい、というくだらない人間どもと何ら変わることがない」
「それは違う。私は……」
「何が違う？何も違わないだろう。君たちは、一時の情に流されて、大勢を見失ったのだ」
信彦の弁明は、穏やかな声で叩き潰された。
「私たちが目指したのは、完全なる平和ではなかったのか？そのために必要なことは、君も解っていると思っていたが、それは私の見込み違いだった」
淡々とした口調には何の感情も込められてはいないようだったが、そうではなかった。永い年月をかけてエールリッヒの奥底に凝った

ものは、あまりに深すぎるがために、外側から察することは難しい。
かつてはその根本に共鳴したことのある信彦にも、エールリッヒの心を知ることは結局出来なかった。
もし、エールリッヒの思想ではなく、彼の心を理解することが出来ていたら。
信彦はこの研究所を離れていた頃、考えてみたこともある。けれども、それは実現することのないまま、永久に手を離れてしまったのだ。
もしかしたら、何としても知るべきであったのかもしれない。
そうすれば、何かが変わっていたのかも……。
信彦の短い物思いは、エールリッヒの声で断ち切られた。
「残念だったよ、君があれらを連れて姿を消したときは。まさか君が、裏切るとは思っていなかったからね」
彼の放った『裏切り』という言葉が、信彦の中の何かを刺す。
「裏切り、か……。では、アルベルト、君のしたことは何だったのだ？決別の直接の引き金となったのは、瑠衣たちにかけたあの暗示だった。何故、あんなことをした？君はあの娘の力を私有しようとしたのではないか？君こそ、私欲に負けたのだろう？」
会話が次第に信彦の頭を覚醒させていく。言葉を紡ぐのにもたついていた舌が滑らかになるのに比例して、脳の回転も速やかになっていくのが自分でも判った。
「瑠衣を操り、自らが世界を支配しようとしたのではないのか？それこそが、私たちの目的に対する裏切りだった。アルベルト、君が変わったから、私も変わったのだ」
「なるほど……お互い様だといいたいらしいな。だが、ルナたちを私に逆らえなくしておいたのは必要に迫られて、だ。彼女の能力を、君も見ていたはずだろう。ルナの成長が間違えた方向へ伸びたとき、誰が彼女を止められると思う？ルナが逆らえない存在も必要だったのだよ」
「それでは、あの子達の意思はどうなる？君の思うままに操られ、

望まぬ権力を握らされるのか？」
責めるように、皮肉るように問い掛ける信彦の声を、エールリッヒは軽く受け流す。
「まさか、操るなど……馬鹿なことは言わないでくれ。彼女は大切に扱うよ。ただ、時々軌道修正するだけだ――道を間違えることの無いように」
憤りを含んだ信彦の眼差しと、冷ややかなままのエールリッヒのそれとが絡まりあう。
だが、二人の辿る線は、どこまでも平行のままだった。決して交わることは無い。
幸せの在りかを違えてしまった二人には、かつての共鳴は有り得なかった。
言葉は途切れ、沈黙がその場を支配する。
凍った空気の中で、二人の息遣いだけが揺れていた。

九

「おい……？レイ？何やってんだ、こんな夜中に」
バスルームのドアを開けた抄樹（あつき）は、そこで鏡と顔を突き合わせているレイに、潜めた声でもっともな疑問を投げかけた。時計の針はとうに三を回っており、夜の遅い瑠衣（るい）でさえ静かな寝息を立てている。
しかし、鏡を見つめたままのレイから返るものは無く、抄樹は眉を顰めた。
「おい、レイ？」
重ねた呼びかけでようやくレイは振り向いたが、それでもその視線はどこかぼんやりとした、焦点の定まらないものである。
「……寝惚けてんのか？」
試しに抄樹は彼の目の前で手をひらひらと振ってみる。全く反応が無い。よく見ると、その口元が何かを呟くように小刻みに動いていた。
尋常ではないレイの様子を持て余し、その肩を揺すろうと両手を上げた抄樹の背後から、唐突に声が被さる。
「あーちゃん？」
「瑠衣！起こしちまったか」
「どうしたの？」
不安そうな響きが一瞬滲んで、すぐに拭い去られる。ほんのわずかなものであったそれを、抄樹の耳は取り逃がさなかった。
こんなとき、抄樹は自分の無力を痛感する。
――俺にもっと頼りがいがあれば、瑠衣にこんな顔をさせずに済むのに。
呟きを心の中で噛み殺し、なんでもないように、努めて明るい声を出した。肩越しに親指でレイを指す。
「いや、こいつが寝惚けたみたいで……気にしないで寝てろよ」

「え……？」
しょうも無いやつだよな、と笑う抄樹を半ば押し退けるように、瑠衣が身を乗り出した。
「レイ君……？大丈夫、レイ君？」
そっと頬に手を伸ばし、静かに瑠衣が呼び掛ける。
だが。
「はい？あれ……瑠衣さん？どうかしましたか」
あれほど抄樹が呼んでも何の反応も無かったというのに、けろりとした顔でレイが首を傾げた。
「おい……そこまでやるか？」
こめかみを引き攣らせた抄樹に、レイが眉を顰める。
「何のことだ？」
まるで思い当たることが無いような、心底からの疑問符である。
「何のことだって、お前、あんなに俺が声を掛けたのに聞こえねぇ訳が無いだろう。実に見事なシカトだったぜ」
「ああ……そうだったか？それは悪かった」
抄樹に対するものにしてはすんなり出て来はしたが、その謝罪には全く誠意というものを感じることが出来なかった。
謝られて一層腹が立つというのは、いったいどういうことだろう。
「ほぉう……俺はまた、君が自分の美貌に見惚れているのかと思ってしまったよ」
瑠衣のためにも早々に話を切り上げようと思っていたのだが、ついいつもの如く始めてしまう。
しかし、それに対するレイの切り返しもまた、速やかなものだった。
「まあ、確かに僕の外見は鑑賞に堪え得るものですけどね、そういう趣味はありませんから。抄樹こそ、その素晴らしい肉体美に惚れ惚れしちゃったりしていないでしょうね」
沈黙数秒。
「あの、ね……レイ君大丈夫みたいだし、もう寝ない？明日もある

んだし……」
笑いを堪えてピク付く頬で、瑠衣が険悪になりかけた空気を取り持った。三人が詰め込んでいささか窮屈なバスルームから、二人の背中に手を添えて押し出す。
この段階で、レイの態度がおかしかったということは、抄樹と瑠衣の頭の片隅へと押しやられていた。
あれが何であったのか二人が知るのは、かなり後になってからである。

＊

翌朝、レイの姿はどこにも無かった。

＊

レイクウッド。
名前が表すとおり、その町は豊かな森と広大な湖を有する――ただ、森はあまりに豊かすぎ、湖は沼と呼ぶほうがふさわしいものであるがために、風光明媚とは言いがたいものとはなっていたが。
瑠衣と抄樹は、今その町にいた。
いなくなる前に――エールリッヒたちに連れ去られたということは明白だが、レイの名誉のために敢えてそれに言及することは避けておこう――レイが地図に印を付けておいたので、何とかこの町までは辿り着くことが出来たのだが、それもここまでだった。
詳細は全てレイの頭の中にあり、最終目的地まであとどのくらいの距離があるのかということすら、見当も付かない。
レイを連れ去ったこと以外、エールリッヒたちからの干渉はなく、道中、子供の二人連れと見た強盗との喧嘩沙汰が三度という、この旅行の目的の割には、平和なドライブだった。
向こうが手を出してきてくれたほうが、抄樹と瑠衣にも何らかの打つ手を見つけられるというものなのだが。
「あのバカ、口だけは達者なくせに」
この台詞を、三日の間に何度繰り返したことだろう。
内心、抄樹も我ながら未練がましいとは思っているのだ。

少なくとも、車の中では両手の指でも余るほど、レイクウッドに着いてこの宿を取ってからでも五回は、口にした。
だが、ここに腰を落ち着けて丸一日、何の進展も見られていないのだ。否応なしに削られていく時の中で、焦れる心は限界に近づきつつあった。
――もっと、レイが詳しいことを話してくれていたら、いや、そもそもあいつがエールリッヒに捕まったりしなければ……。
心の中で舌打ちをしそうになって、抄樹は首を振る。
そうではない、一番腹立たしいのは、レイが連れて行かれるときにも呑気に眠りこけていた自分だった。
「間抜けなのは、俺だな……」
殴りつけた壁から、パラパラと破片が零れ落ちる。その拳の力よりも強く、抑えた声が己の身を打ち据えた。
「あーちゃん……」
瑠衣は名を呼び、そっと、両手で抄樹の拳を包む。漆喰を零れさせても掠り傷一つ付くことの無いそれとは裏腹に、己の失態に彼の自尊心が深く傷つけられたということは、痛いほどに判った。
「あーちゃんのせいだけじゃないでしょう？私だって、全然気が付かなかったのよ？」
そんなに自分だけを責めたりしないで、と囁く声が、優しく耳朶を打つ。
ふわりと甘い香りが漂い、次の瞬間、抄樹は腕の中に義姉を引き込んでいた。柔らかな髪に、頬を埋める。
力を入れ過ぎて壊してしまわないように、だが、しっかりと、その華奢な身体を抱きしめた。瑠衣の細い肩は、スッポリと抄樹の身体に包み込まれてしまう。
「あーちゃん……？どうしたの……？」
ちょっと痛いかな、と思いながらも何とか腕を引き抜き、抄樹の背中に回す。ぐずる子供を宥めるように、優しく叩いた。
この身体の大きな弟がこんなにも頼りなく思えたのは、十年前の

飯島魁の葬式のとき以来だった。
「……」
「何……？今、何て言ったの？」
抄樹の低い呟きを聞き取れなくて、瑠衣は問い返す。だが、その答えを得ることは、ついにできなかった。
短くて永いそのときを、唐突な女性の声が断ち切る。
「ちょっと失礼してよろしいかしら？」
思いも寄らなかったそれに、抄樹は真っ赤に焼けた鋼をその腕に抱いていたかのように、身を引き離した。
咄嗟に瑠衣を背中に回し、声のしたほうへ振り返る。厳しい誰何と共に。
「あんたは……？」
それまでの気弱な姿が嘘のように、油断無く身構えた彼には、これ以上のしくじりを自分に許さない気迫に満ちていた。
「初めまして、私はサラ・オドンネル。あなた方を迎えに来ました。レイも私たちのところにいます。……来ていただけますね」
依頼の形は取っていたが、それは紛れも無く強制である。
「行かなきゃどうなる？」
「構いません。あなたを排してルナだけを連れて行きます」
「あんたが……？俺のことは聞いているんだろ？出来ると思うのか？」
鼻で笑う抄樹に、サラは氷の如き姿勢を溶かすことなく、平坦な口調で答える。
「私に出来なくとも、研究所にはまだまだ有能な人間がいます。いずれルナは私たちの手に落ちるでしょう」
力に任せた脅しは全く功を成すことが出来ない相手であることは明白だった。
「……さっきから気になってたんだけどよ、こいつは瑠衣だ――ルナじゃねぇ」
どうもこの手の人間とは合わないらしく、抄樹は鼻の頭に皺を寄

せる。その彼に庇われて、瑠衣は、一見冷ややかなだけのように思える目の前の女性が漂わせている何か物悲しい香りを肌に感じていた。

切なさと諦めと、そして、微かな嫉妬。

――このひとも、私たちのことに関わっていたのかしら。

今ではなく、過去において。

確かに、サラはエールリッヒとよく似た、どこか機械じみた話し方をする。だが、あの男とは違い、彼女のそれは、何故か、借りてきた鎧のように感じられるのだ。

瑠衣には、サラを囲む壁の向こうに、意図して作ったものでは隠しきれない優しさが見えていた。

「二人は、無事なんですよね？」

念を押す瑠衣の目を真っ直ぐに見返し、サラは自己紹介と何ら変わらぬ口調で答える。

「肉体的には、ということなら」

嘘や阿りの無いその返事。

抄樹は思わずサラの胸倉を掴みそうになったが、瑠衣の手がそれを止める。

何でだ、と目を剥く弟を抑えて、瑠衣は更に問いを重ねた。

「肉体的にはって、どういうことですか？」

「……鳥野氏は私たちの元に来てから、数度自殺を図りました。我々の研究所には、一日中彼を見張っていられるような余分な人員はおりません。積極的な意志を奪うため、薬を使用しています。肉体的依存は比較的少ないものなので、常用を止めれば本人の意思次第で完全に身体から抜くことが出来るでしょう」

「親父が自殺……何だって、また……」

抄樹は呟いたが、瑠衣には何となく判った。父は、足手まといにはなりたくなかったのだ、と。

自ら子供たちとの繋がりを切ろうとまでに思い詰めた信彦の心が、痛かった。

次に瑠衣の口から出てきたのは、場違いな、とさえ言えるほど穏やかな声だった。
「……レイ君は？」
「彼はそのままで置いておくと非常に扱いに困ります――あの頭脳のために。よって、今、彼は洗脳状態に置かれ、アルベルトの言うことには全て無条件に従うようになっています。彼は、あなたたちに対する、鳥野氏以上の切り札となるでしょう」
「あんた……喋りすぎじゃないのか？俺たちにそこまで言っちまっていいのかよ」
筋違いとは思ったが、抄樹は眉を顰めながらそう言ってしまう。エールリッヒたちの仲間だったら、何食わぬ顔をして調子のいい事を並べておけばいいのではなかろうか――そうすべきではないのか。
抄樹はサラの真意を掴み損ねて、隣に立つ瑠衣を見下ろした。彼に疑問に思われたことが、瑠衣にそう聞こえないはずがあるまい。
しかし、更に奇妙なことに、サラをじっと見つめている義姉には、何ら不思議に感じられることは無いようだった。
「二人は治せるの？」
「はい」
小さく首を傾げて尋ねた瑠衣に、サラは短く頷いた。
「そう……それなら、いいわ。二人を取り戻してから、元に戻せばいいのですもの」
それがどうということでもないかのように、瑠衣はにこりと笑って言い退ける。抄樹はあまりにあっけらかんとした笑顔に呆れ、ついで、何だかホッとした。ここで彼女が悲壮な顔をちらりとでも見せたら、抄樹の気は情けなくも萎えていただろう。
この一種間の抜けた強さがあってこそ、瑠衣なのである。
「じゃあ、連れて行ってもらおうか、エールリッヒのところに」
俄然やる気の出てきた抄樹が、意欲満々で指を鳴らす。これから敵地に乗り込むのだという緊張も気負いも、そこには無かった。
二人の子供を無言で交互に見やり、サラは仕草だけで部屋から出

ることを促す。
「無愛想な女だよな？」
同意を求めて抄樹は瑠衣を見るが、それに対して、彼女からは曖昧な笑みが返されただけであった。
「行こう」
荷物を手に、瑠衣が言う。
いつもの甘い声ではなく、かといって、緊張感で引き攣っているものでもなかった。
＊
時を数日遡る。
「随分と急なご招待でしたね」
知らずの内に萎縮しそうになる心をきれいに覆い隠し、レイは薄笑いと共に、目の前に立つ仇敵に向かってそう言った。
だが、子供の虚勢を知ってか知らずか、対するエールリッヒはそこに含まれる皮肉の響きを全く意に介せずに肩を竦める。
「招待状を送ったほうが良かったかね？」
その台詞は、裏を返せばレイたちの居場所は常に追跡されていたということである。
食えない男だ。
口の中だけでそう呟き、レイはにっこりと笑みを返す。
「ぜひとも、そうしていただきたかったですね。お陰で、瑠衣さんたちに何も残してくることが出来ませんでした。今頃、二人とも困ってますよ」
レイに負けず劣らずにこやかに、エールリッヒがそれを受ける。
「だが、レイクウッドまでは道標を残してきているのだろう？ルナたちがそこまで辿り着いたら、こちらから迎えに出てあげよう」
「その、ルナ、という呼び名は止めていただけませんか。彼女はルナさんではなく、瑠衣さんです」
時を違えて抄樹が同様の苦情を申し立てることになろうとは、神ならぬ身のレイは夢にも思わず、エールリッヒの言葉の一部に眉を

顰める。
「そんなことを気にするのかね？名前など、ただの記号に過ぎない。何と名づけても、薔薇の香りは変わるまい。ルナと呼ぼうがルイと呼ぼうが、同じではないか」
「随分、割り切った考え方をしますね――そんなあなたが、どうしてこれほどまでに瑠衣さんに執着するのです？消息の掴めなくなった彼女のことはすぐに諦め、次を作るという行動のほうが、よほどあなた方らしいというものではないですか？」
そう言って笑ったレイだったが、ついで目を上げた彼は、エールリッヒの顔にある微妙な表情のこわばりに気付く。
それは、この厚顔な男には似つかわしくないものだった。
だが、不釣合いなその顔を揶揄する間をレイに与えることなく、微熱の肌の上に落ちた淡雪のようにそれは一瞬にして消え失せ、元のポーカーフェイスが戻る。
再び、底の知れない笑みを浮かべて弁明を口に乗せる。
「我々もそれを試みたのだがな、ルナ以外に成功したものが無かったのだ――同じように作ったはずだったのだが、あれ以外はただの肉塊になってしまった。どれも、人の形すら取ることの出来ない失敗作ばかりだったのだよ」
ルナ、という単語にピクリと眉を動かし、レイは口中で、案外学習能力が無いんだなと呟く。
「失敗作、ね……あなたたちが僕たちに対してどういう態度で臨むのか、その言葉からも明らかですよね。まあ、瑠衣さんの誕生はまぐれだったということでしょう」
所詮、あなたたちには無理だったのですよという含みが、彼の声には滲み出ていた。
「ふ……ん、そうかもしれないな。十年経った今でも、何が両者を分けたのか判っていないことは確かだ。だからこそ、尚更、ルナを手放すわけにはいかないのだよ」
柔らかい声の下、確かに、言葉の中には入っていなかったものが

――エールリッヒの真意が他にもあることは判った。だが、人の表情を読むことに長けたレイにも、その正体を見極めることが出来なかった。
「君はおとなしくしておいで。直に二人が来る。君たちはここで何不自由無く暮らすことが出来る――やるべきことをすればね」
「何不自由なく、ですか。その代償に支払わなければならないものが大きすぎます」
「代償？そんなものは要求しないよ」
物分りの良い父親のような眼差しでそう言う。その言葉は、物理的には真実かもしれない。
だが……。
「我々が払うものは『自由』ですよ。個々の価値観にも因りますが、少なくとも僕と抄樹、そして瑠衣さんにとっては物質的な裕福さよりも優先されるものです」
レイはエールリッヒの目を、曇りの無い碧眼で見据えて断言する。この場にいない二人を同とすることに、一切迷いは無かった。
しかし、純粋すぎる彼の主張に、エールリッヒが常に浮かべていた『暖かな微笑』が次第に姿を消し、代わって、嘲るように唇が歪みを帯び始める。
「……なかなか立派な考えだな。だが、君はいったいどれほどの事を知っている？――書物の中だけではなく、現実というものを、だ。パンの代わりに靴の革をしゃぶる生活は？耳元を銃弾が飛び交い、常に這うようにして移動し、空を見上げることも無い……そんな余裕も無い。片付けても片付けても、毎日新しい死体が生まれる。血塗れの、まだ暖かさの残る死体を抱いたことは？」
重ねた問いかけに答えを求めることなく、エールリッヒは続ける。
「自由が売れるものなら、いくらでも売ろうと思えるものだよ――そんな生活ではね……それぐらいしか、持っているものが無いのだから」
淡々と並べられた『現実』は、どれもレイの日常の中では知り得

ようの無いものばかりだった。
応える術を失い、レイは口を噤んで立ち竦む。頭の中だけでこなされたものでは、どんな反論も、エールリッヒの経てきたものの前では空虚にしか響かないだろう。
レイの沈黙をどう取ったのか、エールリッヒの表情が再び偽りの温もりを帯びる。
「少々口に油を差し過ぎたようだ。君ももう眠いだろう。部屋に案内させるから、もう休みなさい」
内線を回して二言三言指示すると、もうそれ以上何も話すつもりはないという意思表示をするかのように、レイに背を向けた。
所在無くその後姿を見つめ、レイは男が聞いているという確信は持てないまま弱く呟く。
「確かに、ぬくぬくと暮らしてきた僕は現実を知ってはいないかもしれません。しかし、想像力は持っています。あなたの描く世界が果たして好ましいものといえるかどうかは、疑問です」
無言という応答。
だが、その沈黙を持て余すほどの間を与えずに、ドアがノックされる。
突然のその音に、目の前の背中にだけ意識を集中させていたレイははっとし、思わず肩をビクリと震わせた。
「入れ」
短い台詞と共に、エールリッヒは机の上のスイッチでドアを開ける。
硬い靴音を響かせながら姿を見せたのは、豊かな栗色の髪を後ろで一つに束ねた一人の女性だった。
「サラ・オドンネルです」
簡潔に名乗った声は、微かにハスキーで、落ち着いた雰囲気を漂わせる。
「彼女が、君の――君たちの世話をする。何かあったら、サラに言いなさい」

「こちらへ」
一歩下がったサラは、エールリッヒに一礼すると、手を翻してレイを促した。
逆らってみても栓の無いこと。言葉の少ないこの女性に付き従って、レイは部屋から出る。ドア口で一度エールリッヒを振り返ったが、彼にとってレイはもうその場にいないものも同然だった。目の前にいても、視界には入っていない。
この男が何を思ってルナという存在を作ったのか、もう一度考え直す必要があることを、レイは感じていた。
＊
あちらこちらにビデオカメラが設置された廊下を無言で歩きながら、レイはこれからのことを模索していた。
当然のことながら、ここの警備システムはかなり優れている。ビデオカメラの配置は死角を作らないように綿密に考えられており、この研究所内を誰にも気付かれずに動き回ることは不可能だった。
果たして無事にここから逃げ出すことが出来るのか、いざ敵の力を目の当たりにしてみると、甚だ疑問だった。その弱気さが自分らしくないことはよく判っていたが、己を過信することは出来ない。それはすなわち失敗に通ずる。
直に瑠衣たちもここに連れてこられることになるのだろうが、それまでに脱出方法を考えておかねばならない。仮に二人がここに来ることを断念したとしても――正直言って、最後まで逃げおおせることが出来るものなら、瑠衣たちがそちらの選択をすることのほうが、レイには望ましくさえあった――レイと同じように、例の転移装置で結局は捕まることになってしまうだろう。先ほどのエールリッヒとの対面を経た後では、彼が最初に電話で言っていたようにすんなりと諦めるようなことがあるとは思えなかった。
内心、溜め息を禁じ得ない。
差し当たってレイに出来ることといえば――情報収集ぐらいしか思い当たらなかった。

「ここはどこら辺ですか？」
サラから口火を切る気配は無いようだったので、まずは当たり障りのなさそうな質問から始める。
彼女からの答えは、やはりあまり装飾の無いものだった。
「レイクウッド市です」
その都市の名は、彼が瑠衣の持って来た情報を元に導き出したものと同じである。
数秒待ってそれ以上の説明が無いことを確かめた上で、レイは次の言葉を継いだ。
「南東のほうですか？」
「そうです」
「スネイキルと呼ばれるところですね？」
「はい」
一言。
積極的な会話は望めそうも無いらしい。
質問を変える。
「僕はここで何をしたらよいのでしょうか？」
「何も。残りの二人が来るまでおとなしくしていてもらえれば、それで結構です」
多少長めの返答か。
「しかし、それではあまりに暇なのですが」
「……図書館には入れるように手配しておきます」
「それよりも、ここの研究を見せていただけませんか？とても興味があるのです……転移装置とか。理論的には納得できるのですが、実際に動くところを見てみたいのです。僕がここに移されたときには、まだ夢の中にいたものですから」
今度は、答えがあるまでにいくらか間があった。
いささか無理があったか、と取り消しの言葉をレイが口にしようとしたところで、サラが口を開く。
「指示を仰いでみます。その結論はまた後で」

先の質問をしたのは確かにレイであったが、この返答はいささか以外でもあった。
考慮の余地はあるということか。
あるいは、彼女はあまり事情を理解していないのかもしれないが。
「……お願いします」
サラはそれには応えずに、カッカッと一瞬もそのリズムが乱れることの無かった足を止める。
「こちらがあなたの部屋です」
――当然のことながら――外掛けになっている鍵をはずし、サラは扉を開いた。電子機器に強いレイを警戒してか、その鍵は電子ロックではなく、シンプルで古典的なものである。
素直に部屋に入ると、レイはグルリと部屋を一瞥した。
備え付けられてあるものは、ベッドと書き物机、そして個室にトイレと洗面台だけである。
「愛想も素っ気も無いとはこのことだな」
呟いてベッドに腰を下ろす。
「枕元に短編集の一冊も置いておくというのが、招待主の心遣いというものでしょう」
やることが無く時間だけが有り余っているという状況は、かなり辛いものがある。
だが、逆に言えば、それだけ考える時間を与えられたということでもあった。そしてそれは、彼の最も得意とするものだ。
しかし、いざ思考を巡らせてみると、それはいつの間にか残してきた二人のところへ行き当たってしまう。これではいけないと軌道修正してみても、無自覚のうちにまたそこに還ってきている自分に気付く。
今まで計算し尽くされた理性のみで行動してきたレイにとって、それは不満でもあり、また、嬉しくもあった。瑠衣や抄樹、信彦と会ってから、ようやく自分が人間なのだという実感が持てるようになった気がする。

そう考えると自分すら何だか愉快で、レイは一人笑みを漏らした。
彼らと一緒なら、自分は『人間』でいられる。
「そのためにも、ここを何とかしなくては、ね……」
呟いたレイの目は不敵に輝く。彼の頭の中ではすでに雑念は取り払われ、計画がパズルのように着実に組み立てられ始めていた。

十

「ようやく、お目見えすることが出来たな。いささか待ちくたびれてしまったよ」
瑠衣（るい）と抄樹（あつき）を前に、エールリッヒは穏やかな笑みと共にそう言った。二人の子供の後ろに佇むサラに片手を振って下がらせる。サラは一瞬何か言いたそうな素振りをしたが、結局無言で一礼して姿を消した。
「御託はどうでもいいからよ、さっさと親父とレイを返してもらおうか」
片手を腰に当てて胸を張ったその様子は強気そのものに見える抄樹であるが、それは萎縮しかける心を押し隠した、殆ど空威張りのようなものだった。
「さて、その言葉をすんなり聞き入れるわけにはいかないということぐらいは、君の頭でも解るだろう？君たちは特別な存在なのだよ。何故、それを受け入れようとしないのだ？」
「特別……」
瑠衣が小さくその単語を繰り返した――その意味を確かめるように。
「そう、『特別』だ」
エールリッヒはルイの呟きを、彼女が自分たちの側へ傾きつつあるが故のものと取る。笑みを深くし、頷いた。だが、真っ直ぐに彼に向けられた瑠衣の顔に浮かんだ表情に、エールリッヒは触れてはならないものに触れてしまったような衝撃を受ける。
それは、深い、あまりに深い、悲しみの眼差しだった。
「私は、特別であることなど望んでいません。ただ、父や抄樹やレイたちと、毎日を普通に暮らしていければそれで良いんです」
静かなその台詞は、エールリッヒの穏やかな偽りの仮面を砕く。噛み締められた彼の奥歯が、鈍く音を立てた。

「普通……？普通、だと……？君の言うところの『普通』を手に入れることがどれほど困難なことか、君は知っているのか？君がすっかり平和ボケしている日本という国で味わっている『普通』の生活は、決して普通なのではないのだよ。あんなものは一瞬にして崩れ去ってしまう、幻のようなものだ。たまたま、今の時代に、あの国にいたからこそ、あんな生活に浴することが出来たに過ぎない。ほんの少し時と場所を違えたら、まったく別の日常が『普通』と呼ばれるようになるのだよ」

エールリッヒの声は決して荒立てられてはいなかったが、それは静かに活動を続ける休火山のようなものだった。その底では、恐ろしいマグマがゆっくりと渦巻いている。

その声に鞭打たれ、瑠衣は信彦の手紙に簡潔に書かれていたエールリッヒの過去を思い出していた。彼にとっての日常を。

確かに、自分たちが過ごしてきたあの生活を普遍のものと考えてしまうのは、傲慢すぎるのかもしれない。

頭の片隅ではエールリッヒの言い分に傾きつつある自分を、瑠衣は感じていた。だが、それでも、彼の全てを肯定することは出来なかった。

「でも、だからといって、私のような存在を持ち出すのは、間違っている……」

力の無い反論は、根拠に欠けるものでしかなかった。それを放った彼女自身がそれを最も理解している。しかし、せずにはいられなかった。

「どこが間違っているというのだね？君の力は素晴らしい。それさえあれば、どんな争いだってたちどころに鎮めることが出来る。君にそれがわからないはずが無いだろう」

じわじわと、真綿で締め付けるようなエールリッヒの言葉に、瑠衣は徐々に身動きが出来なくなっていく。

否応無しに辛酸を口元に突き付けられて生きてこなければならなかったものと、与えられた平和の中で安穏と生きることが出来たも

の。その二者のうち、どちらのほうが言葉に重みがあるのか、それは明らかだった。
しかし、正論だと思いつつも完全にエールリッヒに傾倒し得ないのは、彼からは、何かが抜け落ちている、そんな気がしてならないからである。そしてまた、それが何なのか判れば、瑠衣は真正面からエールリッヒに対峙することが出来るに違いなかった。
しかし、それはいったい何なのだろうか……？
言葉を失った瑠衣を、抄樹が庇うように背中へ回す。
「あんたの言い分は解った。結局はあんたの言いたいことは、世の中を平和にしましょうってことなんだろ？確かにルナを使えば早いよな。だけど、そんな風にして創った平和な世界なんかに、意味あんのかよ。あっさり出来ちまったもんは、あっさり壊れるもんだろ？」
「壊れたらまた作ればいい。何度でも、な」
「瑠衣もいつかは死ぬんだぜ？」
「また新しいルナを作るさ」
「そんなに簡単に作れるなら、どうして瑠衣に拘るんだよ」
「今度は彼女自身を最初から作るわけではない。ルナのクローンを作るのだよ。ずっとね。まあ、新しいルナを作ることも、彼がいれば不可能ではないかもしれないが、な」
そう言って、エールリッヒは、あたかもその先から鳩を出す奇術師であるかのような優雅な手つきで、腕を真っ直ぐに差し伸べた。釣られるように目をやって、瑠衣と抄樹は同時に安堵の息を吐く。
「レイ……」
「良かった――」
無事だったのね。
そう続けてレイの元へ近寄ろうとして踏み出した瑠衣の足が、止まる。
いささか少女じみたレイの細い喉元には、彼自身の手で、小振りな、しかし鋭利な輝きを放つものが突きつけられていた。

「何で……！？」
「動かないほうがいいぞ、抄樹。レイには医学の知識もあるからな、お前が辿り着くまでにレイの息が絶えるのは必至だ」
瑠衣と抄樹の頭の中に、ホテルで聞かされたサラの言葉が蘇えった。
「こんな方法で、レイ君を操って……！」
常の彼女には見られないきつい光を宿した眼差しで、エールリッヒを振り返る。
「サラから聞かされたかな？レイをそのままで放っておくほど、私は抜けてはいないよ。ここには彼が得意とする『武器』がごまんとあるからな。三日もあれば、この研究所はレイの支配下に置かれてしまっただろうな。実際、危ないところだった」
瑠衣から向けられる非難の眼差しをむしろ楽しんでいるかのように、エールリッヒは目を細め、続ける。両手を広げ、二人のほうへ差し伸べた。
「彼は我々に従ってくれているよ」
「レイを元に戻しなさい」
低い、声。
電撃が走ったような感覚を覚え、抄樹は思わず瑠衣を振り返った。そして、明らかに瑠衣ではないものの存在をそこに見る。果たして、今この場にいるのは瑠衣なのか――あるいは、ルナなのか。抄樹にさえ、判断が付かなかった。
「瑠衣――ルナ、止めろ。出てくるな」
一つの身体に宿る、二人の存在。そのどちらに向けて発したのか――あるいは両方に対してなのか――は、言った本人にも判っていない。しかし、抄樹の声に、ハッとしたように、瑠衣＝ルナが振り返る。
「抄樹……あーちゃん……」
瑠衣は小さく身震いし、何かを振り払うように頭を軽く振る。
「私は、瑠衣……瑠衣、だわ」

両手で胸を押さえ、そこに向けて囁きかける。
「大丈夫……大丈夫よ、ルナ。そこで見ていて」
顔を上げ、瑠衣はこの一連の成り行きを面白そうに見ていたエールリッヒを真っ直ぐに見つめる。
「確かに、この世界が素晴らしいものだとは、私にも思えません。そう言うには、あまりに不幸が多すぎます」
「そう思うなら――」
私と共に、そう言いかけたエールリッヒを遮るように、瑠衣が声を上げる。
「でも！……でも、あなたとは行けません。あなたの考える世界が幸せだとも、思えないのです」
決然とそう言い放った瑠衣を、エールリッヒは揺らぐ瞳で見つめる。今、彼がその目に収めているのは、果たして瑠衣なのか、それとも……ただ彼の心の中にのみ存在する誰かなのか。
「何故だ？お前の言葉一つで、完全な平和が――全く争いの無い世界が、得られるのだぞ。お前はそれを望まないというのか？」
「人間は、群れに優秀なヤギを必要とする羊たちとは違います。自分で考えるということも知っていると、私は信じています――今は憎しみと恐怖で目が眩んでいる人たちも、きっと、いつか、隣の人が流す涙に気付くはずです」
「きっと……？いつか……？そんな曖昧なものはいらない。私は、今、それを手に入れたいのだ。今すぐ、その確証が欲しい。お前の一言で、それが現実となるというのに……」
親子ほども年の離れた少女に向けて、エールリッヒが縋り付くように言う。瑠衣は無言で首を振ることだけで応えた。
彼の目に浮かぶのは、理解できないという思い。それは次第に失望へ、そして裏切りに傷ついたものへと変じていく。
「お前は……貴女は、『ルナ』だろう？何故、私の手を拒む？何故、平和を拒むのだ？貴女が、望んだものが、手に入ろうというのに」
途方に暮れた、子供の声。あれほど尊大だったものが、今は頼り

なく見える。
「エールリッヒ……博士……？」
呼び掛けた瑠衣の声に、エールリッヒがビクリと身体を震わせる。うたた寝から不意に起こされたかのように瞬きをし、瑠衣と抄樹を見直した。
「いや……いや、何でもない。しかし、君が嫌だと言うのでは仕方がないな」
意外なほど穏やかなエールリッヒの呟き。だが、静かな言い方であるからこそ、一層、それを聞く者の中では不安がいや増した。
「父とレイ君を、返してください」
「いや、違う。君が、私の元へ還って来るんだよ」
エールリッヒが、一歩、踏み出す。
「いや、駄目だよ、抄樹。お前が私に触れれば、その瞬間にレイが喉を突く。そこから動くな」
その台詞の前半が心を、後半が身体を縛る鎖となって、瑠衣を背中に庇おうとした抄樹の動きを凍らせる。
エールリッヒの手が白衣のポケットを探り、その中から無針注射器の入れられた小箱を取り出した。それに注入されている液体がどんなものであるかは、推して知るべしと言うところだった。
慣れた手付きで針の先の空気を抜くと、エールリッヒはいかにも優しい医師然とした風情で手を差し伸べる。
「さあ、瑠衣、こちらに来るんだ」
意志を持って告げられた言葉が、強烈な引力を放つ。幼い頃に植え付けられた暗示に逆らうには、精神力を総動員させなければならなかった。
敢えて目を背けることはせず、瑠衣はしっかりと正面を――エールリッヒを見据えて、敢然と言い放つ。両の手の平を、関節が白くなるほどに強く、握り締めて。
「いいえ……行けません。私は、行きません」
「ふ……む。君は来ないと言う。それでは、レイ、お前の出番だな。

来なさい」
飼い犬を招くような無造作な呼びかけ。その言葉どおりに、レイがまるで意志の力を感じさせずに動き出す。
「レイ……」
抄樹にはその光景が信じられなかった。あれほど自尊心の強かったレイが、何の抵抗もなく従っている。そしてまた、そのことが彼の心を決めさせた。
大きく踏み出した抄樹を見て、エールリッヒが窘めるように首を振る。
「状況がまだ解っていないようだな。それとも、レイは見殺しにすることに決めたかな？まあ、私は別にどちらでも構わんよ。レイとお前はおまけのようなものだからな。いくらでも代わりは作れる」
侮蔑に満ちたエールリッヒの台詞は、しかし、抄樹の心を傷つけることはない。たとえエールリッヒがどんなに言葉を尽くして抄樹たちの生まれを揶揄したとしても、すでに、それはわずかな濁りさえ、彼らにもたらすことは無かった。
「奴を見殺しにするわけじゃぁないさ。ただ、思い出したんだよ。あいつのために瑠衣を護りきれなかったとなったら、あの世でどんなことを言われるか判ったもんじゃないってことをな。きっと、ネチネチずっと言われ続けるんだぜ」
この件に関してだけは、完璧なまでに理解しあっている抄樹とレイであった。だが、瑠衣には到底納得できる答弁ではない。
「ちょ……っと！あーちゃん！？」
エールリッヒとの間に立ち塞がった抄樹の背中に抗議の声を上げる。
「お前が納得できないのも解るけど、レイの気持ちも解ってやってくれよ。あのプライドの塊のようなやつが、あんなクソじじいの言いなりになってるんだぞ？正気になったら、首を吊りかねないだろ」
口汚い抄樹の物言いに、エールリッヒが眉を寄せる。
「本当に、お前は品の欠片も無いな。お前だけは完全な失敗作だよ」

選んだ遺伝子が悪かったかと首を振るエールリッヒに、すっかり吹っ切れた抄樹が肩を竦めてみせる。
「あんたにそう言われると、嬉しいよ」
そう言って不敵に笑いかけると、クルリと瑠衣に向き直った。彼女の耳元に口を寄せると、口早に囁きかける。
「『悪い者は命を持つ者に触れることができない』――瑠衣、言ってくれ」
「え……？」
咄嗟に何のことか解らず、瑠衣は聞き返す。
「『悪いものは命を持つものに触れることが出来ない』だ」
「わるいものは、いのちをもつものにふれることが、できない……？」
その意味を理解できてもいない、たどたどしい、鸚鵡返し。瑠衣にとっては何の意味も持たない、ただの単語の羅列だった。
しかし、抄樹にとっては……。
彼女の声で暗誦が成され、終了したその瞬間、抄樹の頭を激しい痛みが襲う。いや、痛みなどという表現では生温い。巨大な泡立て器を頭の中に突っ込まれ、脳味噌を思い切り掻き回されているような感覚だった。思わず頭を抱え、その場に膝を突く。
「あーちゃん！？どうしたの！？」
出会って以来初めて見る、抄樹の苦しむ姿に、瑠衣は現在の状況すら忘れ去った。
「何が……どうして！？」
「大丈夫だ……瑠衣」
取り乱す瑠衣にそれだけ言って、抄樹は痛みを堪えるべく歯を食いしばる。
「クソッ、あの馬鹿……こんなことは言ってなかったぞ」
誰に対する罵倒なのかは、瑠衣にも大体予想が付いた。レイの計画したことなら間違いは無いことは解っていたが、それでも、抄樹のこの苦しみようには、いくら何でも不安になる。

おろおろとなす術も無い瑠衣が見守る中で、その苦痛が薄らいで行くに従って、抄樹の頭の奥に仕舞い込まれていた記憶が徐々に掘り起こされていく。通常なら覚えているはずの無い、物心付く前の記憶まではっきりと蘇えってきた。

「あー……たまんねぇな、こりゃ……」

頭を振りながら、ゆっくりと立ち上がる。一瞬ふらついた抄樹を、瑠衣が慌てて支えた。

「大、丈夫……？」

見上げた瑠衣が、心配そうに声を掛ける。

「だいじょーぶ、だいじょーぶ」

抄樹は驚きのあまりか、微かに目を潤ませてさえいる瑠衣の頭に手を乗せ、クシャリと髪を掻き混ぜてやる。それに応えて瑠衣がホッと安堵の笑みを漏らしたとき、冷ややかな声が温まりかけた空気を凍り付かせた。

「騒ぎは収まったかね」

「おいおい……せっかくいい感じのとこに水を注すなよ」

すっくと真っ直ぐに立った抄樹の中には、もうエールリッヒに対する恐れは無い。忌まわしい記憶の復活の代わりに、それはきれいさっぱり消え失せていた。

エールリッヒを目の前にして瑠衣の声で先ほどのせりふを聞くことにより、幼い頃に着けられたエールリッヒへの服従という枷を壊す暗示を、レイによって掛けられていたのだ。

「さあ、仕切り直しってとこかな」

言いながら抄樹は腰に挟んでおいた特殊警棒を取り出した。スチール製のそれは、一振りで空気を切り裂く鋭い音と共に、五十ｃｍほどに伸ばされる。

わずかに腰を落とし、今にもエールリッヒに飛び掛りそうな姿勢になった抄樹のジャケットの裾を、瑠衣が馬の手綱を引くように握り締めた。

「あーちゃん、駄目よ。レイ君が……」

「どっちにしろ、動かなきゃ何も起きないだろ」
「でも、駄目……駄目よ、そんなの。皆を助けなくちゃ、助かったことにはならない……そうでしょう？」
「それはそうだけど、それは――」
「理想、だろう？」
抄樹には瑠衣に向けて言うことのできなかった最後の言葉を、エールリッヒが引き継ぐ。
「理想は美しい、が、その達成は困難なものだ。どこまでそれに近付けるかが、重要なのだよ。抄樹、それを捨てるんだ」
その命令が実行されることを、エールリッヒは全く疑っていなかった。露ほども。
しかし――
微動だにしない抄樹を、心持ち眉を顰めてエールリッヒが見つめる。
「……？抄樹、その警棒を捨てろ」
「そんなこと聞けるわけが無いだろう」
返ってきた、余裕に満ちた反抗に、エールリッヒは不快を露わに舌打ちする。
「暗示を解いたか――信行がやるはずが無いな。……レイの仕業か」
「お陰でスッキリだ。……えらい目にも会ったがな」
「しかし、ルナの方は解けていないようだな」
「まあ、な。時間無かったし、必要も無かったからな」
肩を竦めた抄樹に、瑠衣が抗議の声を上げる。
「私だけお味噌なの？」
「……文句は後であいつに言ってくれ」
責任は、この場に存在しないものに押し付けた。しかし、抄樹の台詞に含まれているものは、それだけではない。聞いた瑠衣の顔がパッと輝いた。
「じゃあ……！？」
「ああ。あいつのことも、何とかしてやらぁ」

自信に満ちたその声は小さかったが、瑠衣は聞き逃さなかった。
「レイが何の手も打たずにあんな醜態を晒すわけが無いだろう？何か、あるはずなんだ」
「やっぱり、レイ君のことを一番解っているのはあーちゃんだと思う」
こんなときなのに、何だか笑ってしまった。しかし、和んだ空気もただ一人の言葉で一瞬にして壊される。
「どうやら、抄樹、もうお前はただの邪魔者でしかないようだな」
苛立ちに満ちたその呟きに、瑠衣と抄樹に緊張が走る。振り向いた二人の目には、何か歪んだ表情を浮かべたエールリッヒの顔が映る。
「お前は、もう要らん……レイ、抄樹を殺せ」
命じたエールリッヒの言葉に従って、レイがゆっくりと抄樹に歩み寄る――メスの位置はそのままに。
「口では何と言おうとも、お前はレイに手が出せまい。そうするには、信行の育て方が悪すぎる」
「褒めてくれてありがとうよ。――チェッ、読まれてやがんの」
ぼやいた抄樹は、手を振って瑠衣を下がらせる。レイの手にあるメスを奪うのは簡単なことだ。
だが――
「先に言っておくが、抄樹、お前がレイに触れたら、奥歯に仕込んだ青酸カリを使うように指示してあるからな」
正確に急所を狙って繰り出される刃物を避けざまにレイの腕を掴もうとした抄樹の機先を制して、エールリッヒが悠然と言い放った。
それを聞いて一瞬凍りついた抄樹の隙を突いて、レイのメスが喉を狙う。間一髪で上体を反らしてそれを避け、そのままとんぼ返りをしてレイからできるだけ離れた。
「性格悪すぎるぞ、あんた！あれも駄目、これも駄目じゃあ、お手上げだ……」
舌打ちをして再び突き出されたメスをかわす抄樹を、瑠衣の目が

絶望的な思いで追いかける。その光景は、決してあってはならないもののはずであった。
抄樹に比べてレイの動きは決して鋭敏とはいえなかったが、抄樹の次の行動をレイは正確に読み取り、着実に彼を部屋の隅へと追い詰めていく。
「く……そっ！」
ついに退路を断たれ、背中を壁に押し付けた抄樹が低く呻いた。反撃さえ、あるいは腕を掴むことさえできればこんな状況に陥りはしなかったが、如何せん、指一本でも触れればレイの命が無いとなれば、どうしようもなかった。
ゆっくりと歩み寄るレイに反射的に手を出してしまわないように、抄樹は背後で手を組んだ。
手を伸ばせば届くところで、レイの足が止まる。
感情の消え失せたその目を見据え、全ての想いを込めて、抄樹は静かに呼び掛ける。
「レイ……瑠衣を護れよ」
ビクリと、一瞬レイの身体が固まった。メスを握るその手が小刻みに震える。
瑠衣が息を呑む。
「レイ、君……！」
その時。
切望を込めて名を呼んだ瑠衣の声に、レイの空ろな眼差しに微かな光が走ったことを、抄樹は見逃さなかった。それは蜘蛛の紡ぐものよりも細い、不確かな糸口だった。抄樹は、その藁に縋る。
「瑠衣、レイを呼べ」
抄樹の台詞を瑠衣が理解し従ったのと、苛立ちを含んだエールリッヒの命令とは、ほぼ同時のことだった。
「レイ、殺れ！」
「レイ君、止めて！レイ君、レイ君、レイ君！」
エールリッヒからほんの一瞬遅れて、瑠衣の声が追う。それが呪

文であるかのように、何度も呼んだ。
全ては、たった一回の瞬きも許されないわずかな時間の間に、終わった。
果たして――
「あーちゃん、レイ君……」
胸を両手で押さえて、瑠衣が喘ぐ。
「失神しないでくださいね」
メスを持つ手を下ろして、レイが振り向いた。晴れやかな微笑みをそこに浮かべて。
「よ、かったぁ……」
その場に座り込むことまでは何とか堪えたが、瑠衣は両膝に手を突き、床に向かって大きく息を吐く。彼女の顔を上げさせたのは、続いた抄樹の引き攣った声だった。
「良くないよ。あと一秒で、俺は死ぬとこだったぜ」
ぼやいた抄樹の首には横一文字に細く赤い線が浮かび上がり、一同が見つめる中、見る見るうちにそれが滴り始める。
「あーちゃん、それ……」
瑠衣はハンカチを手に抄樹に駆け寄った。
それに対してレイが返した反応は、冷たいものである。どうやらその傷をつけたのが自分だという過去の出来事は、もう忘れたことにしたらしい。
「君は喧嘩だけは得意だったはずだろう？そんな怪我をするなんて……」
『だけ』という部分を強調し、信じられないねぇ、と両手の平を天井に向け、肩を竦める。が、今回は抄樹もおとなしく引き下がることはしなかった。
「ほぉう……間抜けにもそこのおじさんの言うことを良い子で聞いちゃっていたのは、どこの天才殿でしょうかねぇ？飴でももらったんでちゅか？」
瑠衣から受け取ったハンカチを傷に強く押し当て、頬が痙攣する

のを堪えて抄樹は応える。最初に垂れた血の量が何かの間違いであったかのように、その傷はすでに塞がり始めていた。
血でべた付く襟元を気持ち悪そうに引っ張りながら、返す言葉に詰まったレイを、抄樹はさぞ気分良さそうに眺める。
状況を忘れ去っていた二人を現実に戻したのは、学会からも忘れ去られた科学者の声だった。
「そろそろ、良いかね。二人とも？」
顔は冷静さを取り繕っていたが、その声は苛立ちを隠してはいなかった――いや、隠そうとしても隠し切れなかっただけかもしれない。
「これはどういうことかな？そう簡単に解ける暗示ではなかったはずだがね」
レイを見据えて、エールリッヒが問う。
「大事な人に名を呼ばれて正気に返りました――」
「……」
「――と言えれば格好がいいのですが、本当のところは、予めそういう風に自己催眠を掛けておいたのですよ。瑠衣さんが……他の誰でもない瑠衣さんが僕の名前を呼んだとき、僕に掛けられている全ての暗示が解けるように、ね」
抄樹はそれを聞きながら、レイが消えた日の夜のことを思い出していた。
あの夜、レイは何度抄樹が呼んでも応えなかった――レイらしくも無い、ぼんやりとした眼差し……そして絶え間なく何かを呟いていた口元。抄樹は一人納得する。
その顔を見て、瑠衣が抄樹の服を引っ張る。
「ねえ、あーちゃんは知ってたの？」
「いや……知らなかった。何で教えといてくれなかったんだ？」
そうすれば、こんなに梃子摺らなかったのに、と愚痴る抄樹に、レイは肩を竦めて答える。
「敵を欺くにはまず味方から、と言うだろう？僕だったらともかく、

脳味噌筋肉男の抄樹に、アカデミー賞ものの演技はできないからね」
抄樹と瑠衣は顔を見合わせる。確かにそのとおりかもしれない。抄樹にしろ、瑠衣にしろ、知っていたらあんなに切羽詰った声は出せなかっただろうし、そうすればエールリッヒに感付かれて何らかの手を打たれてしまっていただろう。しかし、そうは思っていても内心複雑な二人だった。
「ふ……ん、先手を打たれていたということか」
自らの迂闊さを悔やむ色を滲ませること無く呟いたエールリッヒのその声は、今、むしろ楽しげでさえあった。当然推測される彼の心境を鑑みれば、不気味としか言いようのない、口調。
しかし、下手な恫喝よりも空恐ろしいものを感じさせるそのにこやかさに対して怯んだ様子は全く見せず、レイは同様の陽気さを浮かべて答える。
「僕にこんな立派な脳味噌をくれたくせに、僕があなたの行動を読むだろう、ぐらいのことも判らなかったのですか？」
「そのとおりだな。私は自分の作品にもっと自信を持つべきだった」
場に似合わぬ和やかさが、何とも言いがたい不安感を誘う。子供たち三人にとって何とも居心地の悪いものであるが、エールリッヒのほうも、同様の感覚を少なからず覚えているようだった。心の内を隠しきれないかのように、細い人差し指が神経質に机を叩いている。
「では……僕の実力を認めていただいた御礼と言ってはなんですが、もう一つ手品をお見せしましょうか」
言うと、レイは近くにセットされているキーボードに手を伸ばし、スペースキーを一度叩いた。いくつかの文字を入力すると、スリープ状態を解除されたにも拘らず暗いままでいるスクリーン上に、星印が、入れた文字数に応じて現れる。
「いつの間にキーワードを……いや、愚問だな」
「あなたの部下に――」
「部下ではなく、同志だ」

「――『同志』に、僕のことをよく説明しておかなかったことが、敗因其の二でしたね。ここの端末を使用して良いと言われたときには、正直言って、僕も驚きましたけど……無知とは怖いものです」
「ああ、そうだな。あれは私の耳に入る前に許可が出されてしまった。君を手に入れたことで、どうやら気が緩んだらしい。くれぐれも気を抜くなとは、言っておいたのだがな」
「母たちのいた頃とは、大分質が落ちているのではないですか？」
「仕方がない。あの頃とは、何もかもが違ってしまった」
「変な人たちをバックに付けたりするからですよ。当初のとおり、利益など考えず、ただ『世界の平和』のためだけに研究に燃えていた人たちのみを集めていれば、そんなことにはならなかったのではないですか？」
「当初のとおり、我々の特許からの収入で研究が続けられていれば、そうしたさ」
　レイの揶揄に、エールリッヒは肩を竦めた。
　会話を続けながらも、レイの手は素早く、瑠衣や抄樹には理解のできない文字の羅列を　次々に打ち込んでいる。その意味を取れる単語を強いて挙げるとするならば、ｙｅｓ、ｎｏ、そしてＯＫぐらいのものだろうか。
　瑠衣と抄樹の感心の眼差しが見守る中、レイは最後のリターンキーを押す。と、同時に、けたたましい非常ベルが鳴り始めた。合成音声が速やかな非難を促す。
「さあ、どうします？自爆装置をセットしました。こんなものを用意しておくなんて、余程後ろ暗いことをやっていたんですね。ちなみに、ご推察済みだとは思いますが、電子機器の記録は全て消去しましたから、身一つで逃げ出すのが一番の得策というものですよ」
「君も科学者の卵だろう。この研究所の成し得たことを消し去るなど、惜しいとは思わないのか？」
「そうですねぇ、あまり好ましくない出生の秘密は抹殺すべきではないかと思いましたので」

「素晴らしいものだと思うがね」
理解されないことを惜しむ口調のエールリッヒに、レイは悲しく首を振る。
「止めましょう。これは出口のない迷路でしかありません」
「仕方ない、か……。結局は、あの時すぐにお前たちを取り戻さなかったことが全ての間違いの元だったということかな」
そこにあるのは、諦め。その目は、手の中からすり抜けていく夢だけを、ただ見守っていた。
エールリッヒは三人に背を向ける。
「行きなさい……レイには信行のいるところが判っているだろう」
背中を向けることで歩み寄りをも拒んだエールリッヒに、瑠衣が一歩踏み出した――それ以上近寄ることは、抄樹が腕を掴むことで阻止する。
「エールリッヒ博士……あなたも、早くここを出ましょう」
瑠衣の声にエールリッヒは一瞬振り返りそうな気配を見せたが、結局それは成されず、返事を与えられることもなかった。
「エールリッヒ博士……！」
抄樹の手を振り払って走り寄ろうとした瑠衣を拒否するエールリッヒの思いを代弁したかのように、二人の間を突然噴き出した炎が隔てる。
「瑠衣、もう駄目だ。行くぞ！」
爆風に煽られた瑠衣を抱え上げ、抄樹は入り口へと向かう。
「ちょっと待って、あーちゃん！博士を連れて行かなくちゃ！」
抗う瑠衣に怪我をさせないように、だが、決して彼女を放してしまうことのないようにその腕に力を込めて、抄樹は先に部屋を出たレイの後を追った。
廊下を曲がった金髪に追いつくのは、それほど時間のかかることではなかった。
「レイ、親父のいるところは？」
体重四十五？の瑠衣を抱えながらも息一つ乱さない抄樹に対して、

レイには彼の問いに答える余裕は無いようだった。荒い息で腕を上げ、いくつか先にある扉を指差した。と、実にタイミング良くその扉が開き、そこから信彦がよろめきながら出てくる。
「凄ぇな、レイ。超能力か？」
抄樹は瑠衣を降ろしながら、あながち冗談でもなさそうに目を丸くしてそう言った。
「まさか――たぶん、エールリッヒ博士だろう。行き違いになってしまうことのないように、今までロックしておいたのだと思うけど……」
壁に両手を突き、息を切らせたレイが答える。その間にも、抄樹は信彦の下へと走り寄っていた。
「大丈夫か、親父」
近所のオバ様方に人気だった九条信彦の姿は、今はその面影も残っていない。が、その外見からは思いもよらず、意外なほどその声は落ち着いていた。
「何故、来たんだ……」
「おいおい、俺たちがそんなに薄情だと思っていたのかよ」
その後のぼやきには取り合わず、薬と運動不足のためか十五？は太った義父を背負い、レイのところまで戻った抄樹だったが、そこに足りないものに気付いて脂汗を浮かべる。
「おい、ちょっと待てよ。……瑠衣はどうした？」
「え……？瑠衣さんなら、そこに……いない！？」
「さっきの部屋だ」
舌打ちと同時に、抄樹は走り始めていた。
「さっきの……って、コントロールルームのことか！？――冗談、あそこから爆発が始まるんだ！」
「第一発はここに来る前に見たぜ」
背負った信彦を下ろした抄樹は、短い言葉だけで義父のことをレイに任せ、走り出す。残された二人は遠くで響く爆発音に耳を澄ませながら、出口に向かって歩き出した。

時折よろめく信彦を支えながら、レイは廊下を急ぐ。
「すまないな、とんだ足手まといで」
ただ歩くということすらままならない信彦が、もどかしそうに謝るのへ、レイが薄い微笑みを返す。
「僕こそ、すみません。抄樹のようにおじさんを抱えて走って行ければいいのですが……」
言っている傍から転びかけた信彦を支え損なってたたらを踏んだレイは、内心、唇を噛む。
こんなとき、レイは肉体的に優れるところの与えられなかった自分の身体を、少しばかり恨むのだった。
＊
一方、抄樹に降ろされると同時にその場を駆け出した瑠衣は、俊足とは言えないまでも精一杯のスピードでエールリッヒのいる部屋へと向かった。
「エールリッヒ博士！」
飛び込んで、はっとする。すでにその部屋はあちらこちらから炎が噴き出し、到底足を踏み込むのは不可能な状態となっていた。
そして、その向こうに……
「何故、戻ってきた。早くここを出ることだな。ここまで来た甲斐が無くなるぞ」
穏やかな声は、あまりに場違いなものだった。エールリッヒの姿は炎と熱気に隠され、もう確かめることはできない。瑠衣には、今、彼がどんな表情をしているのか見ることはできなかった。
「あなたも逃げなければ……」
熱気に顔を炙られながらも、瑠衣は懸命にエールリッヒの元へ近づこうとする。が、そんな彼女を、不思議に優しいエールリッヒの声が押し留めた。
「来るな、ルシアナ……」
耳慣れない名前に、瑠衣はそれが自分に向けられたということを理解するのにしばしの時間を必要とした。

「私は、瑠衣です。ルシアナって……？」
「ああ……そうだったな……だが、名前などどうでもいいことだ。そうだろう？ルナでも、瑠衣でも、ルシアナでも……同じことだ」
「ええ、今は何でも構いません。早く、そこから出てきてください。逃げましょう」
「ルシアナ……逃げろ……」
酸欠のせいなのか、それとも暑さのためか、エールリッヒの声は次第に不明瞭になっていく。それを繋ぎとめようと、瑠衣は必死に言い募った。
「お願いです。あなたの目指すものが間違っているとは、私にも思えません。手段を変えれば、きっと、素晴らしいものになるはずです。お願い、こっちへ来て！」
返事はなかった。
直後、大きな音を立てて何かが崩れ落ちる。
意志を持っているかのように渦巻く炎に怯んだのは、ほんの一瞬のことだった。瑠衣は大きく息を吸い、勢いを付けて火の中に飛び込んだ。
「エールリッヒ博士！」
ガラスの砕けたひときわ大きなスクリーンの前に、彼は倒れていた。その腰から足に掛けては、巨大なコンクリート塊がのしかかっている。瑠衣の力でそれを動かすことができないのは、明らか過ぎることであった。
「博士、しっかりしてください！」
鉄材の下から引きずり出そうとエールリッヒの腕を掴むと、彼の目がうっすらと開いた。
「ルシ……アナ？」
「まだ、寝ないでくださいね！」
瑠衣が渾身の力を込めて引っ張ってみても、エールリッヒの身体はわずかにずれたぐらいのものだった。
「もうっ、動いてっ……！」

懸命に色々な方向から力を加えてみるが、殆ど動くことはなかった。悔しくて、涙が視界を揺らめかす。しかし、どんなに絶望的な状態でも諦めることなどできなくて、乱暴に目を擦って、再度試みようとエールリッヒの腕を掴もうと手を伸ばした。が、そうしようとして、瑠衣は彼が何かを呟いていることに気付く。

「何……？」

聞き取ろうと、瑠衣はエールリッヒの口元に耳を寄せる。

「私は、貴女を護ることができれば、それで良かった……」

口の中だけで呟いたようなその台詞を、瑠衣は確かに聞き取った。エールリッヒをここまで突き動かした原動力を、ぼんやりと理解する。と、同時に、自らの非力さが悔しくて、視界が滲んだ。

この男をこのまま一人で死なせることは、できなかった。

腕を握ったまま、無意識のうちに、どんなときでも彼女を裏切ることのなかった者の名が、口を突いて出る。

「あーちゃん、お願い、助けて……」

それは囁き程度のものでしかなかったはずだ。だが、瑠衣のその声に応えたように、抄樹の声が届く。

「瑠衣、こんなとこで何してる！？さっさと出るぞ！」

「あーちゃん……？」

「呆けてるな、状況解ってんのか？」

抄樹は彼らしくもなく乱暴と言えそうなほどに強く腕を掴み、瑠衣を立たせた。

「ちょっと待って、博士を助けて！」

「あぁ……？エールリッヒ？」

瑠衣に言われて足元を見下ろした抄樹は、瓦礫の下敷きになっているエールリッヒに初めて気が付いたようにその名前を呼んだ。実際、瑠衣以外は、周囲に渦巻く炎すら目に入っていなかったのだが。

「お願い、私じゃ全然動かせない……」

躊躇は一瞬だった。

自分のパーカーを脱ぐと、髪の毛の先がかなり焦げ始めている瑠

衣に、頭からすっぽりと被せた。
「駄目だよ、あーちゃんが火傷しちゃう」
慌ててそれを返そうと脱ぎかけた瑠衣の手を止めさせた。
「邪魔だから着てろ」
言って、抄樹は瓦礫に手を掛ける。
「せっ！」
全身の力を腕と腰に総動員する。抄樹の力を持ってしても、それは軽々とは動かなかった。
「くそぉっ！」
奥歯が砕けるかと思えるほどに歯を食いしばり、更に力を込める。抄樹の額には、暑さのためだけではない汗がふつふつと浮かぶ。
瑠衣には数時間にも思えたが、実際には三分と経ってはいなかっただろう。
息を呑んだ瑠衣の見守る中で、鈍い音を立てて瓦礫が十？ほど持ち上がる。
「瑠衣、今だ！」
頷き返す間もおかず、瑠衣はエールリッヒの身体を思い切り引っ張った。大柄なエールリッヒの身体は、抄樹の持ち上げた瓦礫には程遠いとはいえ、瑠衣にとってはかなりの重さであるといえるはずだ。まさに火事場の莫迦力というやつであったのであろう。
エールリッヒの爪先が完全に瓦礫の外に出たのを確認して、抄樹は腕の力を抜く。
「うぁー、これ以上力んでいたら、痔になってたとこだぜ」
腕をすりすり、半ば冗談、半ば本気でそう言った。にやりと瑠衣に笑いかけ、息を吐く間もなく、ぐったりとしたエールリッヒの身体を担ぎ上げる。その扱いがかなり乱暴なのは、場が急を要しているからだけではないだろう。
「行くぞ。せっかくハッピーエンドがもう間近だってぇのに、こんなところで丸焼けはご免だぜ？」
右手でエールリッヒの身体を支え、空いている左手で瑠衣の身体

をしっかりと掴んだ。
コントロールルームを駆け出し、すでにあちらこちらから炎を吹いている廊下を走る。
「レイ君とお父さんは？お父さんは無事だよね？」
息を切らせながら、瑠衣が二人の安否を確かめた。それを疑ったことはない――抄樹とレイが失敗するなんて、微塵も思っていなかった。
「ああ、親父はレイに任せて、先に外に連れて行かせた。二人とも、首を長くして待ってるぜ」
レイが開けていった防火扉に従って、二人――抄樹に担がれたエールリッヒを入れるならば、三人――は迷うことなく出口に向かう。
時折起こる爆発が床を揺らし、瑠衣の足元をおぼつかなくさせる。近場で生じるひときわ大きな衝撃で転びかけた瑠衣の腕を抄樹が支え、半ば持ち上げるようにして体勢を持ち直させたのも、一回や二回ではなかった。
いくつ目の角を曲がったときであろうか。
「瑠衣、あれ……出口だ！もうすぐだぞ」
数十メートル前方に見えた、開け放しの扉。そこから差し込んでいるのは、赤い炎の光ではなく、白い太陽の輝きに間違いなかった。
二人の全身に、微かな安堵の空気が充ちる。が、それもつかの間のことであった。
後方で起きた轟音に思わず振り返った二人の目に、次々と噴き出してくる爆炎が飛び込んでくる。それが追いかけてくるスピードは、明らかに二人のそれまでの移動速度よりも勝っていた。
「やべぇ……」
このとき初めて、抄樹の背中を焦りが伝う。
有無を言わせず瑠衣の腰に腕を回すと横抱きに抱え上げ、出せる限りのスピードで脚を回転させ始めた。抄樹の全身をアドレナリンが駆け巡り、驚異的な力が信じがたいほどの速度を生む。
渾身の一蹴りで外へと転がり出て、岩陰へと、瑠衣、そしてエー

ルリッヒを放り込み、その上へ抄樹が覆いかぶさったのと、最後の爆発が盛大に壁を吹き飛ばしたのとは、ほぼ同時のことだった。
強い風が三人を嬲る。抄樹が押さえていなければ、一番軽い瑠衣などは木の葉のように飛ばされていたかもしれない。
雹のように降り注いだ大小さまざまな瓦礫がやむのを待って、抄樹がゆっくりと身を起こす。
「大丈夫か……？瑠衣」
そう訊いた抄樹の背中に、瑠衣がそっと手を伸ばす。
「あーちゃんこそ、背中が傷だらけ……ごめんね、いつも」
「俺に取っちゃぁ、お前に傷が付いたほうがよっぽど痛いよ」
そう言って、抄樹は瑠衣の手を引いて立ち上がらせた。
抄樹が慰めのつもりではなく、本心からそう言ったことは、瑠衣には手に取るように判る――彼はいつもそうだった。幼い頃の言葉のとおり、抄樹はどんなときでも、瑠衣のことを護ってきてくれた。
「ありがとう」
その一言に全てを込めて、瑠衣は笑みを向ける。それこそが、抄樹が何よりも大事に思っているものだった。この笑顔を壊さないためなら、自分はどんなことでもできる。
瑠衣の身体をそっと引き寄せ、包み込む。何時ぞやのように堪えきれない想いからではなく、今はただ、心の奥から湧き上がってくるもっと穏やかで温かいものに突き動かされてその腕は動いていた。
「あーちゃん、お父さんとレイ君だ」
抄樹の身体の陰から二人を認め、瑠衣は声を弾ませる。その方向に背を向けていた抄樹にも、下草を踏む音で二人が近づいてくるのは判っていた。
抄樹が首だけで振り返ると、レイと肩越しに目が合った。
「いい加減、その手を離せば？」
死地を潜り抜けてきた功労者に対して、いかにも面白くなさそうにレイが言う。
「俺たちは今の今まで、死ぬ目に会ってきたんだぜ？」

少しぐらいは寛がせてくれよ、と、口を尖らせながらも抄樹が腕を解いたのは、何もレイの言葉に従ったからではない。
開放された瑠衣が、一散に信彦の元へ駆け出していく。
もう二度と会うことはないと思っていた娘を抱き止めた信彦の胸の中には、何よりも、信じられないという思いが強かった。もしかしたら、また、薬が見せている夢なのではないか。そんな恐怖と、子供たちに会えたという喜びが、代わる代わる波状攻撃を繰り返す。容易には信じられなかった。
「お父さん……？」
覗きこんでくる瑠衣の頬を両手で包み込む。その温もりは、夢では有り得なかった。
「瑠衣……本物なんだな？」
「もちろん。帰ろう、迎えに来たのよ」
少し肉付きの良くなった信彦の胸に頬を押し付ける。手首に巻かれた包帯は胸を苦しくさせたけれど、今はもう、そんなことはどうでも良かった。
一頻り信彦との再会を実感した瑠衣は、少し離れたところに立つ一人の女性に気が付く。
「サラさん」
信彦から身を離した瑠衣がその名を呼ぶと、サラは放心した眼差しを向けた。十数人はいたはずの研究所の人間は、彼女以外、もう残ってはいないようだった。
「博士は……エールリッヒ博士は、どうなったのですか……？」
不安そうに組み合わせたサラの手が、細かく震える。もしかしたら、を考えると恐ろしくて、地面に力なく横たわるエールリッヒの元に近寄ることもできないようだった。
跪いたレイがエールリッヒの脈を取り、その正常であることを確かめた上でサラに振り返った。
「意識がないだけです。早々と意識を失ったお陰で、煙もそれほど多くは吸っていないようですし。問題は、この怪我のほうだな。も

しかしたら、脊髄のほうもやられているかもしれない。悪くすると、下半身不随……」
「でも、生きているのね……？」
サラの声は、もう、それまで瑠衣たちに聞かせてきた偽りの冷徹さを含んだものではなくなっている。不安を浮かべたその目は、むしろ、気弱そうといってもいいほどのものだった。
膝を突いたサラに代わり、レイが立ち上がる。一歩後ずさると抄樹の横に立ち、小声ではあるがきつい口調で囁いた。
「何故、彼を助けたんだ？まさか、命を助けられれば感謝して瑠衣さんを狙うのを止めるんじゃないか、何て甘いことを考えているわけではないだろう？」
レイの冷ややかな眼差しを受け流し、抄樹は肩を竦めた。サラの隣にしゃがみこんだ瑠衣を肩越しに示し、何でもないことのように答える。
「仕方ないだろ。瑠衣が助けろって言うんだから」
「瑠衣さんがぁ？」
いささか間の抜けた顔を、レイは抄樹の親指が指すほうへむけてしまう。相手が瑠衣では、『何故』を投げかけることなど到底できはしなかった――あまりに容易にその答えが予想できてしまうので。
「ｓｙｍｐｌｅ ｉｓ ｔｈｅ ｂｅｓｔ だな」
大きな溜め息と共に、レイは思い切り脱力する。なんだか、一人でキリキリしている自分が馬鹿のように思えてきた。
へたり込みたくなるのを堪えて、レイは瑠衣に肩を抱かれたさらに近づく。取り敢えずはどこか民家があるところへ行かなければ、人知れず野垂れ死ぬことになりかねない。
「サラさん、何か乗り物はないのですか？エールリッヒ博士も早いところ医者に見せなければなりませんし」
しかし、サラはそれに対して首を振ることで答える。
「いいえ。脱出のために用意されていた自動車は、全て乗っていかれてしまいました。ここにはもう何も……残っていません」

「では、やはりここは体力勝負といくしかないようですね。抄樹、頼んだ」
「何をしろって？」
　呼ばれて、体力が衰えていたところへの急激な運動のためかうとうとし始めていた信彦に付き添っていた抄樹がやってくる。先ほどの脱出劇の疲れは、殆ど回復していた――身軽い動きがそれを物語っている。
「ここからひたすら東に進むと、２５１号線に出る。そこでヒッチハイクでもして、近場の町に行き、自動車を手に入れて戻ってきて欲しい」
「なんかそれ、無茶苦茶簡単そうに聞こえるけど……？」
「まあ、２５１号線に出るまで――直線距離で３５？、そこから町まで５０？ってところかな」
「う……わ。すげぇらくしょーな道程」
「他に手もないし、君の両肩にここの五人の命が懸かっているんだ。頑張ってくれ」
　肩を叩かれて全てを任された抄樹に瑠衣が同伴を申し出るが、それは当然のことながら即座に却下される。抄樹一人なら一日で可能なことが、彼女が付いてきたのでは下手をすると数日を要することになりかねない。
　それ以上グズついて瑠衣が再び付いてくることを主張することを恐れたのか、抄樹は皆に手を振り、その場を後にする。先の安全を祈る瑠衣の、心ならずも頼る思いが滲んでしまったレイの、そして、血の繋がらぬ息子に対する信頼を浮かべた信彦の、各々の眼差しを背に受け、抄樹は身軽く走り去っていった。
　残された五人は、それぞれの物思いに耽る。
　その所在のない閑寂を破ったのは、脱出して以降初めて発せられたエールリッヒの呻き声だった。
　サラが弾かれたように顔を上げる。
「博士……！？気付かれたのですか！？」

エールリッヒの視線は縋り付かんばかりのサラを素通りし、宙をさ迷った。
「ここは……？何故、私はここに？何故、私は生きているのだ？」
彼の声は、心底、その現実を疑うものだった。
＊
丸められたサラの白衣を頭の下にあてがわれたエールリッヒは、首と目だけで周囲を見回した。それが意識してなのか、それとも無意識でなのかは、傍で見ているものには判断しがたかった――とにかく、その時彼は、首から下を動かすことがほんのわずかもなかったのだ。
「博士、具合はどうでしょうか？……ここは、何か感じますか？」
言いながら右足に触れたレイには答えずに、エールリッヒは、サラ、信彦、レイ、そして瑠衣の顔を順繰りに視界に収めて呟いた。
「他のものはどうした？」
それは独り言のようにも取れたし、サラに対する問い掛けのようにも取れた。後者だと解釈したサラは、心持ち目を伏せて答える。
「皆、逃げました。爆発が所外の人間を呼ぶことになるのを恐れたのではないかと思われます」
「自分たちが行っていたことを誇ることもできないというのか……所詮、烏合の衆だな」
「彼らには信念などありませんでしたから。ただ、自分たちのしたい研究ができたからここにいた、それだけだったのだと、私には見えました」
その口調が、他の研究員が研究所に留まっていた動機と自分のそれとを隔てているという自覚は、サラ自身にはなかった。
無言で瞑目したエールリッヒの心中を考え、サラはそっと唇を噛む。
沈没する船を見捨てる鼠さながらに去っていった彼らを責めることはできないと解ってはいても、自分の創ったものが当初の理想とはかけ離れてしまったことを突き付けられたエールリッヒを前にし

ては、声に含まれた苦いものを払拭することはサラには難しかった。
「博士、僕の訊いた事に答えてください」
かつての仲間の行動について慨嘆を隠し切れない二人の間に、レイが再び割り込む。そこに多少の苛立ちが含まれているのは、彼にもなかなか整理の付け難い複雑な感情ゆえだっただろう。もしも炎に包まれたコントロールルームにいたのが自分だったとして、足元にエールリッヒが倒れている場面に遭遇したとしても、この男を助けようなどとは決して思わなかったに違いない。
軽く目の前で手を振ってエールリッヒの注意を引き、更に問う。
「足を動かすことはできますか？」
「足、だと……？動くに――」
決まっているではないか、と、続けることはできなかった。エールリッヒは目を見開き、サラの手を借りて上体を起こすと自らの足へと手を伸ばした。その指先にあるのは他人の肉体に触れたときと同じ感覚。手には暖かいものを触っているという感触があるというのに、その足が自分の手によって触れられているという応答を返さないが故に、自分の身体に触っているとは到底思えなかった。
「やはり、やられていましたね。一時的なものなら幸いですが、そうはいかないでしょう」
「もう少し柔らかい言い方はできないのですか」
明らかにどうでも良いという声音のレイに対してサラが咎める色を滲ませたが、対する彼のほうは一向に意に介した様子もなく肩を竦めて返す。
「そうする義理がどこにありますか。確かに自爆装置を操作したのは僕でしたが、そもそもの原因はそちらにあると思いますよ」
口調は穏やかであったが、内容は決してそうとは言えないその台詞に、サラが面を伏せて口を噤む。その頬にかかった一筋の毛を見て、流石に、自分たちのことについては殆ど知らないと言って良い彼女に対しての今の言葉は不適切だと気付いたレイは、気まずく黙り込んだ。

むっつりとした沈黙が支配した三人の頭上に、新しい一石が投じられる。それが居心地の悪さを一掃した。

「ねぇ、ちょっと、いいかな。ルナが……博士と話をしたいって」

彼女の言葉に一同が返事を考える暇はなかった。一瞬後、そこに存在したのは、ルナだったのだから。

「ル……ナ」

名を呼んだエールリッヒを、ルナは膝を折ることもなく、高い位置から見下ろしていた。その唇は固く結ばれたままである。

わずかな揺らぎも無い、ルナの眼差し。

張り詰めた空気は爪で弾けば涼やかな音を立てることさえしそうだった。

誰もがその沈黙に耐え切れなくなった頃、ようやくルナの口が開かれた。まるで実体が存在しないかのように、コソリとも音を立てず、腰を下ろす。両手を土に突き、わずかに上体を傾けた。

「あなたにとって、私は何だったのですか？」

それは、ルナが答えを求めた、唯一の問いだった。そして、その答えを得ることを恐れた、唯一の問い。

研究所で過ごした記憶のない瑠衣と異なり、ルナにとってのエールリッヒは、まさに父親のような存在だった。彼の笑顔を見たくて、言われるままに実験を繰り返した。

エールリッヒを慕うルナの気持ちは、信彦に対する瑠衣と同じもの――いや、それ以上だったかもしれない。瑠衣には信彦の他に、抄樹やレイがいた。しかし、ルナにはエールリッヒしかいなかった。瑠衣では三人に分散していたものが、ルナではエールリッヒただ一人に向けられていた。

だが、自分の能力がどんな意味を持つかということに気付いたときから、彼女と彼との関係は音を立てて崩れ去ってしまったのだ。彼がどんなに優しい言葉を掛けてくれたとしても、それはあくまでも『役に立つ道具』に対するものでしかないという考えは、どんなに否定してみても、後から後からルナの心に吹き出てしまう。

拭いきれないその疑惑に耐え切れなくて、自分は信彦と行動を共にしたのだったのではなかろうか。
もしも、気付かずにいられたら、エールリッヒと信彦のどちらを選んでいただろうか。
それでも信彦を取ったに違いないという確信は、砂の城よりも脆かった。
現に、今このときも、ルナの心のどこかは、エールリッヒの口から出るただ一つの答えを切望しているのだ。
「エールリッヒ博士、答えてください」
お願いだから、と泣きじゃくる子供を能面の表情ですっぽりと隠し、ルナは促す。そのルナの冷ややかな眼差しを、エールリッヒは真正面から静かに受け止めた。その瞳には、一片の揺らぎもない。
ピクリと、一瞬チックのように動いたエールリッヒの下唇に、ルナの目が吸いつけられる。だが、結局それは開かれず、再びきつく結ばれたきりだった。
「博士……？」
気遣わしげに呼び掛けたサラの声に反応したのか、あるいは彼の中で何らかの動きがあったのか、エールリッヒの目がわずかに宙をさ迷った。
そして、下された宣告。
「お前は、ただの道具だよ」
サラの視線が瞬時にエールリッヒに、そしてルナに飛び、レイの肩が微かに揺れる。
ルナは――身動ぎ一つしなかった。
「お前は、私が神と崇めたひとの姿を映した人形に、お前を真の神たらしめんとする能力を吹き込んだものだ」
静かにエールリッヒは目を閉じる。
「――ただの、道具だったよ」
ルナが震えるような息を吐く。頬を一筋だけ伝った涙は、すぐに乾いて消え失せた。

迷いの消えた双眸で、ルナは明確な意志を持って告げる。
「目を開けて私を見なさい、エールリッヒ」
最大限の力を、ルナは言葉の一つ一つに込める――それに逆らえる人間は、おそらく、地上のどこにも存在することはできないであろう。どこか焦点がずれたエールリッヒの視線と、今はそこにある力を否定することは誰にもできないルナの視線とが絡まりあう。
「あなたの自我に命じます。あなたの『神』のことは忘れなさい――私のことも。あなたは、『神』を創ることはできなかった。そして、あなたが舐めた辛酸を全て忘れることを、私は、エールリッヒ、あなたに命じます」
ふっと、ルナの肩から力が抜ける。心からの微笑みが、彼女の白い頬に浮かんだ。
「おやすみなさい――お父さん」
ルナのその言葉と同時に、エールリッヒの瞼が閉ざされる。そして訪れた、安らかな眠り――それは、彼が再びその手に入れることを望んだものだった。
今、彼の顔に浮かぶのは、これからは決して失われることのない安堵の表情。
「おやすみなさい」
繰り返したルナの言葉は、誰に向けたものだったのか。
それが唯一の支えであるかのように、彼女は自らの身体を両腕で抱きしめる。
「ル……ナさん？本当は、博士……」
「大丈夫だよ、レイ君。ルナは解ってる」
「瑠衣さん？」
「ルナは眠ったよ。今度こそ、本当に。……おやすみ……ルナ」
瑠衣はルナを抱きしめる。
彼女の眠りは、もう決して妨げられることはない。
「私も、あなたを愛してる」
瑠衣がそっと囁いた。自分自身の奥底に向けて。

ルナが現れることは、もう二度とないだろうことが、少し寂しかった。

エピローグ・サラ

高く抜ける真っ青な空を見上げ、サラは大きくシーツを打ち振るう。

山間にあるこの村では自動車を持つものも少なく、その空気は大きく息を吸っても喉に不快感を与えることはなかった。

――ここに居ついてから、もう三年にもなる。

技術者も医者もいないこの小さな山村では、エールリッヒの専門知識は非常に重宝がられている。今日も近所の老夫婦に呼ばれ、車椅子を転がして発電機の修理に出掛けていった。

今の彼は、研究所にいたものが見ても気付かないだろうと思われるほど、あの頃とは全く違う、穏やかな眼差しをするようになっていた。

ルナ、あるいは瑠衣と呼ばれていたあの少女の言うとおり、エールリッヒは、再び目を開けたときには全てを忘れ去っていた――いや、正確には、彼を駆り立てていたものは全て、だ。

自分が何ものかも、過去にどんな経験をしてきたのかということも覚えている一方で、あの研究に関わることだけはスッポリと彼の中から抜け落ちているのだ。それが消えたことは、彼にとってかなり大きな空白を生じたはずであるというのに、エールリッヒは何の違和感も抱いていないようだった。

そして何より、彼を狂信へと駆り立てた、唯一人の人に対する思慕と、彼女を失うことになった経緯に対する罪悪感も。

サラは、断片的にエールリッヒの過去について聞いていた。不意に心の蓋がズレてしまうのか、時々ポツリ、ポツリと話すのだ。それらを繋ぎ合わせて判ったのは、エールリッヒが家族を失った後に身を寄せた教会にいた、ルシアナというシスターのこと。彼女が敵兵をかくまい、それをエールリッヒが密告したことで全てを失ってしまったことだった。

時折、何かに呼ばれたように遠くを見つめることがある。しかし、それもほんの一瞬のこと。すぐに彼の心は現実に帰ってくる。
かつての、彼の心を映していた暗い瞳はもう二度と戻ってくることはない。
たとえ自分のことを忘れられていても、サラは、静かな笑い声さえ上げるようになったエールリッヒの傍で、その笑顔を見ていられることを嬉しく思う。
「あなたには辛い思いをさせることになる」
あの少女は別れるときにそう言ったが、サラは決してそうではなかった。
研究所で共有したときよりも、今このとき、そしてこれからの道を共に歩いて行けるということこそ、大事にしたい。
あまりにひた向き過ぎたエールリッヒの心が、また再び打ちのめされるようなことがないように、サラは願う。
二度と再び、闇が彼を包み込むことのないことを。

エピローグ・レイ（前書き）

ちょっと、レイ視点でのエピローグを追加しました。
後味、悪いかもしれません……。
でも、レイなら、こう思うような気がするのです……。

エピローグ・レイ

あれから、十年の月日が流れた。
僕は今、国連に籍を置いている。
ここでの日々の中、僕は『あの時』知らなかった数多くの事実を目の前に突き付けられている。
そう、あの頃の僕は、まさに、何も知らない子供だったのだ。自分は全てを知っていると思い込み、『悲惨な現場』として入ってくる情報がすでに淘汰しつくされたものであることにも気付かなかった、愚かな子供――それを思い知らされた。
今、エールリッヒが目前に立ち、あの時と同じ提案をしたとしたら、果たして僕は、それを拒否することができるだろうか。
看護婦として赤十字で働く瑠衣(るい)さん。そして、常に彼女の傍にいる抄樹(あつき)は、僕よりも更に激しい現場に身を置きながらも、僕のような迷いは一切持っていない。
ただひたすら、ヒトの善性を信じている瑠衣さんと、その瑠衣さんを信じる抄樹。
あまりにも単純な二人の信念は、時に何よりも強固な鎧となる――二人の持つ強さが僕にもあれば、僕はこれ以上の自問を繰り返すことはないのだが。
僕には、瑠衣さんには見えることのできるものが、見えない。
自らの弱さを噛み締めながらも、僕は再び願ってしまう。エールリッヒが僕の前に立ち、手を差し伸べることを。
その時、僕はおそらく躊躇いはしないだろう――いや、きっと。
なぜなら、このヒトの世界で争いが絶えることは、決して、無いからだ。
今、このときも、共食いは続いている。

エピローグ・レイ（後書き）

と、いうことで……もしもこのエピローグがないほうが良かった、と思われたら、是非、ご一報を。
読んでくださって、ありがとうございました。
もしも感想などいただければ、励みになります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2560x/

trinity

2011年12月27日20時54分発行